久　宝　寺　遺　跡

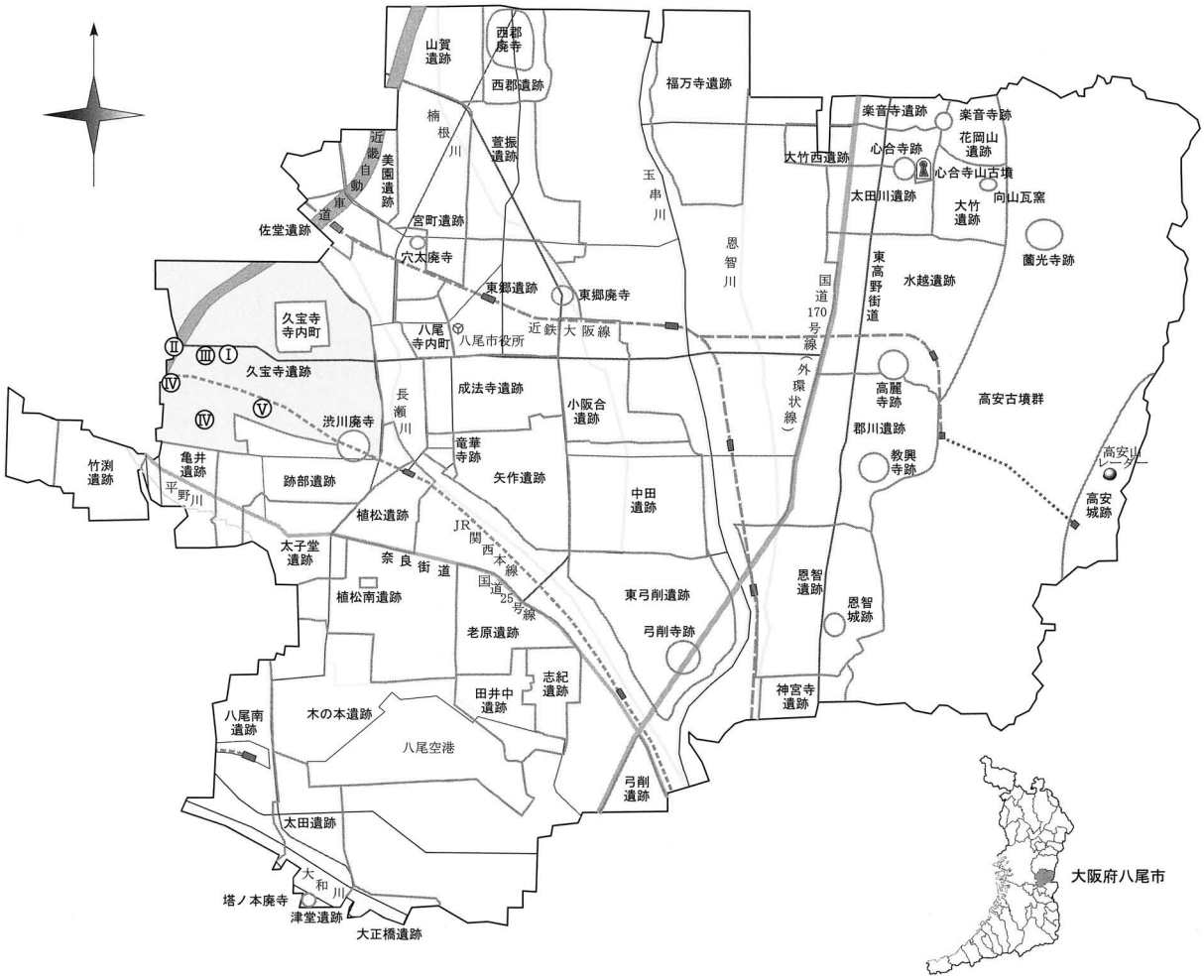
Ⅰ　久宝寺遺跡（第 13 次調査）
Ⅱ　久宝寺遺跡（第 14 次調査）
Ⅲ　久宝寺遺跡（第 18 次調査）
Ⅳ　久宝寺遺跡（第 27 次調査）
Ⅴ　久宝寺遺跡（第 59 次調査）

２００９年

財団法人　八尾市文化財調査研究会

久　宝　寺　遺　跡

Ⅰ　久宝寺遺跡（第 13 次調査）
Ⅱ　久宝寺遺跡（第 14 次調査）
Ⅲ　久宝寺遺跡（第 18 次調査）
Ⅳ　久宝寺遺跡（第 27 次調査）
Ⅴ　久宝寺遺跡（第 59 次調査）



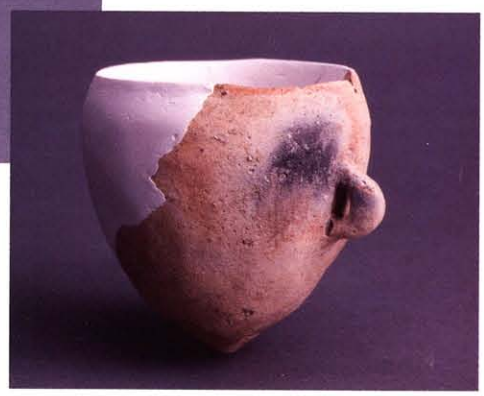
２００９年

財団法人　八尾市文化財調査研究会

巻頭図版

久宝寺遺跡第13次　環形付木製品

久宝寺遺跡第18次　台付短頸壺



把手付鉢

はしがき

八尾市は大阪府の東部に位置し、旧大和川が形成した河内平野の中心部にあたります。本市は古くから人々の生活の場として栄えていた地域であり、現在でも先人が残した貴重な文化遺産が数多く残っています。

近年、都市開発に伴い各種土木工事が実施され、貴重な埋蔵文化財が破壊され消滅する恐れがあります。文化財は現代に生きる私たちだけでなく、子々孫々まで伝え残さなければならないものです。そこでそれらに対して事前の発掘調査を実施し、記録保存を行い、先人が残してくれた貴重な文化財を後世に伝承することが我々の責務であると認識する次第であります。

本書は、平成３・４・６・11・16年度に行いました民間の開発に伴う発掘調査の成果を収録したものであります。第13次調査で出土した環形付木製品は、類例が少なく非常に珍しいものです。第14次調査では古墳時代前期の竪穴住居が見つかり、この地で生活を営んでいることが明らかになりました。第18次調査では朝鮮半島と係わりがある土器が出土し、全国的にも注目を集めました。第27次調査では、四国や北陸地方から持ち運ばれた土器が出土していることから、当遺跡では古来より他地域と活発な往来があったことが判明しました。第59次調査では、古墳時代中期の集落や、飛鳥時代の集落が見つかっています。

本書が学術研究の資料として、また文化財保護への啓発に広く活用されることを願うものであります。

最後になりましたが、この発掘調査が、関係諸機関及び地元の皆様の多大なる御理解と御協力によって進めることができましたことに深く感謝の意を表します。今後とも文化財保護に一層の御指導・御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

平成21年３月

財団法人　八尾市文化財調査研究会

理事長　岩﨑　健二

序

1．本書は、財団法人八尾市文化財調査研究会が平成３・４・６・11・16年度に実施した、民間の開発に伴う発掘調査の成果報告を収録したもので、内業整理及び本書作成の業務は各現地調査終了後に着手し、平成20年11月をもって終了した。

1．本書に収録した報告は、下記の目次のとおりである。

1．本書に収録した各調査報告の文責は、Ⅰ・Ⅳ・Ⅴは西村公助、Ⅱ・Ⅲは坪田真一である。全体の構成・編集は西村が行った。

1．本書掲載の地図は、大阪府八尾市役所発行の2,500分の１（平成８年７月発行）をもとに作成した。

1．本書で用いた図に付す高さの基準は東京湾標準潮位（T.P.）で示し、方位は国土座標第Ⅵ座標系の座標北を示している。

1．遺物実測図は、断面の表示によって下記のように分類した。

　弥生土器・土師器・瓦器－白、須恵器･陶磁器－黒、木器・瓦・石－斜線

1．色については『新版　標準土色帖』1996　農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修を使用した。

1．出土遺物掲載番号のゴシック体算用数字は、土器および土製品を表す。数字の前のWは木製品（自然木・植物の種なども含む）、Ｓは石製品（加工のない石も含む）である。

1．現地調査および本書作成にあたっては、八尾市教育委員会文化財課ならびに、財団法人八尾市文化財調査研究会職員の協力を得た。

1．各調査に際しては、写真・カラースライド・実測図を、後世への記録として多数作成した。各方面での幅広い活用を希望する。

目　次

巻頭図版
はしがき
序
Ⅰ　久宝寺遺跡第 13 次調査（ＫＨ91－13）……1
Ⅱ　久宝寺遺跡第 14 次調査（ＫＨ92－14）……35
Ⅲ　久宝寺遺跡第 18 次調査（ＫＨ94－18）……75
Ⅳ　久宝寺遺跡第 27 次調査（ＫＨ99－27）……103
Ⅴ　久宝寺遺跡第 59 次調査（ＫＨ2004－59）……151
報告書抄録

Ⅰ　久宝寺遺跡第13次調査（ＫＨ91－13）

例　言

1．本書は、大阪府八尾市神武町２番35号で実施した設計棟他建設に伴う久宝寺遺跡第13次調査（ＫＨ91－13）の発掘調査報告書である。

1．本調査は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が㈱クボタから委託を受けて実施したものである。

1．調査は当調査研究会　西村公助が担当した。

1．現地調査は平成３年12月16日に着手し、平成４年１月23日に終了した。調査面積は約500㎡である。

1．現地調査には嶋村綾子、中西明美、林　成光の参加を得た。（敬称略、五十音順）

1．内業整理は下記が参加し、現地調査終了後に着手して平成20年８月31日をもって終了した。（敬称略、五十音順）

遺物復元－佐藤哲也、松井三千子

遺物実測－岩沢玲子、中西、西岡千恵子、樋口　薫、古川晴久

図面レイアウト　トレース－市森千恵子、西村

遺物写真撮影－木村健明、西村

1．本書の執筆及び編集は西村が行った。

凡　例

1．古墳時代初頭～前期の遺物の器種分類や時期などは、原田昌則1993「Ⅱ久宝寺遺跡（第１次調査）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』（財）八尾市文化財調査研究会報告37　（財）八尾市文化財調査研究会に準じる。

本　文　目　次

第１章　はじめに……1
第２章　調査概要……3
　第１節　調査の方法と経過……3
　第２節　層序……4
　第３節　検出遺構と出土遺物……4
第３章　まとめ……33

挿　図　目　次

第１図　調査地周辺図……2
第２図　調査区設定図および地区割図……3
第３図　西壁地層断面図……4
第４図　第１～３面平面図……5
第５図　ＳＥ201・ＳＫ201平・断面図……6
第６図　ＳＥ201・ＳＫ201出土遺物実測図……7
第７図　ＮＲ201平・断面図……10
第８図　ＮＲ201出土遺物実測図①……11
第９図　ＮＲ201出土遺物実測図②……12
第10図　ＮＲ201出土遺物実測図③……13
第11図　ＮＲ201出土遺物実測図④……14
第12図　ＮＲ201出土遺物実測図⑤……15
第13図　ＮＲ201出土遺物実測図⑥……16
第14図　ＳＩ301平・断面図……23
第15図　ＳＩ302平・断面図……24
第16図　ＳＥ301平・断面図……25
第17図　ＳＩ301・302、ＳＥ301、ＳＫ301・303・304・309出土遺物実測図……27
第18図　ＳＫ313平・断面図……28
第19図　ＳＫ313・316、ＳＤ307、５層出土遺物実測図……30

表　目　次

表１　第１面溝一覧表……6
表２　第２面土坑一覧表……7
表３　第２面小穴一覧表……7

表４　出土遺物観察表（１）……８
表５　出土遺物観察表（２）……16
表６　出土遺物観察表（３）……17
表７　出土遺物観察表（４）……18
表８　出土遺物観察表（５）……19
表９　出土遺物観察表（６）……20
表10　出土遺物観察表（７）……21
表11　出土遺物観察表（８）……22
表12　出土遺物観察表（９）……24
表13　出土遺物観察表(10)……26
表14　第３面土坑一覧表……29
表15　第３面小穴一覧表……29
表16　第３面溝一覧表（１）……29
表17　第３面溝一覧表（２）……31
表18　出土遺物観察表(11)……31
表19　出土遺物観察表(12)……32

図　版　目　次

図版１　調査地周辺(西から)　調査前(南から)
図版２　北区第１面全景(北から)　南区第１面全景(北から)
図版３　北区第２面全景(北から)　南区第２面全景(北から)
図版４　北区第３面全景(北から)　南区第３面全景(北から)
図版５　ＳＥ201(南から)　ＳＫ201(南から)
図版６　ＮＲ201(東から)　ＮＲ201遺物出土状況(南から)　ＮＲ201掘削状況(北から)
図版７　ＮＲ201環形付木製品出土状況(西から)　環形付木製品出土状況(西から)
図版８　ＳＩ301(北西から)　ＳＩ302(北西から)
図版９　ＳＥ301(西から)　ＳＥ301遺物出土状況(西から)
図版10　第３面掘削状況(南から)　ＳＫ313(南から)
図版11　ＳＫ201、ＮＲ201出土遺物
図版12　ＮＲ201出土遺物
図版13　ＮＲ201出土遺物
図版14　ＮＲ201出土遺物
図版15　ＮＲ201出土遺物
図版16　ＮＲ201出土遺物
図版17　ＳＩ302、ＳＥ301、ＳＫ309、ＳＫ313、５層出土遺物

第１章　はじめに

久宝寺遺跡は、八尾市の西部に位置し、河内平野を北西方向に貫流する長瀬川と平野川に挟まれた沖積地に立地する。本遺跡は、現在の行政区画では、北久宝寺・久宝寺・西久宝寺・南久宝寺・神武町・北亀井町・龍華町・渋川町に存在し、東西約1.8km、南北約1.7kmがその遺跡の範囲である。

久宝寺遺跡周辺には、東に渋川廃寺、南東に跡部遺跡、南西に亀井遺跡、北に佐堂遺跡、西に大阪市の加美遺跡が隣接している。

本遺跡の発見の契機は、1935年(昭和10年)に久宝寺五丁目で行われた道路工事中に、弥生～古墳時代の土器および丸木船の残片などが出土したことによる(吉岡1988)。しかしその後、発掘調査は実施されることなく、本遺跡の実態は十分把握できていなかった。

本遺跡における本格的な埋蔵文化財の調査は、1973～1974年(昭和48～49年)に実施した近畿自動車道の計画に伴う試掘調査である。この調査では弥生時代～中世に至る遺構を確認した。その後、試掘結果をもとに、(財)大阪文化財センター(現(財)大阪府文化財センター　以下センター)が、昭和55～61年まで近畿自動車道建設に伴う発掘調査(久宝寺遺跡　北地区・久宝寺遺跡　南地区・亀井北遺跡)を実施した。その結果、弥生時代～近代までの遺構および遺物が多数見つかり、集落を営んでいたことが判明した。なかでも特筆に値する遺物としては、久宝寺遺跡南地区で出土した古墳時代前期の準構造船(一瀬他1987)があげられ、全国的に注目を集める遺跡となった。

この調査以降、本遺跡内では大阪府教育委員会(以下府教委)、センター、八尾市教育委員会(以下市教委)、(財)八尾市文化財調査研究会(以下研究会)の各関係機関によって数多くの発掘調査が行なわれている。

今回報告する研究会第13次調査地の西側約100～150ｍ地点では、研究会第18次調査(ＫＨ94－18)、同第32次調査(ＫＨ2000－32)が行われている。第18次調査では古墳時代初頭に比定できる台脚付短頸壺や把手付鉢が出土した。これらは朝鮮半島の土器に似ており、同半島との交流を示す資料として注目されている(本書Ⅲ)。また、第32次調査では古墳時代初頭～前期の竪穴住居が検出され、居住域の存在が明らかになった（森本2001)。

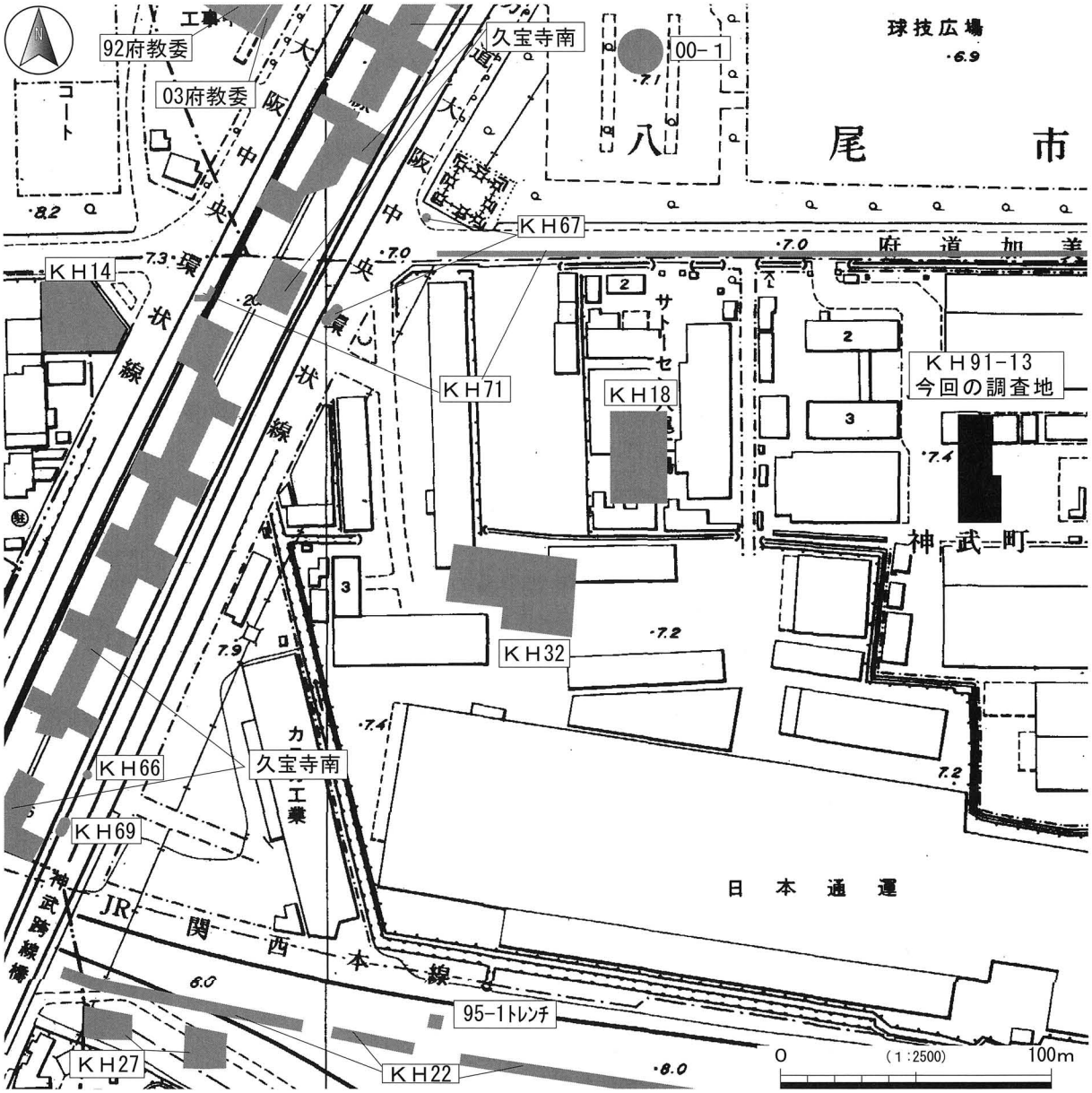
北西側約100ｍ地点の研究会第71次調査(ＫＨ2006－71)では、13区の第５層から布留式古相の土器が出土しており、14区では遺構を検出している(樋口2007)。また、北西側約200ｍ地点ではセンターが下水道に伴う調査を行っており、生産域を検出している(亀井他2007)。

東側約350ｍ地点の研究会第６次調査(ＫＨ90－６)では、布留式古相の竪穴住居が検出され、さらに庄内式古相の井戸も検出している(原田1993)。また、南に隣接する研究会第35次調査(ＫＨ2000－35)でも、古墳時代初頭～前期の土坑などが検出され(森本2002)、古墳時代初頭～前期の居住域の存在が明らかになっている。

参考文献

・吉岡　哲　　1988『考古編　第三章 』『八尾市史(前近代)』本文編　八尾市役所
・寺川史郎他　1987『久宝寺北(その１～３)近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告』(財)大阪文化財センター
・松岡良憲他　1987『久宝寺南(その１)』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター

・一瀬和夫他　1987『久宝寺南（その２）』(財)大阪文化財センター
・服部文章他　1986『亀井北（その１）』(財)大阪文化財センター
・奥　和之他　1986『亀井北（その２）』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
・原田昌則　1993「Ⅲ　久宝寺遺跡第６次調査(KH90－６)」　(財)八尾市文化財調査研究会報告37　(財)八尾市文化財調査研究会
・森本めぐみ　2001「３.久宝寺遺跡第32次調査(KH99－32)」『平成12年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
・森本めぐみ　2002「Ⅰ.久宝寺遺跡第35次調査(KH2000－35)」『八尾市立埋蔵文化財調査センター報告３』八尾市教育委員会　(財)八尾市文化財調査研究会
・亀井　聡他　2007『八尾市　久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅶ－寝屋川流域下水道竜華水みらいセンター水処理施設等建設事業に伴う発掘調査他－』　(財)大阪府文化財センター調査報告書　第156集　財団法人大阪府文化財センター
・樋口　薫　2007『久宝寺遺跡第71次調査』大阪府工業用水道改良事業配水管布設工事Φ400(八尾中央線分岐)に伴う埋蔵文化財発掘調査　(財)八尾市文化財調査研究会報告107　(財)八尾市文化財調査研究会



第１図　調査地周辺図

第２章　調査概要

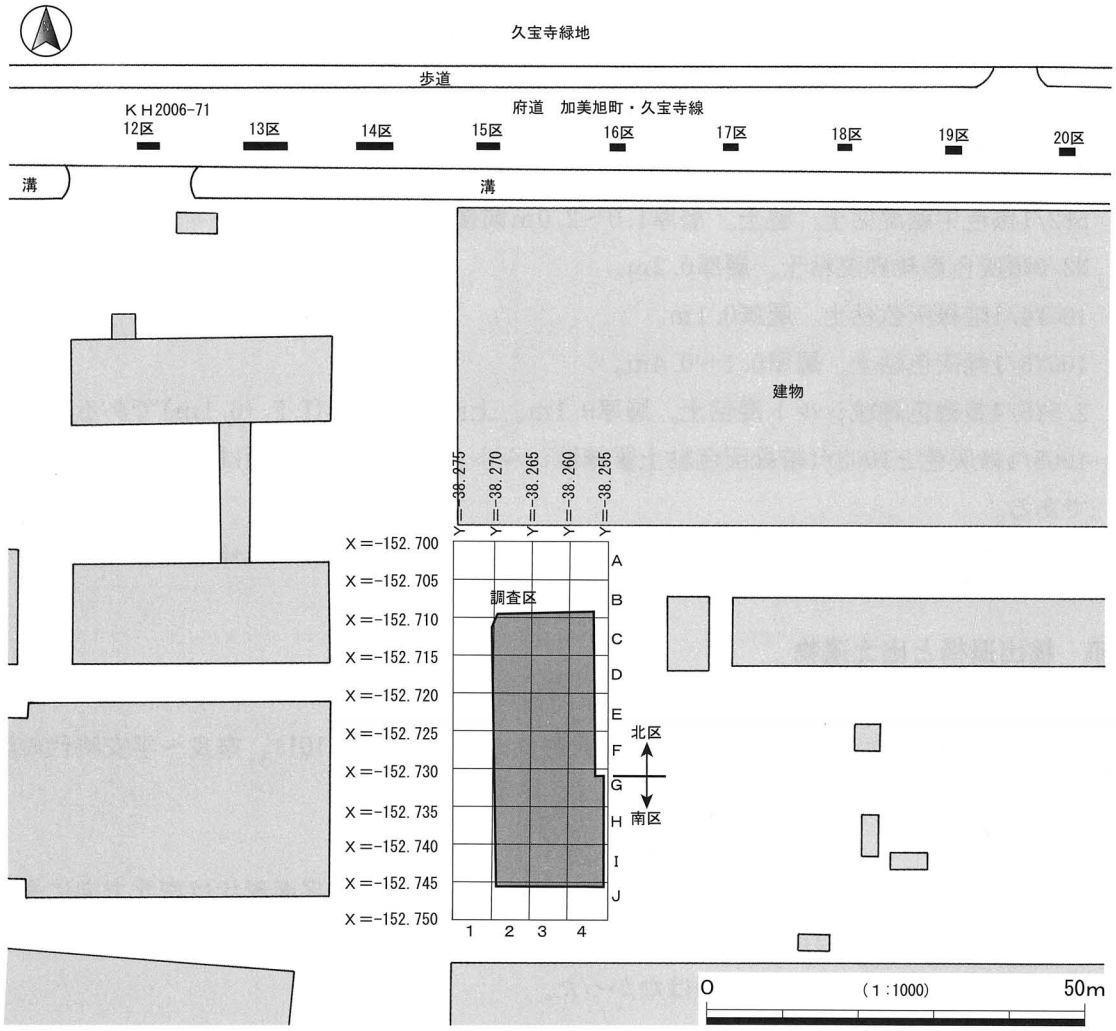
第１節　調査の方法と経過

今回の調査は、設計棟他建設に伴うもので、建物基礎部分に南北に長い調査区を設定した。調査は、掘削土の置き場所が狭いことから、南北に分割して行った。北部を北区、南部を南区と呼称する。

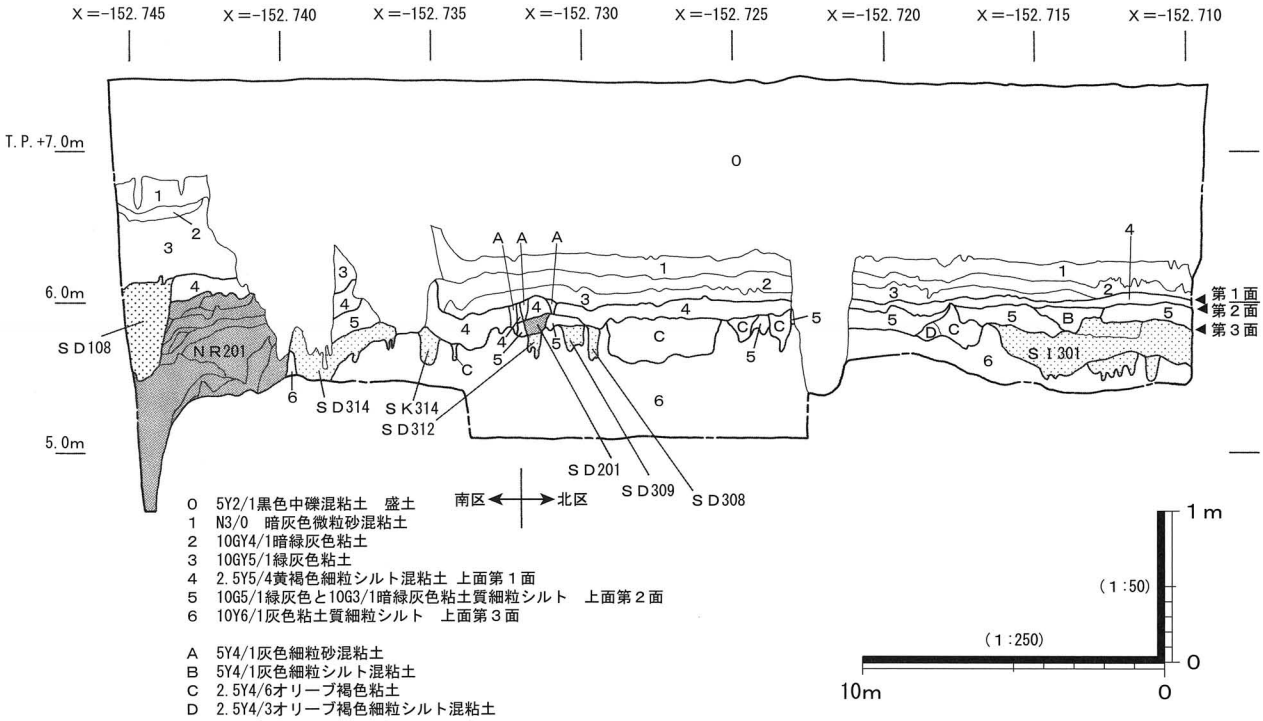
調査は、市教委の埋蔵文化財調査指示書に従い、現地表下1.4m前後までの地層を機械で掘削し、以下0.4mの厚みの地層については人力で掘削を行った。

調査においては、国土座標第Ⅵ座標系を基準とし地区割りを設定した。調査地の北西隅を調査基準点（Ｘ＝－152.700　Ｙ＝－38.275）とし、東西20m、南北50mの範囲を５ｍメッシュで40地区に区画する方法を採用した。地区の呼称は、北西隅を起点として、１区画の南西隅の交点を優先させ、東西方向を算用数字（西から１～４）、南北方向をアルファベット（北からＡ～Ｊ）で示し、１Ａ～４Ｊ地区と表記した。

調査の結果、**第１面**では奈良～鎌倉時代と近世、**第２面**では古墳時代前期、**第３面**では古墳時



第２図　調査区設定図および地区割図



第３図　西壁地層断面図

代初頭～前期の遺構をそれぞれ検出した。遺物の出土量はコンテナ(縦0.6m×横0.4m×深さ0.2m)26箱である。

第２節　層序

０層　5Y2/1黒色中礫混粘土。盛土。層厚1.0～2.0m前後。

１層　N3/0暗灰色微粒砂混粘土。層厚0.2m。

２層　10GY4/1暗緑灰色粘土。層厚0.1m。

３層　10GY5/1緑灰色粘土。層厚0.1～0.4m。

４層　2.5Y5/4黄褐色細粒シルト混粘土。層厚0.1m。上面は**第１面**(T.P.+6.1m)である。

５層　10G5/1緑灰色と10G3/1暗緑灰色粘土質細粒シルト。層厚0.1m。上面は**第２面**(T.P.+6.0m)である。

６層　10Y6/1灰色粘土質細粒シルト。層厚0.8m以上。上面は**第３面**(T.P.+5.6～5.7m)である。

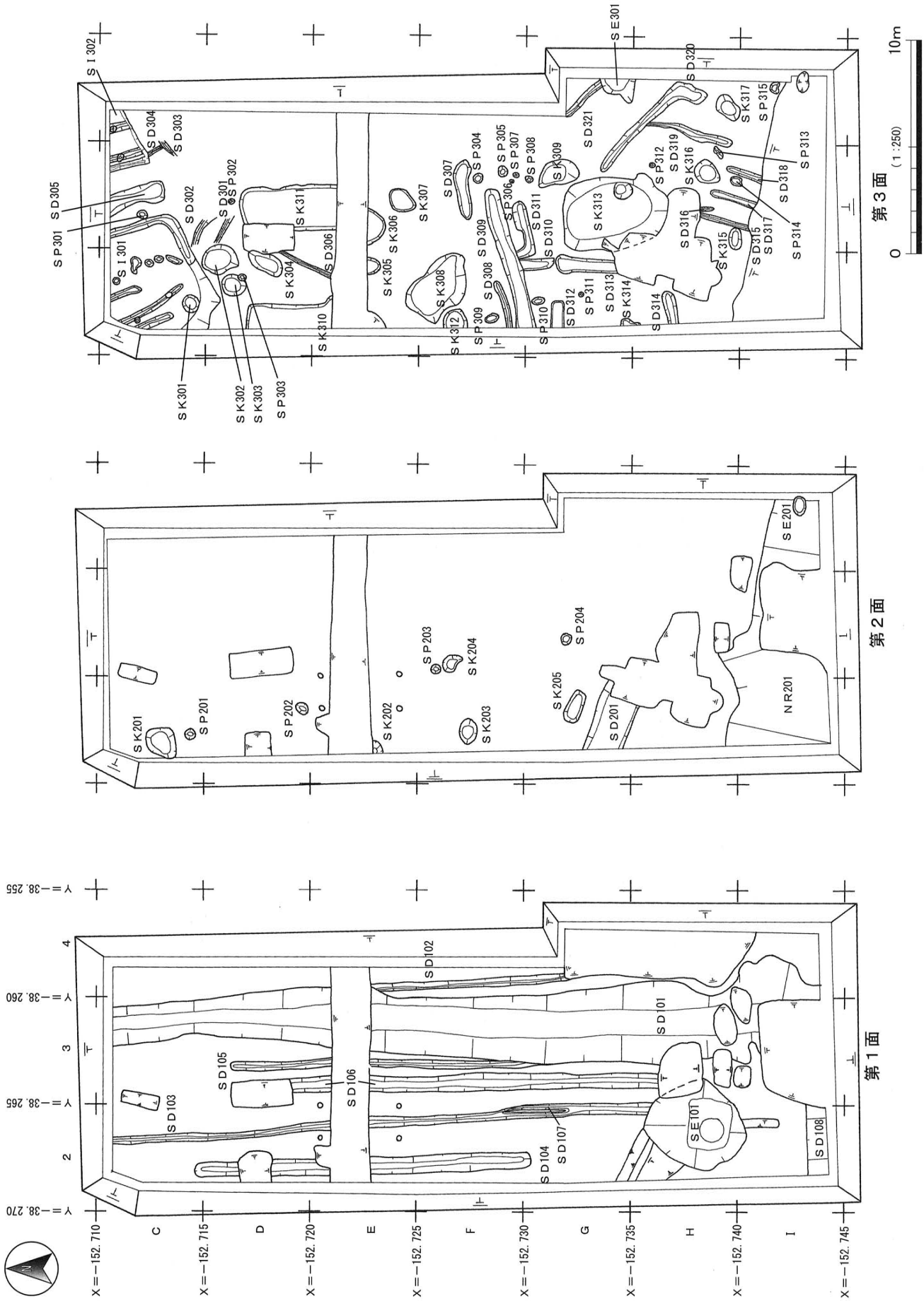
第３節　検出遺構と出土遺物

第１面

４層上面で、近世の井戸１基(ＳＥ101)、鎌倉時代の溝１条(ＳＤ101)、奈良～平安時代の溝７条(ＳＤ102～108)を検出した。

ＳＥ101

２・３ Ｈ・Ｉ地区で検出した。１層上面から切り込む井戸である。平面形状は南北方向に長い楕円形で、長径4.8m、短径4.3mを測る。断面形状は逆台形で、深さ1.5mを測る。埋土は灰色細砂混粘土である。井戸内からの出土遺物はなかった。


第３面
第２面
第１面
0
10m
(1:250)
SI302
SD305
SP301
SI301
SD304
SD303
SD302
SD301
SP302
SK311
SK304
SD306
SK310
SK301
SK302
SK303
SP303
SK306
SK305
SK307
SD307
SP304
SK308
SD309
SP309
SP305
SP306
SP307
SP308
SD311
SD310
SP310
SK309
SK312
SD312
SP311
SD313
SK314
SD314
SK313
SD321
SE301
SD320
SP312
SD319
SK316
SD316
SK315
SD315
SD317
SP314
SK317
SP315
SD318
SP313
SK201
SP201
SP202
SK202
SP203
SK204
SK203
SK205
SP204
SD201
SE201
NR201
SD103
SD105
SD106
SD102
SD101
SD104
SD107
SE101
SD108
Y=−38.270
Y=−38.265
Y=−38.260
Y=−38.255
2
3
4
X=−152.710
X=−152.715
X=−152.720
X=−152.725
X=−152.730
X=−152.735
X=−152.740
X=−152.745
C
D
E
F
G
H
I

第４図　第１～３面平面図

表１　第１面溝一覧表

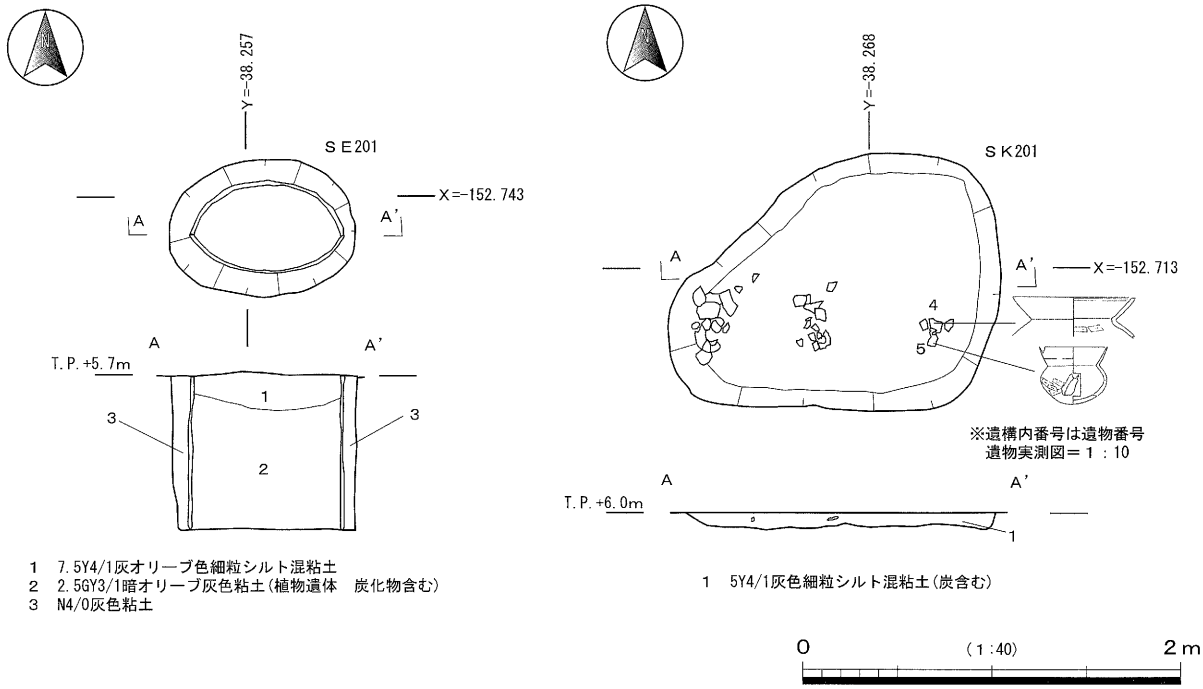
遺構番号	地区	平面形状	幅（m）	断面形状	深さ（m）	埋土	出土遺物
ＳＤ101	３・４Ｃ～Ｉ	２層上面から切り込む　南北方向に伸びる	2.0～4.0	逆台形	0.3	N6/0灰色細粒シルト混粘土	土師器、須恵器、瓦器、陶磁器
ＳＤ102	４Ｅ～Ｇ	４層上面から切り込む　南北方向に伸びる　溝の北部はＳＤ101に切られる	0.4	皿状形	0.03	N4/0灰色細粒砂混粘土	土師器、須恵器、瓦器
ＳＤ103	２・３Ｃ～Ｈ	４層上面から切り込む　南北方向に伸びる　ＳＤ107と合流する	0.3～0.4	逆台形	0.2	N4/0灰色細粒砂混粘土	土師器、須恵器、瓦器
ＳＤ104	２Ｃ～Ｇ	４層上面から切り込む　南北方向に伸びる	0.8	逆台形	0.1	N4/0灰色細粒砂混粘土	土師器、須恵器、瓦器
ＳＤ105	３Ｄ～Ｇ	４層上面から切り込む　南北方向に伸びる	0.4	逆台形	0.4	N4/0灰色細粒砂混粘土	なし
ＳＤ106	３Ｄ～Ｈ	４層上面から切り込む　南北方向に伸びる	0.7～0.8	逆台形	0.2	N4/0灰色細粒砂混粘土	土師器、須恵器、瓦器
ＳＤ107	２・３Ｆ・Ｇ	４層上面から切り込む　南北方向に伸びる　南部と北部はＳＤ103と合流する	0.1～0.2	皿状形	0.1	N4/0灰色細粒砂混粘土	土師器、須恵器、瓦器
ＳＤ108	２・３Ｉ	４層上面から切り込む　東西方向に直線に伸びる	1.7以上	逆台形	0.6以上	N4/0灰色細粒砂混粘土	なし

ＳＤ101～108

ＳＤ101は２層上面から切り込む溝で、直線に伸びる。鎌倉時代の土師器、須恵器、瓦器、陶磁器の破片が出土した。ＳＤ102～108は４層上面から切り込む溝で、ＳＤ102～107は南北に、ＳＤ108は直線に伸びる。ＳＤ102～104･106･107からは奈良～平安時代の土師器、須恵器、瓦器の破片が出土した。なお、検出した各溝の詳細については表１にまとめた。

第２面

５層上面で、古墳時代前期の井戸１基（ＳＥ201）・土坑５基（ＳＫ201～205）・小穴４個（ＳＰ201～204）・溝１条（ＳＤ201）・河川１条（ＮＲ201）を検出した。



第５図　ＳＥ201・ＳＫ201 平・断面図

ＳＥ201

４Ｉ地区で検出した。上面はＮＲ201で切られており本来の平面形状は不明である。検出した平面形状は楕円形で、長径0.9m・短径0.55mを測る。掘形の中央には、半裁して刳り抜いた板を井戸枠として置いていた。この板は、腐食が激しく取り上げることができなかった。断面形状は長方形で、深さ0.8mを測る。井戸枠内の埋土は、上から7.5Y4/2灰オリーブ色細粒シルト混粘土、2.5GY3/1暗オリーブ灰色粘土（植物遺体、炭化物含む）で、掘形の埋土はN4/0灰色粘土である。井戸内からは古式土師器が出土した。このうち図化したものは１である。１は甕で、内面はヘラケズリ、外面はハケナデを施す。出土遺物から、遺構の時期は古墳時代前期の布留式古～中相に比定できる。

ＳＫ201～205

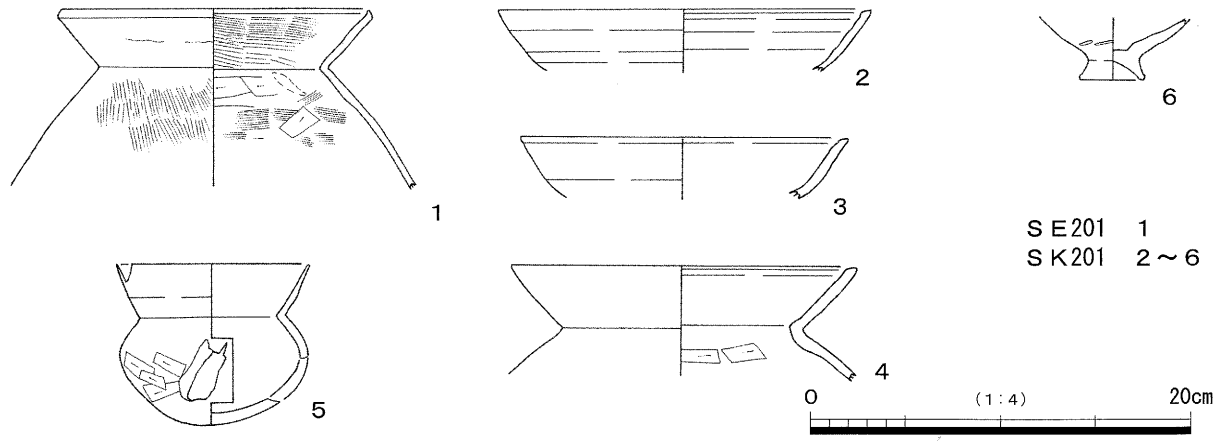
各土坑の平面形状は円形および楕円形を呈す。断面形状は逆台形を呈し、深さ0.07～0.2mを測り、比較的浅い。各土坑の検出状況からは規模や方向などの規則性は見受けられなかった。

表２　第２面土坑一覧表

遺構番号	地区	平面形状	長径(m)	短径(m)	径(m)	断面形状	深さ(m)	埋土	出土遺物
ＳＫ201	２Ｃ	東西方向に長い楕円形	1.7	1.4	－	逆台形	0.1	5Y4/1灰色細粒シルト混粘土(炭含む)	古式土師器
ＳＫ202	２Ｅ	円形か？	－	－	0.5以上	逆台形	0.2以上	5Y4/1灰色細粒シルト混粘土	なし
ＳＫ203	２Ｆ	南北方向に長い楕円形	1.15	0.8	－	逆台形	0.1	5Y4/1灰色細粒シルト混粘土	なし
ＳＫ204	３Ｆ	南北方向に長い楕円形	0.9	0.8	－	逆台形	0.1	5Y4/1灰色細粒シルト混粘土	なし
ＳＫ205	２Ｇ	東西方向に長い楕円形	1.6	1.0	－	逆台形	0.07	5Y4/1灰色細粒シルト混粘土	なし

表３　第２面小穴一覧表

遺構番号	地区	平面形状	長径(m)	短径(m)	径(m)	断面形状	深さ(m)	埋土	出土遺物
ＳＰ201	２Ｃ	円形	－	－	0.5	逆台形	0.15	7.5GY5/1緑灰色細粒砂混粘土	古式土師器
ＳＰ202	２Ｄ	楕円形	0.7	0.5	－	逆台形	0.15	7.5GY5/1緑灰色細粒砂混粘土	古式土師器
ＳＰ203	３Ｆ	円形	－	－	0.4	逆台形	0.15	7.5GY5/1緑灰色細粒砂混粘土	古式土師器
ＳＰ204	３Ｇ	円形	－	－	0.5	逆台形	0.3	7.5GY5/1緑灰色細粒砂混粘土	古式土師器



第６図　ＳＥ201・ＳＫ201出土遺物実測図

表４　出土遺物観察表（１）

遺物番号 図版番号	遺構	器種	法量（cm）	形態・調整 等	色調	胎土	焼成	備考
1	ＳＥ201	古式土師器 甕	口径14.2	口縁部は「く」の字に屈曲し、外反する。端部はつまみ出し、面を形成する。口縁部内面はハケナデ、外面はヨコナデを施し、粘土接合痕がある。体部の内面はハケナデのちヘラケズリを施し、指ナデがある。外面はハケナデを施す。	2.5Y2/1 黒色	１～２mmの 砂粒含む。	良好	
2	ＳＫ201	古式土師器 甕	口径17.4	口縁部は内湾する。口縁部は内外面ともにヨコナデを施す。	7.5YR7/4 にぶい橙色	１～２mmの 砂粒含む。	良好	
3	ＳＫ201	古式土師器 甕	口径15.2	口縁部は内湾する。口縁部は内外面ともにヨコナデを施す。	2.5Y6/2 灰黄色	１～２mmの 砂粒含む。	良好	
4	ＳＫ201	古式土師器 甕	口径16.2	口縁部は内湾する端部は肥厚し、面を形成する。口縁部は内外面ともにヨコナデを施す。体部は内面ヘラケズリ、外面ナデを施す。	5YR8/3 淡橙色	１～２mmの 砂粒含む。	良好	
5 11	ＳＫ201	古式土師器 小型丸底壺	口径9.0 器高7.6	体部は球形である。口縁部は「く」の字に屈曲し、やや内湾しながら外上方に伸びる。口縁部は内外面ともにヨコナデ。体部は内面ナデ、外面上位ナデ、下位ヘラケズリを施す。口縁部の一部を打ち欠いている。体部下位は打ち欠き孔があいている。体部の外面には部分的に黒斑がある。	7.5YR5/4 にぶい褐色	１～２mmの 砂粒含む。 （角閃石を 多く含む生 駒西麓産）	良好	
6 11	ＳＫ201	古式土師器 製塩土器	底径2.8	底部は上げ底である。体部の内面はナデ、外面はタタキ目を施す。裾部は内外面ともにナデを施す。	2.5YR6/3 にぶい橙色	１～２mmの 砂粒含む。	良好	

各土坑のうち、ＳＫ201からは古式土師器が出土した。このうち図化したものは、２～６である。２～４は甕で、口縁部は内湾する。５は小型丸底壺、６は製塩土器である。５は口縁部の一部を打ち欠き、また、体部下位は打ち欠き孔がある。出土遺物から遺構の時期は古墳時代前期の布留式古～中相に比定できる。なお、検出した各土坑の詳細については表２にまとめた。

ＳＰ201～204

各小穴は調査区の西部で検出した。小穴の平面形状は楕円形と円形を呈す。断面形状は逆台形で、深さ0.15～0.2mを測り、比較的浅い。ＳＰ201～204の間隔は5.5mあいており、一列に並んでいることから、柵等の構築物の可能性が考えられる。

ＳＰ201～204からは古式土師器の破片が出土したが、図化できるものはなかった。なお、検出した各小穴の詳細については表３にまとめた。

ＳＤ201

２Ｇ・Ｈ地区で検出した。東西方向に伸びるもので、幅1.8m・深さ0.1mを測る。埋土は5Y4/3暗オリーブ色細粒シルト混粘土である。内部からは古式土師器の破片が出土したが、図化できるものはなかった。

ＮＲ201

２・３Ｈ・Ｉ　４Ｉ地区で検出した。東西方向の流路を持つ。検出幅は6.0m以上を測り、深さは最深部で1.4mを測る。本来の幅は河川の南肩が調査区外のため不明である。埋土は12層を確認した。大きく上下２層に分けることが可能で、上部は流水堆積を示す細粒～粗粒シルトと粘土の互層、下部は湿地状の堆積を示す粘土層であった。２・３Ｉ地区の⑨層内からは、古墳時代初頭庄内式～同前期布留式の古式土師器および木製品が出土した。このうち図化したものは７～89である。また、黒漆を塗った環形付木製品（Ｗ１）が出土した。

７～14は壺である。７は加飾する壺で、口縁部の内外面には部分的に赤色顔料を塗布している。９は体部の外面から叩き割り、孔があけられている。11は口縁部の内面に放射状のヘラミガキを施す。11と12は丁寧にヘラミガキを施している。13は長胴の体部をもつ壺で、外面は粘土紐の接合の痕跡が見られ、粗雑に作られている。二次焼成を受け、表部は著しく磨耗し、全体的に赤～白色系の明るい色を呈している。製塩土器である可能性が高い。15は小型器台か台付壺、16は台付壺になると思われる。

17～50は甕である。18～24の体部外面には太筋のタタキが施され、Ｖ様式系の甕である。23は底部に貫通する孔が１ヶ所あり、甑の可能性が考えられる。

25・27～48は生駒山地西麓産の河内型庄内式甕である。27の底部は突出する平底である。28の底部は平底である。29の底部は丸みのある平底である。30の底部は丸みのある尖り底で、底部の中央には平らな部分がわずかに残る。31の底部は丸みをもつ尖り底である。47の体部の上位には焼成後の穿孔がある。49・50は布留式古相に比定できる布留式甕である。

51～68は高杯である。51～56の杯部は平坦で、口縁部は外上方へ直線に伸びる。57は布留式古相の高杯で、裾部の内面には布目の痕跡が明瞭に残っていた。58・59の杯部は平坦で、口縁部は二段に屈曲し外上方へ直線に伸びる。60・61は椀形。60～63は低脚である。68の裾内面にはヘラ状工具による記号文がある。58～63は庄内式新相に、64は布留式中相に比定できる。

69～77は鉢である。69の体部内面は横方向のヘラミガキを丁寧に施した後、放射状に施す。71・73～76は体部の外面にヘラケズリを施す。77は突出する上げ底で、縦長の器形である。

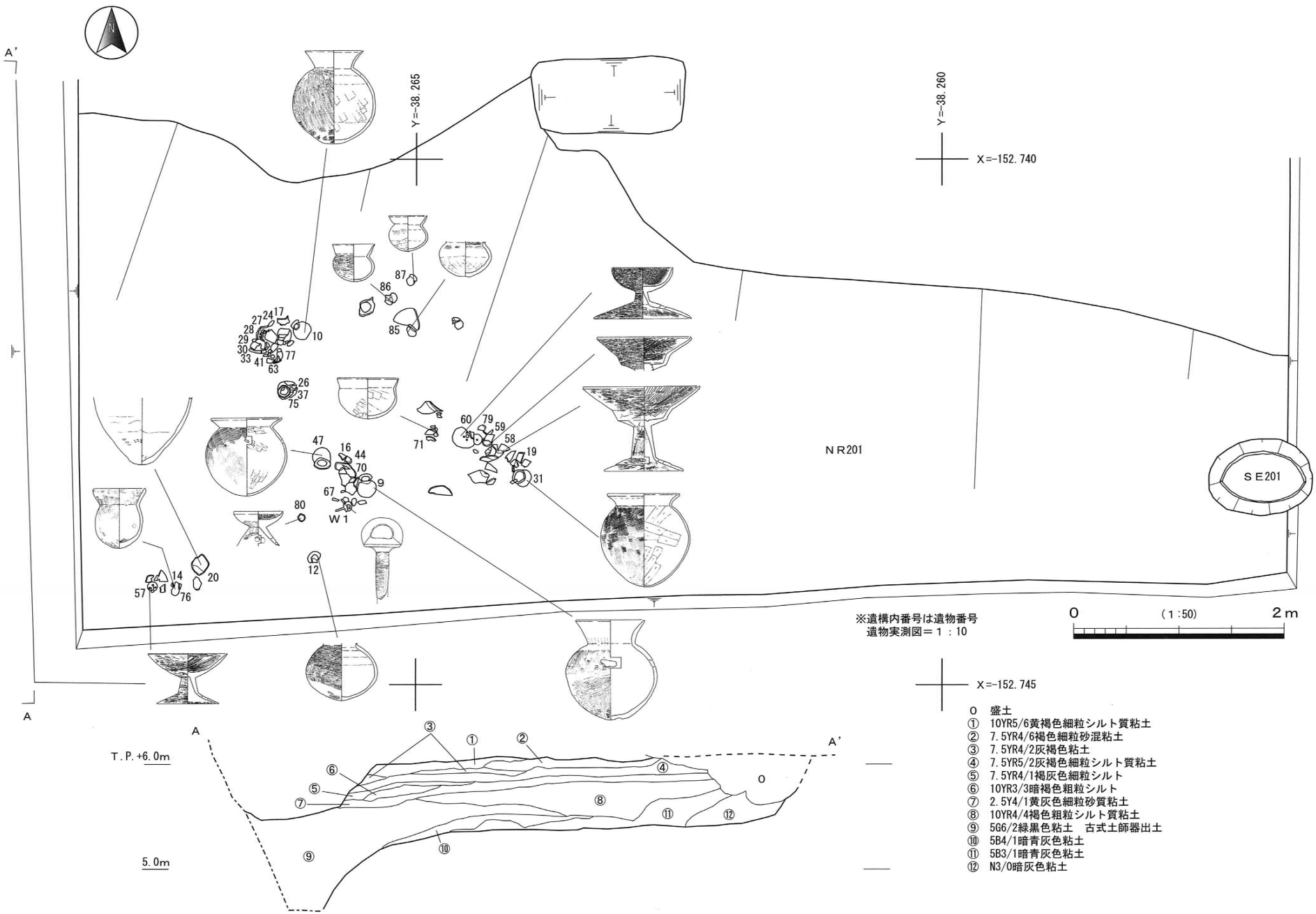
78～82は器台である。78の口縁端面と、受部の外面には文様を加飾する。81・82は鼓形器台で、類例には久宝寺遺跡南地区(その１)Ｂトレンチ　Ｋ４号墓から出土した小型鼓形器台がある(若林1999)。この小型鼓形器台は近畿地方で製作された近畿製鼓形器台ではないかと報告されている(市村1999)。

83～89は小型丸底壺である。83は口径より体部最大径が下回り、体部外面の下位にはヘラケズリを施す。布留式中相に比定できる。86と87は口径と体部最大径がほぼ同じである。外面の下位はヘラケズリを施す。89は口径より体部最大径が上回る。

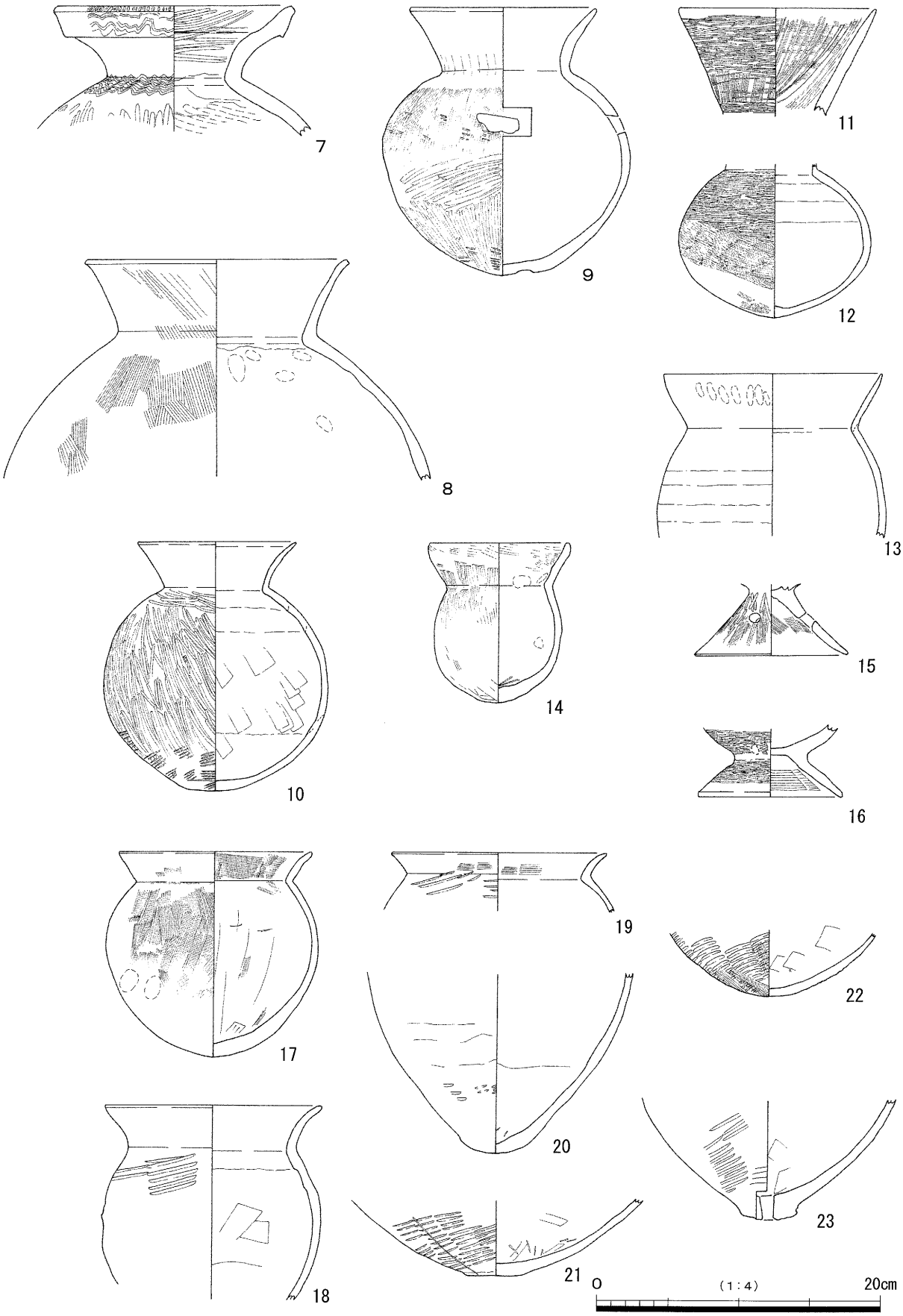
Ｗ１は環形付木製品である。土器が集中して出土した２Ｉ地区から、柄の先端を西に向いた状態で出土した。出土した高さはT. P.+5.0mである。Ｗ１は１本の材を削り精巧に作られ、環状部と柄には黒漆が塗られている。

参考文献

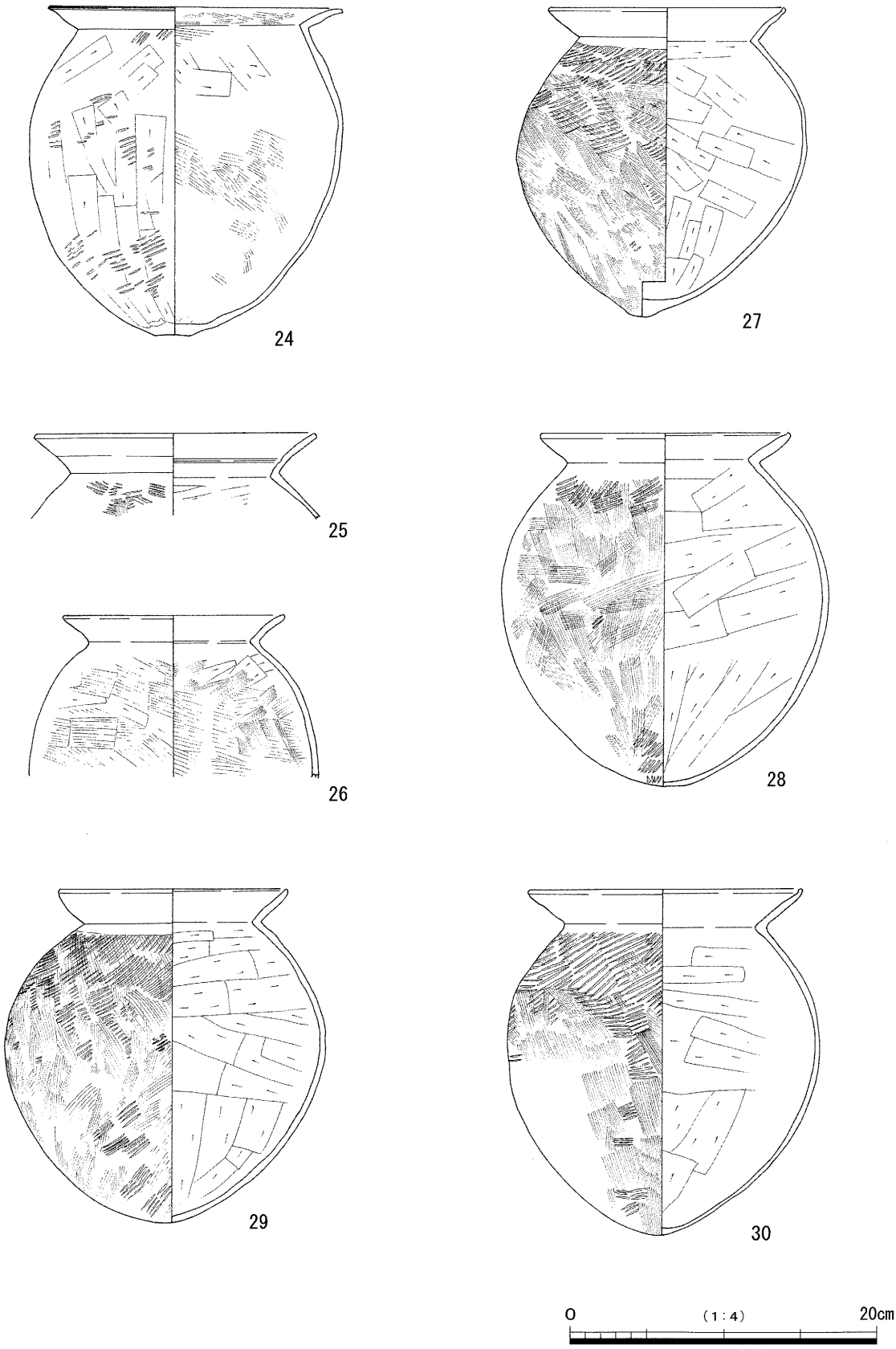
・若林邦彦　1999　「第Ⅱ章　土器・土製品」『河内平野遺跡群の動態Ⅶ』近畿自動車道天理吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　―南遺跡群　弥生時代後期～古墳時代前期編―　大阪府教育委員会　財団法人大阪府文化財調査研究センター
・市村慎太郎　1999　「第Ⅷ章　第３節　久宝寺遺跡出土鼓形器台の意義」『河内平野遺跡群の動態Ⅶ』近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　―南遺跡群　弥生時代後期～古墳時代前期―　―石器・木製品・金属器・動植物遺体・考察編―　大阪府教育委員会　財団法人大阪府文化財調査研究センター



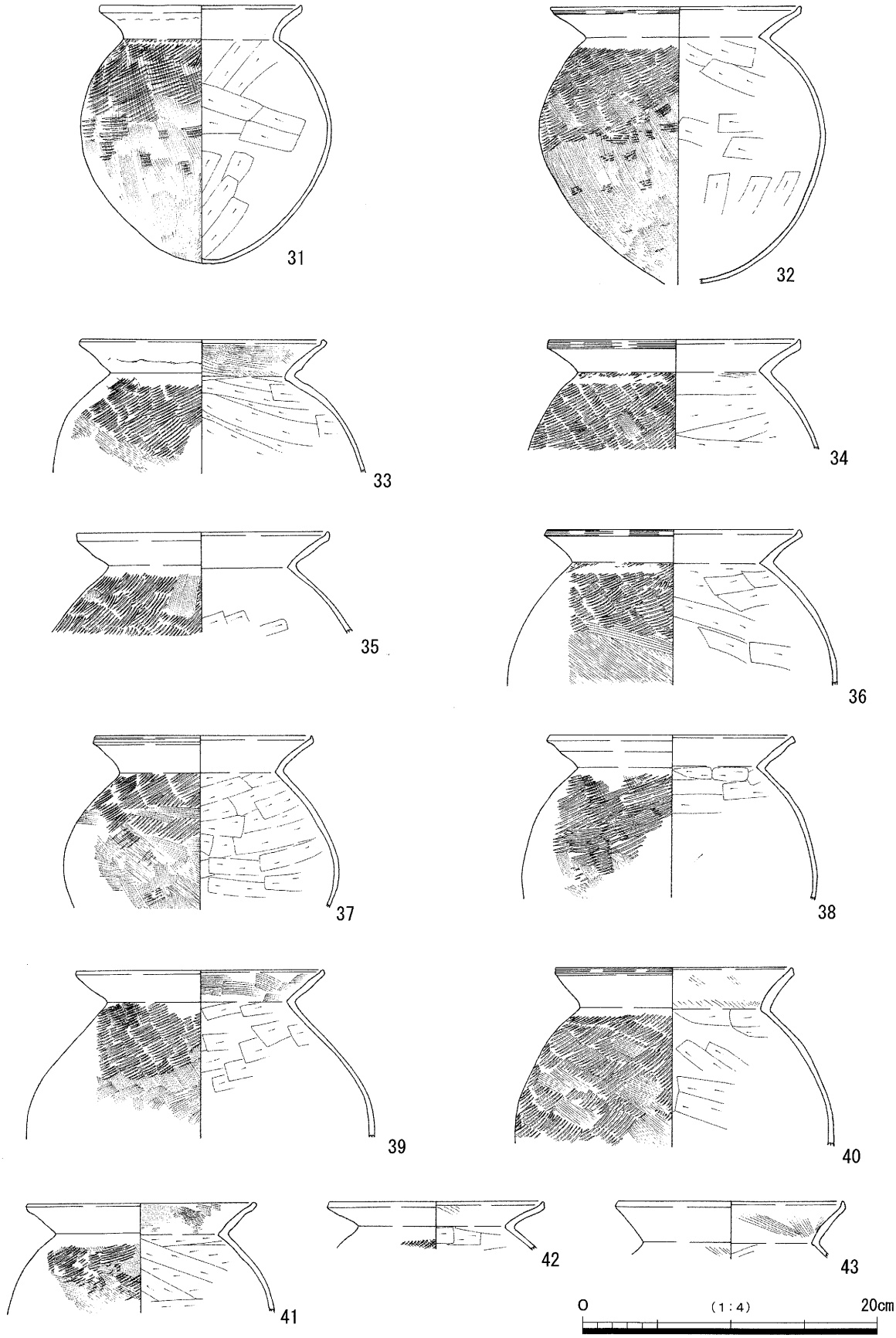
第７図　ＮＲ201平・断面図



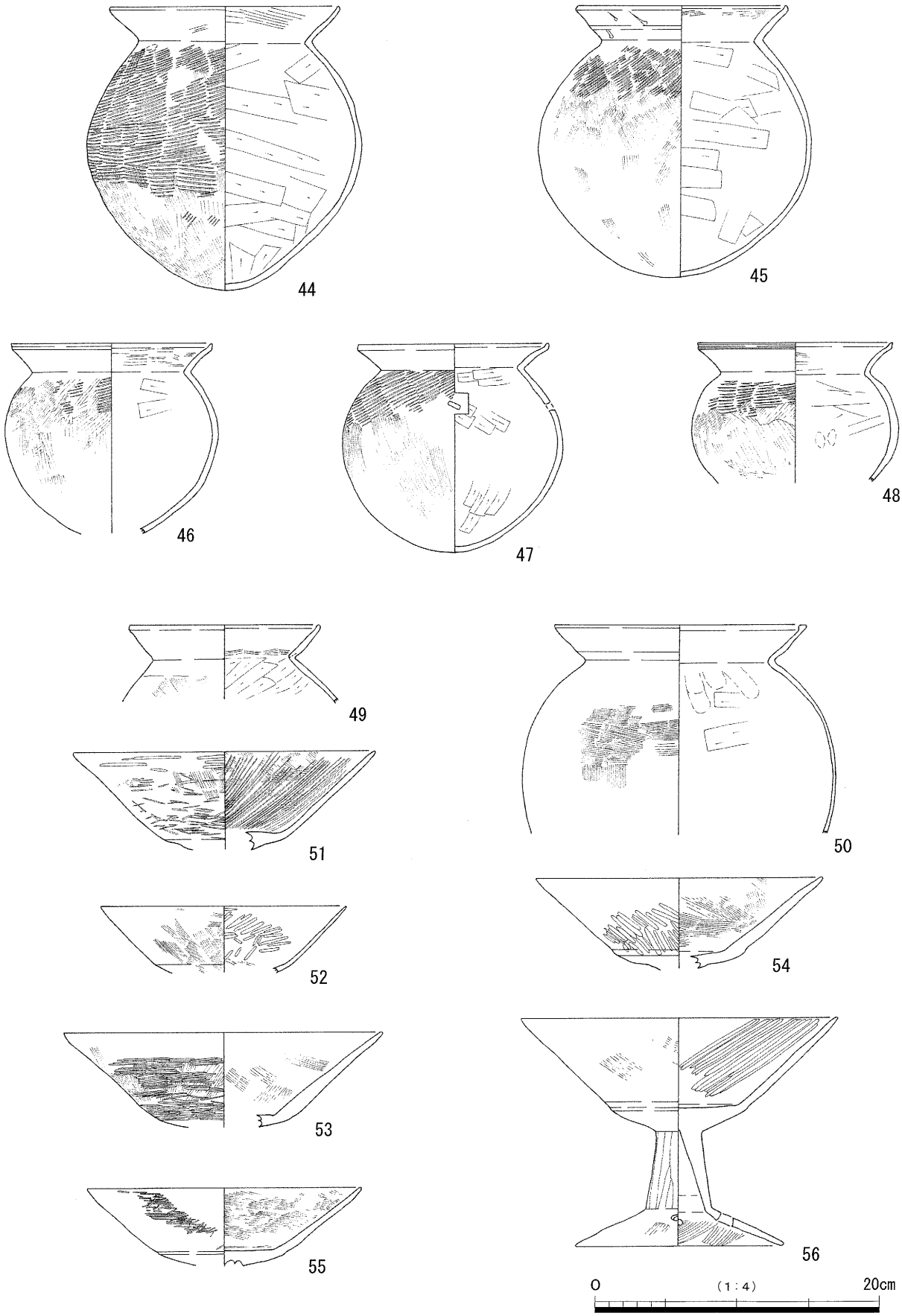
第８図　ＮＲ201出土遺物実測図①



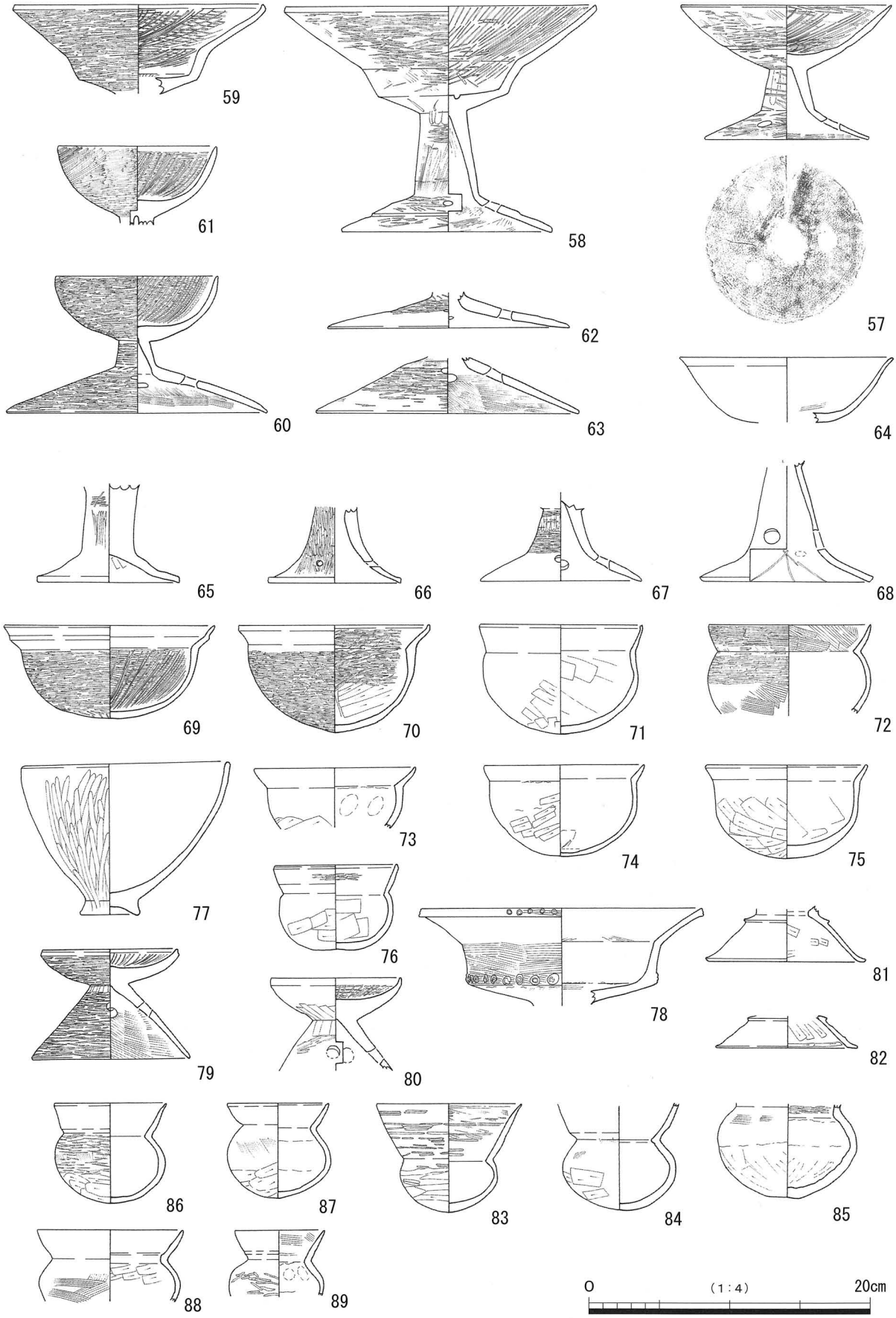
第９図　ＮＲ201出土遺物実測図②



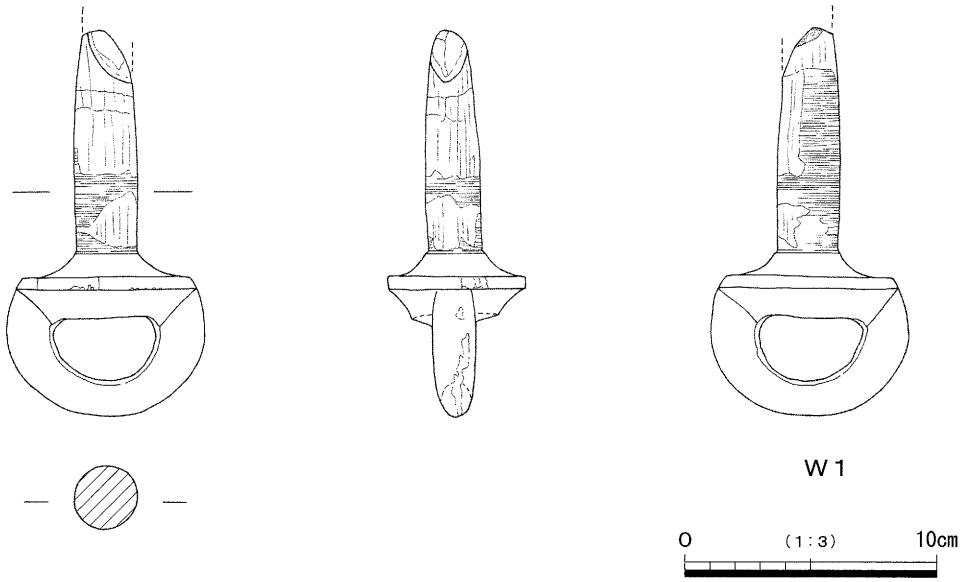
第10図　ＮＲ201出土遺物実測図③



第11図　ＮＲ201出土遺物実測図④



第12図　ＮＲ201出土遺物実測図⑤



第13図　ＮＲ201 出土遺物実測図⑥

表５　出土遺物観察表（２）

遺物番号 図版番号	遺構	器種	法量（cm）	形態・調整 等	色調	胎土	焼成	備考
7 11	ＮＲ201	古式土師器 壺	口径16.2	外反する口縁部で、端部は上方へつまみだし、平坦な面を形成する。口縁部の内面はヘラミガキ、外面はヨコナデを施す。体部の内面はナデで、指頭圧痕や、粘土接合痕が見られる。口縁端部にキザミ目、口縁端面と体部上位に波状文を施す。口縁部の内外面には部分的に赤色顔料を塗布している。	10YR7/3 にぶい黄橙色	１～５㎜程度の砂粒を含む。	良好	
8	ＮＲ201	古式土師器 壺	口径18.0	「く」の字に屈曲し直立ぎみに外反する口縁部。口縁部の内面はヨコナデ、外面はハケナデのちヨコナデを施す。体部の内面はナデで、指頭圧痕が見られる。外面はハケナデを施す。	5YR7/4 にぶい橙色	１～３㎜程度の砂粒を含む。	良好	
9 11	ＮＲ201	古式土師器 壺	口径12.9 器高18.9 体部最大径17,3	底部は平底で、体部は球形である。口縁部は外反する。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はナデ、外面の上半はタタキのち縦方向ハケナデ、下半タタキのちヘラミガキを施す。体部中位に穿孔、外面下位には黒斑がある。	10YR5/4 にぶい黄褐色	２㎜以下の砂礫を少量含む。	良好	
10 11	ＮＲ201	古式土師器 壺	口径11.0 器高17.5 体部最大径15.7	底部は平底である。球形の体部で、口縁部は「く」の字に屈曲し、外反する。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面は板状工具によるナデ、外面の上半はヘラミガキ、下半はタタキのちヘラミガキを施す。体部の内外面には粘土接合痕がある。外面下位には黒斑がある。	7.5YR6/6 橙色	２㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	
11	ＮＲ201	古式土師器 壺	口径14.0	外上方へ直線的に伸びる口縁部。口縁部の内面はハケナデのち放射状ヘラミガキ、外面はハケナデのち横方向のヘラミガキを施す。口縁部の内外面には黒斑がある。	10YR5/1 褐灰色	４㎜以下の砂礫粒を少量含む。	良好	
12	ＮＲ201	古式土師器 壺	体部最大径13.4	やや尖りぎみに丸く終わる底部。体部は扁平な球形である。体部の内面はナデ、外面はヘラミガキを施す。体部の内外面には粘土接合痕がある。外面の中位には煤が付着している。体部の内外面には黒斑がある。	10YR6/6 明黄褐色	２㎜以下の砂粒を極少量含む。	良好	
13	ＮＲ201	古式土師器 壺	口径15.4	縦長の体部から屈曲し外反する口縁部である。口縁部の内外面はナデを施し、外面には指頭圧痕がある。体部の内外面はナデを施し、粘土接合痕がある。	10YR6/2 灰黄褐色	３㎜以下の砂礫を含む。	良好	
14 11	ＮＲ201	古式土師器 小型長頸壺	口径9.8 器高11.2	縦長の体部から屈曲し外反する口縁部である。口縁部の内外面はハケナデを施す。体部の内面はナデ、外面の上半はハケナデ、下半はヘラケズリを施す。体部内面に指頭圧痕やヘラ押えによる痕跡がある。外面下位には黒斑がある。	10YR4/2 灰黄褐色	１～２㎜程度の砂粒を含む。	良好	
15	ＮＲ201	古式土師器 小型器台？ 台付壺？	底径10.6	台部は「ハ」の字に開く。底部の内面はハケナデ、外面はハケナデのちヘラミガキを施す。３方向のスカシ孔を施し、内面には黒斑がある。	7.5YR7/4 にぶい橙色	1.5㎜の砂粒を含む。	良好	
16 11	ＮＲ201	古式土師器 台付壺？	底径10.1	「ハ」の字に開く台部。体部の内面はナデ、外面はヘラミガキを施す。底部の内面はハケナデ、外面はヘラミガキを施す。体部の外面には指圧痕と粘土接合痕がある。	10YR7/6 明黄褐色	３㎜以下の砂礫を少量含む。	良好	

表６　出土遺物観察表（３）

遺物番号 図版番号	遺構	器種	法量（cm）	形態・調整等	色調	胎土	焼成	備考
17 11	ＮＲ201	古式土師器 甕	口径13.6 器高14.5 体部最大径14.8	球形に近い体部から口縁部は屈曲し外反する。口縁部の内面はハケナデ、外面はハケナデのちヨコナデを施す。体部の内面上位はハケナデのちナデ、下位はヘラケズリ、外面はハケナデのちナデを施す。外面の下位には指頭圧痕がある。口縁部と体部の外面には煤が付着。	7.5YR7/6 橙色	2.5mm以下の砂粒を少量含む。	良好	
18	ＮＲ201	古式土師器 甕	口径15,2	口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はヘラによるナデを施し、粘土接合痕がある。外面は全体に右上がりの太いタタキを施す。	5YR7/2 明褐灰色	１～２mmの砂粒含む。	良好	
19	ＮＲ201	古式土師器 甕	口径14.8	「く」の字に屈曲し外反する口縁部。口縁部の内外面はハケナデを施す。体部の内面はナデ、外面は右上がりの太いタタキを施す。口縁部と体部の外面には煤が付着。	10YR5/6 黄褐色	２mm以下の砂粒を少量含む。	良好	
20	ＮＲ201	古式土師器 甕	底径5.0	底部は突出する平底である。体部の内面はナデ、外面はタタキのちナデを施す。体部の内外面には粘土接合痕がある。内面の底にはヘラ状工具による圧痕がある。体部の内面は焦げる。外面には煤が付着。	5YR7/4 にぶい橙色	１～２mm程度の砂粒を含む。	良好	
21	ＮＲ201	古式土師器 甕	底径3.7	底部は突出する平底である。体部の内面は板ナデを施し、ヘラ状工具による圧痕がある。外面は右上がりのタタキを施し、ヘラ状工具による縦方向の圧痕がある。底部の内外面には黒斑がある。	10ＹＲ5/3 にぶい黄褐色	２mm以下の砂礫を少量含む。４mm大の砂礫有り。	良好	
22	ＮＲ201	古式土師器 甕	底径2.5	底部はわずかに突出する平底である。体部の内面は板ナデ、外面は右上がりのタタキのち粗いハケナデを施す。体部外面には煤が付着。	10YR3/2 黒褐色	２mm下の砂粒を含む。	良好	
23 12	ＮＲ201	古式土師器 甕？ 甑？	底径3.8	底部は突出する平底である。底部中央に１ヶ所貫通する孔がある。底部の内面はヘラナデ、外面は右上がりのタタキを施す。体部外面には黒斑がある。体部内面は焦げる。	7.5YR6/3 にぶい褐色	１～２mmの砂粒含む。	良好	
24 12	ＮＲ201	古式土師器 甕	口径19.0 器高21.6 体部最大径20.2 底径2.5	底部は突出する平底である。体部は縦長で、中位に体部最大径がある。口縁部は「く」の字に屈曲し、外反する。口縁部の内面はハケナデのちヨコナデ、外面はヨコナデを施す。体部の内面はハケナデのちヘラケズリ、外面は右上がりのタタキのちヘラケズリを施す。内面の底面は焦げる。外面には煤が付着。	7.5YR7/6 橙色	２mm程度の砂粒含む。	良好	
25	ＮＲ201	古式土師器 甕	口径18.2	口縁部は「く」の字に屈曲し、外反する。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はヘラケズリ、外面はタタキのちハケナデを施す。口縁部と体部の外面には全体に煤が付着。	5Y6/2 灰オリーブ色	１～２mmの砂粒含む。（角閃石を多く含む生駒西麓産）	良好	
26	ＮＲ201	古式土師器 甕	口径14.4	口縁部は「く」の字に屈曲し、外反する。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内外面はヘラケズリのちハケナデを施す。内面のハケは粗いものと細いものがある。体部内面は焦げる。口縁部と体部の外面には全体に煤が付着。	10YR4/6 褐色	２mm以下の砂粒を少量含む。	良好	
27 12	ＮＲ201	古式土師器 甕	口径15,1 器高20.2 体部最大径18.9 底径1.5	底部は突出する平底である。体部最大径は中位にある。口縁部は「く」の字に屈曲し、外反する。口縁端部は上方につまみ出し、面を形成する。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はヘラケズリ、外面は右上がりのタタキ後ハケナデを施す。底部の内面は焦げる。体部の外面には煤が付着。	10YR2/2 黒褐色	４mm以下の砂礫を含む。（角閃石を多く含む生駒西麓産）	良好	
28 12	ＮＲ201	古式土師器 甕	口径16.0 器高23.2 体部最大径21.2 底径2.2	底部は平底で、体部は球形に近いやや縦長の器形である。口縁部は「く」の字に屈曲し、外反する。端部は丸みのある面を形成する。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はヘラケズリ、外面は右上がりのタタキのちハケナデを施す。体部の内面は焦げる。外面には煤が付着。	10YR3/3 暗褐色	４mm以下の砂粒を含む。（角閃石を多く含む生駒西麓産）	良好	
29 12	ＮＲ201	古式土師器 甕	口径14.8 器高21.9 体部最大径20.9 底径1.0	底部は丸みのある平底で、体部は球形に近いやや縦長の器形である。口縁部は「く」の字に屈曲し、外反する。端部は上方につまみ出し、面を形成する。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はヘラケズリ、外面は右上がりのタタキのちハケナデを施す。体部の内面は焦げる。外面には煤が付着。	10YR3/3 暗褐色	４mm以下の砂礫を含む。（角閃石を多く含む生駒西麓産）	良好	
30 12	ＮＲ201	古式土師器 甕	口径17.8 器高22.7 体部最大径24.0 底径1.2	底部は丸みのある尖り底で、底部の中央には平らな部分がわずかに残る。体部は縦長の器形で、体部最大径は中位にある。口縁部は「く」の字に屈曲し、外反する。端部は上方につまみ出し、面を形成する。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はヘラケズリ、外面は右上がりのタタキのちハケナデを施す。体部の内面は焦げる。外面には煤が付着。	10YR3/3 暗褐色	４mm以下の砂粒を含む。（角閃石を多く含む生駒西麓産）	良好	

表７　出土遺物観察表（４）

遺物番号 図版番号	遺構	器種	法量（cm）	形態・調整等	色調	胎土	焼成	備考
31 12	ＮＲ201	古式土師器 甕	口径13.5 器高17.6 体部最大径16.9	底部は丸みをもつ尖り底である。体部は中位がやや張り出す球形である。口縁部は「く」の字に屈曲し、外反する。端部は上方につまみ出し、面を形成する。口縁部の内外面はヨコナデを施す。外面に粘土接合痕がある。体部の内面はヘラケズリ、外面の上位はタタキのちハケナデ、下位はハケナデを施す。体部の外面中～下位には煤が付着。	10YR3/3 暗褐色	５㎜以下の砂礫粒を多量に含む。（角閃石を多く含む生駒西麓産）	良好（硬く焼き締まる。）	
32	ＮＲ201	古式土師器 甕	口径16.8 体部最大径19.3	底部は丸みをもつ尖り底である。体部は中位がやや張り出す球形である。口縁部は「く」の字に屈曲し、外反する。端部は上方につまみ出し、面を形成する。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面は上位横方向、下位縦方向のヘラケズリを施す。外面は右上がりのタタキのちハケナデを施す。体部の外面中～下位には煤が付着。	10YR3/3 暗褐色	５㎜以下の砂粒を少量含む。（角閃石を多く含む生駒西麓産）	良好（硬く焼き締まる。	
33	ＮＲ201	古式土師器 甕	口径16.3	口縁部は「く」の字に屈曲し、外反する。端部は上方につまみ出し面を形成する。口縁部の内外面はヨコナデを施し、外面には粘土接合の痕跡がある。体部の内面はヘラケズリ、外面は右上がりのタタキのちハケナデを施す。体部の外面には煤が付着。	7.5YR4/2 灰褐色	６㎜以下の砂粒を含む。（角閃石を多く含む生駒西麓産）	良好（硬く焼き締まる。）	
34	ＮＲ201	古式土師器 甕	口径16.9	口縁部は「く」の字に屈曲し、外反する。端部は上方につまみ出し面を形成する。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はハケナデのち横方向のヘラケズリ、外面は右上がりのタタキのちハケナデを施す。口縁部と体部の外面には煤が付着。	10YR3/3 暗褐色	２㎜以下の砂粒を含む。（角閃石を多く含む生駒西麓産）	良好（硬く焼き締まる。）	
35	ＮＲ201	古式土師器 甕	口径16.8	口縁部は「く」の字に屈曲し、外反する。端部は上方につまみ出し面を形成する。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はヘラケズリ、外面はタタキのちハケナデを施す。体部の外面には煤が付着。	10YR3/2 黒褐色	３㎜以下の砂粒を含む。（角閃石を多く含む生駒西麓産）	良好（硬く焼き締まる。）	
36	ＮＲ201	古式土師器 甕	口径16.9	口縁部は「く」の字に屈曲し、外反する。端部は上方につまみ出し面を形成する。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面は横方向のヘラケズリ、外面はタタキのちハケナデを施す。体部の外面には煤が付着。	10YR3/3 暗褐色	２㎜以下の砂粒を含む。（角閃石を多く含む生駒西麓産）	良好（硬く焼き締まる。）	
37	ＮＲ201	古式土師器 甕	口径14.6 体部最大径18.5	体部は中位に最大径があるやや横長の球形である。口縁部は「く」の字に屈曲し、外反する。端部は上方につまみ出し面を形成する。口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ、外面タタキのちハケナデ。口縁部と体部の外面には煤が付着。	10YR3/3 暗褐色	１～３㎜の砂粒を含む。（角閃石を多く含む生駒西麓産）	良好（硬く焼き締まる。）	
38	ＮＲ201	古式土師器 甕	口径16.4	口縁部は「く」の字に屈曲し、外反する。端部は上方につまみ出し面を形成する。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はヘラミガキ、外面はタタキのちハケナデを施す。口縁部と体部の外面には煤が付着。	10YR3/3 暗褐色	２㎜以下の砂粒を含む。（角閃石を多く含む生駒西麓産）	良好（硬く焼き締まる。）	
39	ＮＲ201	古式土師器 甕	口径16.7	口縁部は「く」の字に屈曲し、外反する。端部は上方につまみ出し面を形成する。口縁部の内面はハケナデ、外面はヨコナデを施す。体部の内面はヘラケズリ、外面上半は右上がりのタタキのちハケナデ、下半はハケナデを施す。口縁部と体部の外面には煤が付着。	10YR3/1 黒褐色	６㎜以下の砂礫を含む。（角閃石を多く含む生駒西麓産）	良好（硬く焼き締まる。）	
40	ＮＲ201	古式土師器 甕	口径15.8	口縁部は「く」の字に屈曲し、外反する。端部は上下方につまみ出し面を形成する。口縁部の外面はナデ、内面はハケナデのちヨコナデを施す。体部の外面は右上がりのタタキのちハケナデ、内面はヘラケズリを施す。口縁部と体部の外面には煤が付着。	10YR3/2 黒褐色	３㎜以下の砂粒を含む。（角閃石を多く含む生駒西麓産）	良好（硬く焼き締まる。）	
41 13	ＮＲ201	古式土師器 甕	口径15.4	口縁部は「く」の字に屈曲し、外反する。端部は上方につまみ出し面を形成する。口縁部の内面はハケナデ、外面はヨコナデを施す。体部の内面はヘラケズリ、外面は右上がりのタタキのちハケナデを施す。体部の外面には煤が付着。口縁および体部の平面形状は楕円形である。	7.5YR6/3 にぶい褐色	３㎜以下の砂粒を含む。（角閃石を多く含む生駒西麓産）	良好（硬く焼き締まる。）	
42	ＮＲ201	古式土師器 甕	口径14.6	口縁部は「く」の字に屈曲し、外反する。端部は上方につまみ出し面を形成する。口縁部の内面はハケナデのちヨコナデ、外面はヨコナデを施す。体部の内面はヘラケズリ、外面は右上がりのタタキのちハケナデを施す。口縁部と体部の外面には煤が付着。	10YR3/1 黒褐色	１㎜以下の砂粒を含む。（角閃石を多く含む生駒西麓産）	良好（硬く焼き締まる。）	
43	ＮＲ201	古式土師器 甕	口径15.2	口縁部は「く」の字に屈曲し、外反する。端部は上方につまみ出し面を形成する。口縁部の内面はハケナデ、外面はヨコナデを施す。体部の内面はヘラケズリ、外面はハケナデを施す。口縁部と体部の外面には煤が付着。	10YR4/6 褐色	１㎜程度の砂粒を含む。（角閃石を多く含む生駒西麓産）	良好（硬く焼き締まる。）	

表８　出土遺物観察表（５）

遺物番号 図版番号	遺構	器種	法量（cm）	形態・調整等	色調	胎土	焼成	備考
44 13	ＮＲ201	古式土師器 甕	口径16.0 器高20,1 体部最大径19.2	底部は丸みをもつ尖り底である。体部は中位がやや張り出す球形である。口縁部は「く」の字に屈曲し、外反する。端部は上方につまみ出し、面を形成する。端面には凹線状のくぼみがある。口縁部の内外面はハケナデのちヨコナデを施す。体部の内面はヘラケズリ、外面は右上がりのタタキのちハケナデ、下半はハケナデによりほとんどのタタキが消されている。口縁～体部の外面には煤が付着している。	5Y7/3 浅黄色	１～1.5㎜程度の砂粒を含む。（角閃石を多く含む生駒西麓産）	良好（硬く焼き締まる。）	
45 13	ＮＲ201	古式土師器 甕	口径14.4 器高19.2 体部最大径19.1	底部は丸く終わる。体部は中～下位が張り出す球形である。口縁部は「く」の字に屈曲し、外反する。端部は上方へつまみ出し、面を形成する。口縁部の内面はハケナデのちヨコナデを施す。体部の内面はヘラケズリ、外面は右上がりのタタキのちハケナデを施す。下半はハケナデによりほとんどのタタキが消されている。口縁部の外面にはヘラ状工具による痕跡がある。体部の内面下位は焦げる。口縁～体部の外面には煤が付着。	10YR6/3 にぶい黄橙色	１～２㎜程度の砂粒を含む。（角閃石を多く含む生駒西麓産）	良好（硬く焼き締まる。）	
46 13	ＮＲ201	古式土師器 甕	口径14.0 体部最大径14.8	体部は中位が張り出す球形である。口縁部は「く」の字に屈曲し、外反する。端部は上方へつまみ出し、面を形成する。端面には凹線状のくぼみがある。口縁部の内面はハケナデのちヨコナデ、外面はヨコナデを施す。体部の内面はヘラケズリ、外面は右上がりのタタキのちハケナデを施す。体部の外面には煤が付着している。	5Y6/2 灰オリーブ色	１～２㎜程度の砂粒を含む。（角閃石を多く含む生駒西麓産）	良好（硬く焼き締まる。）	
47 13	ＮＲ201	古式土師器 甕	口径13.2 器高14.8 体部最大径15.4	底部は丸く終わる。体部は中位が張り出す球形である。口縁部は「く」の字に屈曲し、外反する。端部は上方へつまみ出し、面を形成する。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はヘラケズリ、外面は右上がりのタタキのちハケナデを施す。下～中位はハケナデによりほとんどのタタキが消されている。体部の上位には焼成後の穿孔がある。口縁～体部の外面には煤が付着。	10YR3/3 暗褐色	４㎜以下の砂礫を少量含む。（角閃石を多く含む生駒西麓産）	良好（硬く焼き締まる。）	
48 13	ＮＲ201	古式土師器 甕	口径13.6	体部は中位が張り出す球形である。口縁部は「く」の字に屈曲し、外反する。端部は上方へつまみ出し、面を形成する。端面には凹線状のくぼみがある。口縁部の内面はハケナデのちヨコナデ、外面はヨコナデを施す。体部の内面はヘラケズリを施し、指頭圧痕がある。外面は右上がりのタタキのちハケナデを施し、粘土接合の痕跡がある。口縁～体部の外面には煤が付着。	2.5Y5/2 暗灰黄色	１～２㎜の砂粒含む。（角閃石を多く含む生駒西麓産）	良好（硬く焼き締まる。）	
49	ＮＲ201	古式土師器 甕	口径13.4	口縁部は「く」の字に屈曲し、内湾ぎみに外上方へ伸びる。端部は内上方へつまみ出し、丸く終わる。口縁部の内面はハケナデのちヨコナデ、外面はヨコナデを施す。体部の内面はヘラケズリ、外面はハケナデを施す。口縁～体部の外面には煤が付着。	10YR3/3 暗褐色	３㎜以下の砂粒を多く含む。	良好	
50	ＮＲ201	古式土師器 甕	口径17.6	口縁部はゆるやかに折れ曲がり、内湾ぎみに外上方へ伸びる。端部は内上方へつまみ出し、肥厚する面を形成する。口縁部の内外はヨコナデを施す。体部の内面はヘラケズリを施し、体部上位は、ユビナデを施す。	5YR8/4 淡橙色	２㎜程度の砂粒を含む	良好	
51	ＮＲ201	古式土師器 高杯	口径21.2	杯部は平坦である。口縁部は外上方へ直線に伸び、端部は丸く終わる。杯部および口縁部の内面はハケナデのち放射状のヘラミガキ、外面はハケナデのち横方向のヘラミガキを施す。	7.5YR7/6 橙色	１㎜程度の砂粒含む。	良好	
52	ＮＲ201	古式土師器 高杯	口径17.4	杯部は平坦である。口縁部は外上方へ内湾ぎみに伸びる。端部は丸く終わる。杯部と口縁部の内面はヘラミガキ、外面はハケナデのちナデを施す。口縁部の内外面には黒斑がある。	5YR6/6 橙色	１～２㎜の砂粒含む。	良好	
53	ＮＲ201	古式土師器 高杯	口径22.4	杯部は平坦である。口縁部は外上方へ直線に伸びる。端部は尖りぎみに丸く終わる。杯部と口縁部の内面はハケナデ、外面はハケナデのち横方向のヘラミガキを施す。	10YR6/8 明黄褐色	３㎜以下の砂礫を少量含む。	良好	
54	ＮＲ201	古式土師器 高杯	口径20.2	杯部は平坦である。口縁部は外上方へ直線に伸びる。端部は尖りぎみに丸く終わる。杯部および口縁部の内面はハケナデ、外面はヘラミガキを施す。	7.5YR7/3 にぶい橙色	１㎜程度の砂粒を含む。	良好	
55	ＮＲ201	古式土師器 高杯	口径19.2	杯部は平坦で、口縁部は外上方へ直線に伸びる。端部は丸く終わる。杯部および口縁部の内面はハケナデ、外面はヘラミガキを施す。口縁部の外面には部分的に黒斑がある。	7.5YR6/6 橙色	１～３㎜程度の砂粒を含む。	良好	
56 13	ＮＲ201	古式土師器 高杯	口径22.2 器高16.1 裾径14.4	脚部は直線的に外下方に広がる筒状である。裾部は脚部から屈曲し「ハ」の字にひらき、端部は丸く終わる。杯部は平坦で、口縁部は外上方へ直線に伸びる。端部は尖りぎみに丸く終わる。杯部と口縁部の内面は放射状にヘラミガキ、外面はハケナデのちヨコナデを施す。柱状部の内面はナデ、外面は縦方向のヘラミガキを施す。裾部の内面はハケナデ、外面はハケナデのちナデを施す。裾部には4方向のスカシ孔がある。口縁部の外面には部分的に黒斑がある。	10YR6/6 明黄褐色	２㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	

表９　出土遺物観察表（６）

遺物番号 図版番号	遺構	器種	法量（cm）	形態･調整 等	色調	胎土	焼成	備考
57 14	ＮＲ201	古式土師器 高杯	口径14.9 器高9.5 裾径11.5	脚部は直線的に外下方に広がる筒状である。裾部は脚部から屈曲し「ハ」の字にひらき、端部は尖りぎみに丸く終わる。杯部は平坦で、口縁部は外上方へ直線に伸びる。端部は尖りぎみに丸く終わる。杯部と口縁部の内外面はハケナデのち放射状のヘラミガキ、外面はハケナデのちヘラミガキを施す。脚部の内面ナデ、外面ヘラケズリのちヘラミガキを施す。裾部の内面は布目を押し付けたのちハケナデ、外面はハケナデのちヘラミガキを施す。裾部には３方向のスカシ孔がある。内外面には部分的に黒斑がある。	10Ｒ5/6 赤色	１～２㎜程度の砂粒を含む。	良好	
58 14	ＮＲ201	古式土師器 高杯	口径21.9 器高16.0 裾径14.7	脚部は直線的に外下方に広がる筒状である。裾部は脚部から屈曲し「ハ」の字にひらき、端部は尖りぎみに丸く終わる。杯部は平坦で、口縁部は二段に屈曲し外上方へ直線に伸びる。端部は面を形成する。杯部と口縁部の内面はヘラミガキのち放射状ヘラミガキ、外面はハケナデのちヘラミガキを施す。脚部の内面はユビナデを施し、しぼり目がある。外面はヘラミガキのちハケを施す。裾部の内面はハケナデ、外面はヘラミガキを施す。杯部の中央に円孔が１ヶ所あけられている。裾部の外面には凹線文を１条施す。裾部には４方向のスカシ孔がある。口縁と裾部の内外面には部分的に黒斑がある。	2.5ＹＲ6/8 橙色	１㎜程度の砂粒を含む。	良好	
59	ＮＲ201	古式土師器 高杯	口径17.6	杯部は平坦で、口縁部は二段に屈曲し外上方へ直線に伸びる。端部は上方へつまみ出し面を形成する。杯部と口縁部の内面は横方向のヘラミガキのち放射状ヘラミガキ、外面は横方向のヘラミガキを施す。	10YR6/6 明黄褐色	１㎜以下の砂粒を含む。	良好	
60 14	ＮＲ201	古式土師器 高杯	口径11.4 器高9.6 裾径18.2	脚部は直線的に短く外下方に広がる筒状である。裾部は脚部から屈曲し「ハ」の字にひらき、端部は丸く終わる。杯部は椀形で、口縁部は内湾して伸びる。端部は尖りぎみに丸く終わる。杯部の内面は横方向のヘラミガキのち放射状のヘラミガキ、外面は横方向のヘラミガキを施す。脚部の内面はナデ、外面はヘラミガキを施す。裾部の内面はハケナデ、外面はヘラミガキを施す。裾部には４方向のスカシ孔がある。	10YR6/6 明黄褐色	3.5㎜以下の砂粒を含む。	良好	
61	ＮＲ201	古式土師器 高杯	口径11.2	脚部は直線的に短く外下方に広がる筒状である。杯部は椀形で、口縁部は内湾して伸びる。端部は尖りぎみに丸く終わる。杯部の内面は横方向のヘラミガキのち、放射状のヘラミガキ、外面は横方向のヘラミガキを施す。	10YR7/4 にぶい黄橙色	１㎜以下の砂粒含む	良好	
62	ＮＲ201	古式土師器 高杯	裾径17.1	裾部は脚部から屈曲し「ハ」の字にひらき、端部は尖りぎみに丸く終わる。裾部の内面はユビナデ、外面は横方向おヘラミガキを施す。裾部には４方向のスカシ孔がある。	10YR5/6 黄褐色	４㎜以下の砂礫を含む。	良好	
63	ＮＲ201	古式土師器 高杯	裾径18.5	裾部は脚部から屈曲し「ハ」の字にひらき、端部は尖りぎみに丸く終わる。裾部の内面はハケナデ、外面はハケナデのちヘラミガキを施す。裾部には４方向のスカシ孔がある。	10YR6/6 明黄褐色	２㎜以下の砂粒を含む。	良好	
64	ＮＲ201	古式土師器 高杯	口径15.2	杯部は平坦である。口縁部は内湾し伸び、端部はやや外反する。杯部と口縁部の内面はハケナデのちユビナデ、外面はユビナデを施す。	5YR8/4 淡橙色	２㎜程度の砂粒含む。	良好	
65	ＮＲ201	古式土師器 高杯	裾径10.0	脚部は円筒形で、裾部は「ハ」の字にひらき、端部は上下につまみ出し面を形成する。裾部の内外面はヨコナデを施す。脚部の外面はヘラミガキを施す。裾部の内面にはヘラ状工具による痕跡がある。	10YR5/6 黄褐色	３㎜以下の砂礫を少量含む。	良好	
66	ＮＲ201	古式土師器 高杯	裾径9.5	脚部は直線的に外下方に広がる筒状である。裾部は脚部からゆるやかに曲がりながら「ハ」の字にひらき、端部は上方につまみ出し面を形成する。裾部の内面はユビナデ、外面はハケナデを施す。脚部の内面はユビナデ、外面は縦方向のヘラミガキを施す。裾部には３方向のスカシ孔がある。	10YR8/3 浅黄橙色	１㎜程度の砂粒含む。	良好	
67	ＮＲ201	古式土師器 高杯	裾径11.3	脚部は直線的に外下方に広がる筒状である。裾部は脚部から屈曲し「ハ」の字にひらき、端部は尖りぎみに丸く終わる。裾部の内外面はヨコナデを施す。脚部の内面はユビナデ、外面はヘラミガキを施す。裾部には４方向のスカシ孔がある。端部には部分的に黒斑がある。	10YR5/4 にぶい黄褐色	３㎜以下の砂礫を少量含む。	良好	
68 14	ＮＲ201	古式土師器 高杯	裾径11.8	脚部は直線的に外下方に広がる筒状である。裾部は脚部から屈曲し「ハ」の字にひらき、端部は面を形成する。脚部と裾部の内外面はユビナデを施す。裾部の内面にはヘラ状工具による記号文がある。	2.5Y8/3 淡黄色	１㎜程度の砂粒含む。（角閃石を多く含む生駒西麓産）	良好（硬く焼き締まる。）	

表10　出土遺物観察表（７）

遺物番号 図版番号	遺構	器種	法量（cm）	形態・調整 等	色調	胎土	焼成	備考
69 14	ＮＲ201	古式土師器 鉢	口径14.8 器高6.5	体部は内湾する。口縁部は２段に屈曲し外反する。端部は尖りぎみに丸く終わる。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面は横方向のヘラミガキのち放射状のヘラミガキ、外面は横方向のヘラミガキを施す。体部の外面と口縁部の内面には部分的に黒斑がある。	7.5YR7/6 橙色	３㎜以下の砂粒を少量含む	良好	
70 14	ＮＲ201	古式土師器 鉢	口径13.6 器高7.6	体部は内湾する。口縁部は屈曲し外反する。端部は上方へつまみ出し面を形成する。口縁部の内面はヘラミガキ、外面はヨコナデを施す。体部の内面下位はヘラケズリ、上位は横方向のヘラミガキ、外面はヘラケズリのち横方向のヘラミガキを施す。体部の外面には部分的に赤色顔料？を塗布している。	5YR5/4 にぶい赤褐色	１㎜程度の砂粒を含む。	良好	
71 14	ＮＲ201	古式土師器 鉢	口径11.4 器高7.7	体部は内湾する。口縁部は屈曲し内湾して伸びる。端部は内側へ丸くつまみ出す。口縁部の内外面はヨコナデ。体部の内面はヘラナデ、外面の上位はユビナデ、下位はヘラケズリを施す。	7.5YR6/6 橙色	３㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	
72	ＮＲ201	古式土師器 鉢	口径11.4	体部は内湾する。口縁部は屈曲し内湾して伸びる。端部は尖りぎみに丸く終わる。口縁部の内面ｈハケナデ、外面は横方向のヘラミガキを施す。体部の内面はユビナデ、外面の上位は横方向のヘラミガキ、下位はハケナデを施す。	10YR5/6 黄褐色	１㎜程度の砂粒含む	良好	
73	ＮＲ201	古式土師器 鉢	口径11.3	体部は内湾する。口縁部は屈曲し内湾して伸びる。端部は上方につまみ出し尖りぎみに丸く終わる。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はユビナデを施し、粘土接合の痕跡がある。外面の下位はヘラケズリ、上位はユビナデを施す。	10YR6/6 明黄褐色	２㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	
74	ＮＲ201	古式土師器 鉢	口径11.2 器高6.4	体部は内湾する。口縁部は屈曲し外反して伸びる。端部は尖りぎみに丸く終わる。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はユビナデ、外面はヘラケズリを施す。体部の外面には粘土接合の痕跡、内面にはヘラ状工具による痕跡がある。	7.5YR6/2 灰褐色	５㎜以下の砂粒を含む。	良好	
75	ＮＲ201	古式土師器 鉢	口径11.4 器高6.6	体部は内湾する。口縁部は屈曲し外反して伸びる。端部は上方へつまみ出し尖りぎみに丸く終わる。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面は板状工具によるナデ、外面はヘラケズリを施す。	10YR5/2 灰黄褐色	２㎜以下の白色砂粒（長石？）を少量含む。	良好	
76	ＮＲ201	古式土師器 鉢	口径8.6 器高6.0	体部は内湾する。口縁部は屈曲し内湾して伸びる。端部は上方へつまみ出し尖りぎみに丸く終わる。口縁部の内外面はヘラミガキを施す。体部の内面はヘラナデ、外面はヘラケズリを施す。	10YR6/6 明黄褐色	４㎜以下の砂粒を含む。	良好	
77 15	ＮＲ201	古式土師器 鉢	口径14.3 器高10.7 底径4.0	底部は突出する上げ底である。体部～口縁部は内湾し、端部は丸く終わる。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はユビナデ、外面はヘラミガキを施す。底部の内外面はユビナデを施す。	5ＹＲ7/4 にぶい橙色	２㎜以下の砂粒を小量含む。	良好	
78 15	ＮＲ201	古式土師器 器台	口径19.8	受部は平坦である。口縁部は２段に屈曲し、直線的に外上方へ伸びる。端部は上下につまみ出し面を形成する。受部の内外面はハケナデを施す。口縁部の内外面はハケナデのちヨコナデを施す。端面には円形竹管文を等間隔に施す。受部の外面には円形竹管文を押した円形浮文を等間隔に施す。口縁部の内外面には部分的に黒斑がある。	10YR7/4 にぶい黄橙色	２㎜以下の砂粒を含む。	良好	
79 15	ＮＲ201	古式土師器 器台	口径9.4 器高7.7 裾径11.0	裾部は「ハ」の字にひらく。裾端部は丸く終わる。受部は平坦で、口縁部は上方へつまみ出し面を形成する。受部の内面は横方向のヘラミガキのち放射状のヘラミガキ、外面は横方向のヘラミガキを施す。口縁部の内外面はヨコナデを施し、端面には凹線文を施す。裾部の内面はハケナデ、外面は横方向のヘラミガキを施す。裾部には４方向のスカシ孔がある。裾部の外面には部分的に黒斑がある。	10YR6/6 明黄褐色	３㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	
80	ＮＲ201	古式土師器 器台	口径9.2	裾部は「ハ」の字にひらく。受部は平坦で、口縁部は上方へつまみ出し面を形成する。受部の内面は横方向のヘラミガキのち放射状のヘラミガキ、外面はヘラケズリを施す。口縁部の内外面はヨコナデを施す。裾部の内面はナデ、外面上位はヘラケズリ、下位はヘラミガキを施す。裾部には５方向のスカシ孔がある。	2.5Ｙ7/3 浅黄色	１㎜程度の砂粒を含む。	良好	
81 15	ＮＲ201	古式土師器 鼓形器台	口径11.0	裾部は筒状の柱状部から突帯を形成したのち「ハ」の字にひらく。端部は外上方へつまみ出し面を形成する。また、裾底部は平坦面を形成している。裾部の内面はヘラケズリ、外面はヨコナデを施す。外面には部分的に黒斑がある。	10YR7/2 にぶい黄橙色	１～２㎜程度の砂粒を含む。	良好	
82 15	ＮＲ201	古式土師器 鼓形器台	口径9.8	裾部は突帯を形成したのち「ハ」の字にひらく。端部は外方へつまみ出し丸く終わる。裾底部は平坦面を形成している。裾部の内面はヘラケズリ、外面はヨコナデを施す。外面には部分的に黒斑がある。	7.5YR5/2 灰褐色	１㎜程度の砂礫を少量含む。	良好	

表11　出土遺物観察表（８）

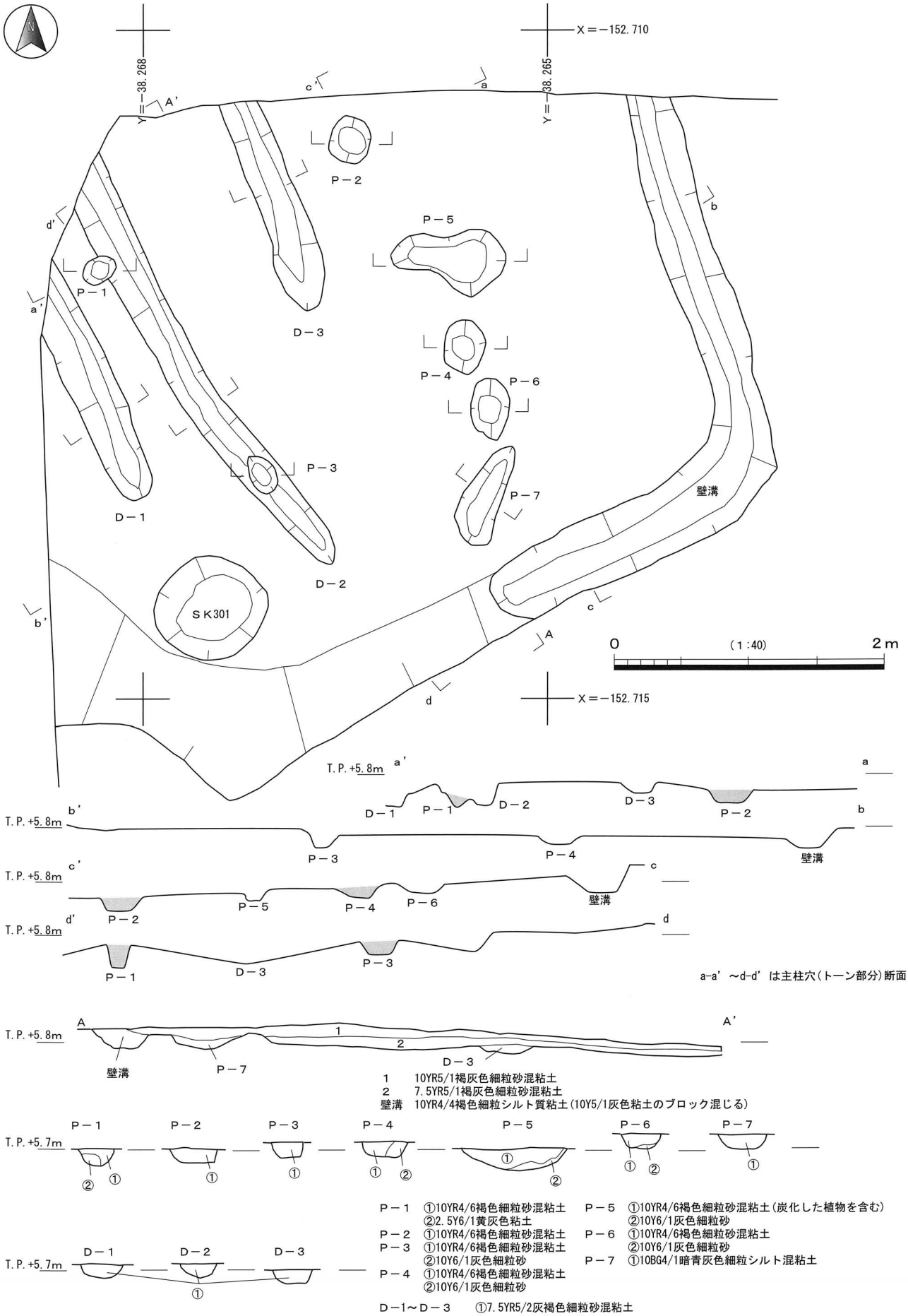
遺物番号 図版番号	遺構	器種	法量（cm）	形態･調整等	色調	胎土	焼成	備考
83 15	ＮＲ201	古式土師器 小型丸底壺	口径10.2 器高7.6 体部最大径6.8	体部は横長の球形である。口縁部は屈曲し直線的に外上方に伸びる。端部は尖りぎみに丸く終わる。口縁部の内面はハケナデのちヘラミガキ、外面はヘラミガキを施す。体部の内面はナデ、外面上位はヘラミガキ、下位はヘラケズリを施す。口縁部および体部の内外面には部分的に黒斑がある。	5YR7/3 にぶい橙色	１㎜程度の砂粒含む。	良好	
84	ＮＲ201	古式土師器 小型丸底壺	体部最大径8.0	体部は横長の球形である。口縁部は屈曲し内湾ぎみに外上方に伸びる。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はユビナデ、外面の上位はハケナデ、下位はヘラケズリを施す。	7.5YR7/3 にぶい橙色	１㎜程度の砂粒含む。	良好	
85	ＮＲ201	古式土師器 小型丸底壺	体部最大径9.8	体部は横長の球形である。口縁部の内面はハケナデを施す。体部の内面はナデ、外面の上位はハケナデ、下位はヘラケズリを施す。体部の内外面には粘土接合の痕跡がある。体部の外面には部分的に黒斑がある。	10YR6/3 にぶい黄橙色	２㎜以下の砂粒を含む。	良好	
86 15	ＮＲ201	古式土師器 小型丸底壺	口径8.0 器高7.1 体部最大径7.9	体部は横長の球形である。口縁部は屈曲し直線的に外上方に伸びる。端部は尖りぎみに丸く終わる。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はユビナデ、外面の上位はハケナデのちヘラミガキ、下位はヘラケズリを施す。体部の外面には部分的に黒斑がある。	10YR6/4 にぶい黄橙色	２㎜以下の砂粒を含む。	良好	
87 15	ＮＲ201	古式土師器 小型丸底壺	口径7.2 器高6.7 体部最大径7.3	体部は横長の球形である。口縁部は屈曲し内湾し外上方に伸びる。端部は尖りぎみに丸く終わる。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はナデ、外面の上位はハケナデ、下位はヘラケズリを施す。体部の外面には部分的に黒斑がある。	10YR7/4 にぶい黄橙色	２㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	
88	ＮＲ201	古式土師器 小型丸底壺	口径10.3 体部最大径10.0	体部は横長の球形である。口縁部は屈曲し内湾ぎみに外上方に伸びる。端部は尖りぎみに丸く終わる。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はヘラケズリ、外面はハケナデを施す。体部内面には部分的に黒斑がある。	7.5YR6/2 灰褐色	２㎜大の砂礫を少量含む。	良好	
89	ＮＲ201	古式土師器 小型丸底壺	口径6.4 体部最大径6.7	体部は横長の球形である。口縁部は屈曲し直線的に外上方に伸びる。端部は尖りぎみに丸く終わる。口縁部の内面はハケナデ、外面はヨコナデを施す。体部の内面はユビナデを施し、粘土接合の痕跡がある。体部の外面はヘラケズリのちヘラミガキを施す。体部～口縁部の内外面には部分的に黒斑がある。	10YR7/3 にぶい黄橙色	１㎜程度の砂粒含む。	良好	
Ｗ1 16	ＮＲ201	環形付木製品	長さ15.5 厚さ5.5 幅7.9	１本の材を削り作る。丸棒状の柄の一方に環状部がある。環状部は精巧に作られ、黒漆を塗っている。柄の中央部には糸状の繊維を巻きつけた痕跡があり、この部分にも黒漆を塗っている。繊維を巻きつけている部分より先は白木のままである。柄の先端部分は焼け焦げている。	黒色			

第３面

６層上面で古墳時代初頭～前期の竪穴住居２棟（ＳＩ301･302）・井戸１基（ＳＥ301）・土坑17基（ＳＫ301～317）・小穴15個（ＳＰ301～315）・溝21条（ＳＤ301～321）を検出した。

ＳＩ301

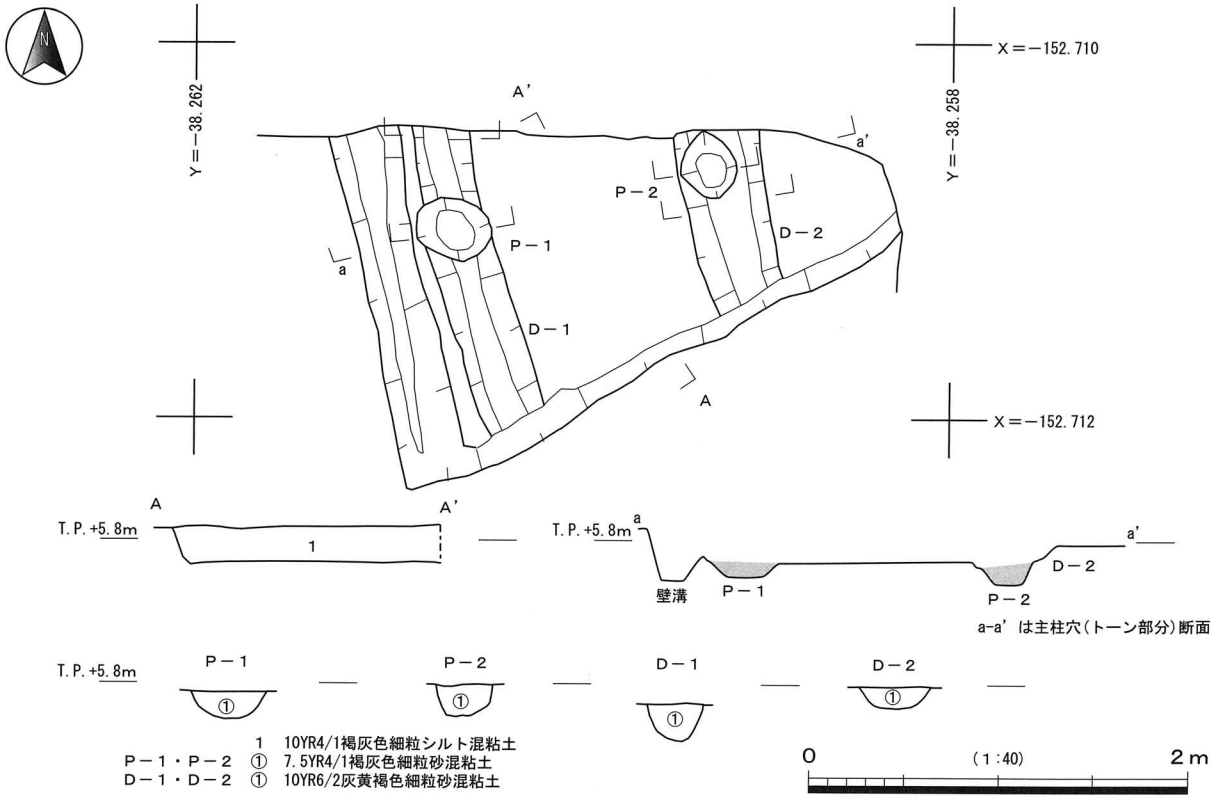
２・３Ｃ・Ｄ地区で検出した。住居の北西部は調査区外に至る。検出した南北幅は5.2m、東西幅は5.5mを測る。平面の形状は、隅丸の方形になると思われるが、南東部は西へ張り出す形状である。深さは0.2mを測り、埋土は10YR5/1褐灰色細粒砂混粘土、7.5YR5/1褐灰色細粒砂混粘土である。住居の主軸は、南北軸を基準にするとN―22°－Wである。床面では、小穴７個（Ｐ－１～Ｐ－７）と溝３条（Ｄ－１～Ｄ－３）を検出した。Ｐ－１～Ｐ－４は柱穴で、径0.25～0.34m、深さは0.1～0.12mを測る。柱間は1.8～2.0mを測りほぼ正方形に配置する平面形状である。住居北東部のＰ－２とＰ－４の間で検出したＰ－５は長径0.8m、短径0.3m、深さ0.15mを測る。埋土には炭化した植物を含んでいることから、炉になる可能性が高い。壁溝は東部と南部で検出し、南部



第14図　ＳＩ301 平・断面図

表12　出土遺物観察表（9）

遺物番号 図版番号	遺構	器種	法量（cm）	形態・調整等	色調	胎土	焼成	備考
90	ＳＩ301 P-5	古式土師器 壺	底径1.1	底部は尖りぎみの平底で、体部は球形である。体部の内外面はユビナデを施す。	7.5YR7/3 にぶい橙色	２㎜以下の砂粒を含む	良好	
91	ＳＩ301	古式土師器 甕	口径25.8 体部最大径26.0	体部は縦長の器形で、最大径は上位にある。口縁部は「く」の字に屈曲し外反する。端部は上部につまみ出し面を形成する。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はヘラナデ、外面は右上がりのタタキのちハケナデとヘラミガキを施す。底部の外面は右上がりのタタキを施す。体部の外面の上位には黒斑がある。	10YR7/8 黄橙色	６㎜以下の砂礫を多量に含む。	良好	
92	ＳＩ301	古式土師器 甕	口径13.6	口縁部は「く」の字に屈曲し外反する。端部は尖りぎみに丸く終わる。口縁部の内面はヨコナデを施す。外面は右上がりのタタキのちヨコナデを施す。体部の内面はヘラケズリ、外面は右上がりのタタキを施す。体部の外面には煤が付着している。	10YR3/3 暗褐色	２㎜以下の砂粒を含む。（角閃石を多く含む生駒西麓産）	良好	
93	ＳＩ301	古式土師器 甕	底径3.0	底部は突出する平底である。底部の内面はユビナデ、外面は右上がりのタタキを施す。	7.5YR5/2 灰褐色	１㎜程度の砂粒を含む	良好	
94	ＳＩ302	古式土師器 壺	口径18.0	口縁部は外反する。端部は上方へつまみ出し丸く終わる。口縁部の内外面はヨコナデを施す。内面に波状文を施す。	10YR8/3 浅黄橙色	１㎜程度の砂粒を含む	良好	
95	ＳＩ302 P-1	古式土師器 甕	底径7.1	底部は突出する平底である。体部の内面はヘラナデ、外面は右上がりのタタキを施す。底部の外面はヨコナデを施す。体部の内面には部分的に黒斑がある。	2.5YR7/4 淡赤橙色	１㎜以下の砂粒を少量含む	良好	
96	ＳＩ302 P-1	古式土師器 甕	底径5.4	底部は突出する平底である。体部の内面はヘラナデ、外面は右上がりのタタキを施す。底部の外面はヨコナデを施す。	10YR4/4 褐色	７㎜以下の砂粒を含む。	良好	
97 17	ＳＩ302 D-1	古式土師器 鉢	口径14.8	体部は内湾し外上方へ伸びる。口縁部は２段に屈曲し外反する。端部は尖りぎみに丸く終わる。内外面はヘラミガキを施すと思われるが、表部が摩耗しており、調整は不明瞭である。	10YR7/8 黄橙色	４㎜以下の砂粒を含む。	良好	



第15図　ＳＩ302 平・断面図

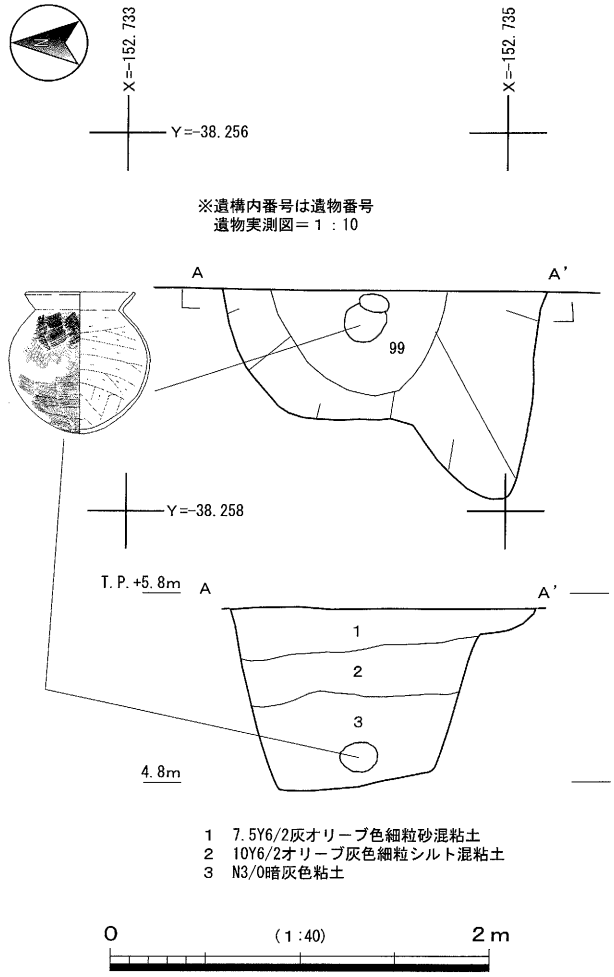
の途中で途切れている。壁溝の幅は0.3～0.5m、深さは0.14mを測り、埋土は10YR4/4褐色細粒シルト質粘土(10Y5/1灰色粘土のブロック混じる)である。住居の埋土からは古式土師器が少量出土した。このうち図化したものは90～93である。90は壺で、底部は尖りぎみの平底で、体部は球形である。91は外面に太筋のタタキを施すことからＶ様式系の甕になると思われる。92は庄内式甕で、口縁部は丸く終わっていることと、太筋のタタキを施すこと、また復元すると体部上位に最大径があることなどの特徴から庄内式古相に比定できる。角閃石を多く含む生駒西麓産の胎土である。93は底部が突出するＶ様式系の甕である。出土遺物から遺構の時期は古墳時代初頭の庄内式古相に比定できる。

ＳＩ302

３・４Ｃ地区で検出した。住居の北東部は調査区外に至る。検出した南北幅は2.0m、東西幅は2.3mを測る。平面の形状は方形になると思われる。深さは0.2mを測り、埋土は10YR4/1褐灰色細粒シルト混粘土である。南北軸を基準にすると主軸はN―22°－Wである。床面では小穴２個(Ｐ－１～Ｐ－２)と溝２条(Ｄ－１～Ｄ－２)を検出した。Ｐ－１とＰ－２は柱穴で、径0.3～0.4m、深さは0.14～0.16mを測る。柱間は1.9mを測る。壁溝は西部で検出した。壁溝の幅は0.3～0.4m、深さは0.3mで、埋土は7.5YR4/1褐灰色細粒砂混粘土である。住居の埋土からは古式土師器が少量出土した。このうち図化したものは 94～97である。94は壺で、口縁部内面に波状文を施す。95・96は底部が突出するＶ様式系の甕である。97は２段に屈曲し外反する鉢と思われ、他地域からの搬入品の可能性がある。出土遺物から遺構の時期は古墳時代初頭の庄内式古相に比定できる。

ＳＥ301

４Ｇ・Ｈ地区で検出した。ＳＤ321を切り、遺構の東側は調査区外に至る。検出した平面形状は不定形で、長径1.6mを測る。断面形状は南部に段をもつ逆台形で、深さ1.0mを測る。埋土は上から7.5Y6/2灰オリーブ色細粒砂混粘土、10Y6/2オリーブ灰色細粒シルト混粘土、N3/0暗灰色粘土で、N3/0暗灰色粘土層内からは古式土師器が出土した。出土遺物のうち図化したものは98～101である。98は複合口縁壺で、口縁部の外面に波状文と刺突文を施す。99～101は甕である。99は体部の外面中～下位に煤が付着し、内面の下～中位には炭化物（米？）が付着している。口縁部外面から体部上位にかけて吹きこぼれが見られる。煤、焦げの付着状況から、浮き置きで加熱し



第16図　ＳＥ301 平・断面図

表13　出土遺物観察表(10)

遺物番号 図版番号	遺構	器種	法量（cm）	形態･調整等	色調	胎土	焼成	備考
98 17	ＳＥ301	古式土師器 複合口縁壺		口縁部は二段に外反する。口縁部の内面はヘラミガキ、外面は波状文と刺突文を施す。	7.5ＹＲ7/6 橙色	１㎜以下の砂粒を含む。	良好	
99 17	ＳＥ301	古式土師器 甕	口径13.7 器高18.65 体部最大径18.2	底部は丸みのある尖り底である。体部最大径は中位にある。口縁部は「く」の字に屈曲し外反する。端部は上方につまみ出し、面を形成する。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はヘラケズリ、外面の上位は右上がりのタタキのちハケナデ、下位はハケナデを施す。体部の外面中位には煤が、体部の内面下～中位には炭化物（米？）が付着している。	10YR6/2 灰黄褐色	４㎜以下の砂粒を含む。（角閃石を多く含む生駒西麓産）	良好 （硬く焼き締まる。）	
100	ＳＥ301	古式土師器 甕	口径13.4	口縁部はゆるやかに折れ曲がり内湾して伸びる。端部は内側に肥厚し面を形成する。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はヘラケズリ、外面はナデを施す。体部の外面には煤が付着している。	10YR3/3 暗褐色	２㎜以下の砂粒を多量に含む。	良好	
101	ＳＥ301	古式土師器 甕	口径13.4 体部最大径18.2	体部は球形である。口縁部はゆるやかに折れ曲がり内湾して伸びる。端部は内側に肥厚し面を形成する。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はヘラケズリ、外面はハケナデを施す。体部の内面には粘土接合の痕跡がある。体部の外面には煤が付着している。	10YR3/2 黒褐色	２㎜以下の砂粒を多量に含む。	良好	

た可能性が高い。また、炭化物が付着している状況から、内面を洗わずに廃棄した可能性が考えられる[註1]。100と101は布留甕で、体部の外面中位に煤が付着している。出土遺物から遺構の時期は古墳時代前期の布留式期古相に比定できる。

註１　99の表面観察においては、北陸学院大学小林正史教授からご教示いただいた。記して感謝いたします。

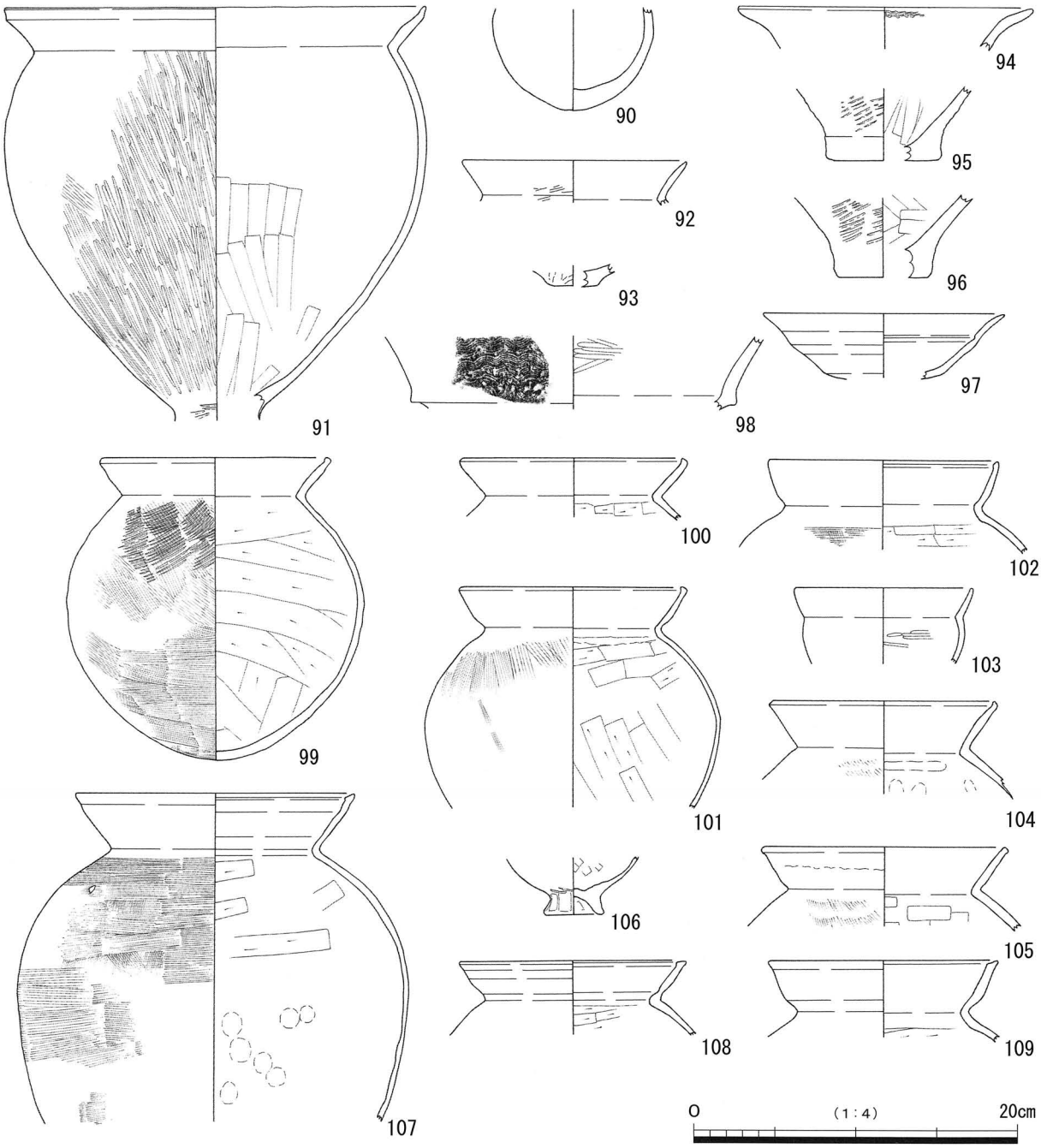
ＳＫ301～317

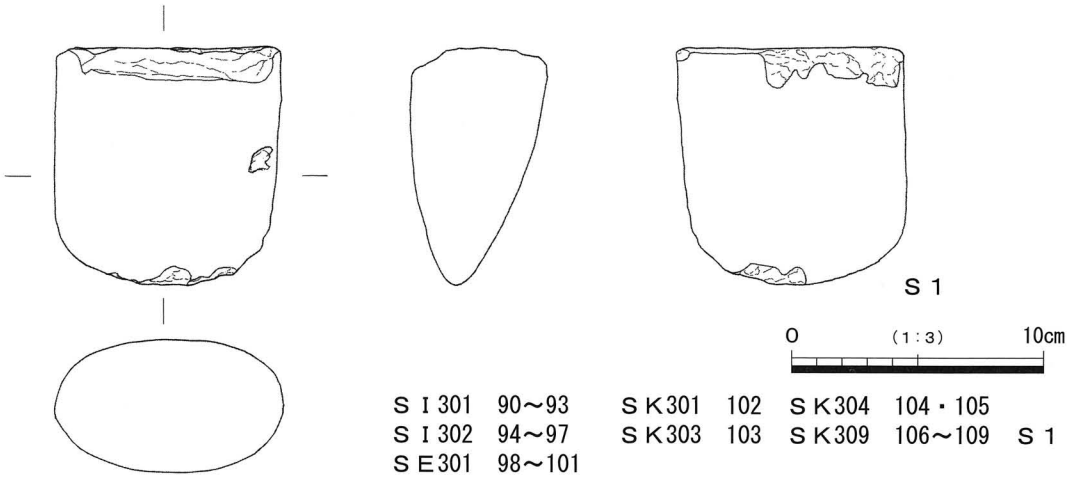
各土坑の平面形状は円形、楕円形、不定形を呈し、断面形状は逆台形である。埋土はＳＫ301～312、314、315、317が単一で、313は３層、316は５層である。各土坑の平面形状、規模、配置などの規則性は見受けられず遺構の性格は不明である。ＳＫ301～306・308・309・311～314・316・317からは古式土師器が出土した。出土遺物のうち図化したものはＳＫ301の102、ＳＫ303の103、ＳＫ304の104・105、ＳＫ309の106～109・Ｓ１、ＳＫ313の110～126、ＳＫ316の127である。

102・104・105は布留式の甕、103は布留式の鉢である。103～105は布留式古相に比定できる。106は製塩土器で、器壁は非常に薄く二次焼成を受ける。布留式に比定。107～109は布留式古相～中相の甕で、口縁端部は肥厚し面を形成する。Ｓ１は磨製大型蛤刃石斧で、刃部は両刃である。110・111は布留式古相～中相の直口壺である。112は布留式古相の山陰系の複合口縁壺である。113～119は布留式古相～中相の甕。121～123は布留式中相の高杯である。124～126は布留式の小型丸底壺で、125には穿孔がある。124は布留式中相に比定できる。127は布留式古相～中相に比定できる甕である。なお、検出した各土坑の詳細については表14にまとめた。

ＳＰ301～315

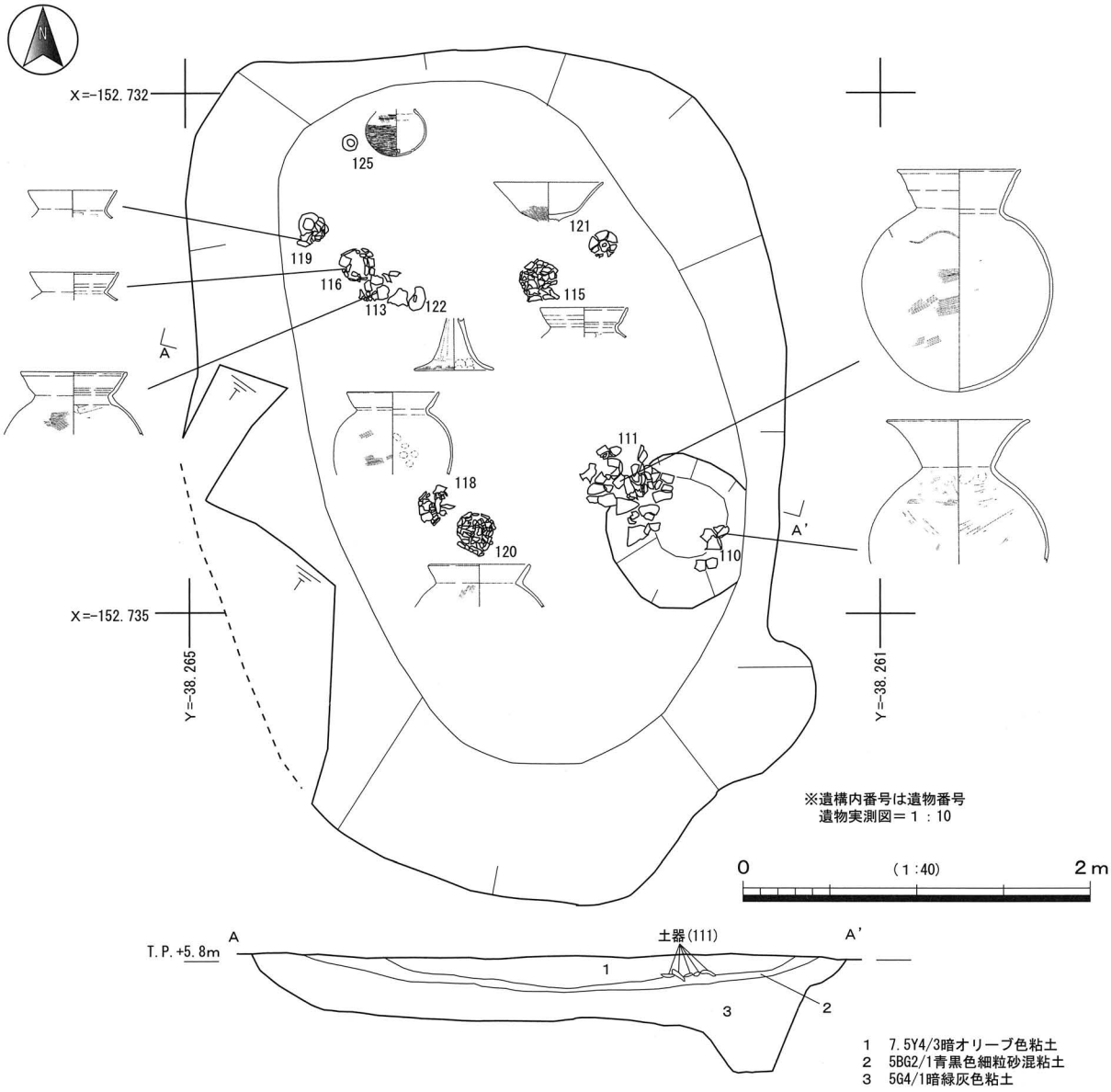
各小穴の平面形状は円形・楕円形・不定形に分けられ、径0.15～0.65mを測る。断面形状はＳＫ303・314が皿状を呈す他は逆台形である。深さは0.05～0.45mを測り、埋土は単一であった。建物を構成するものはなく、また、規模や方向などの規則性は見られない。ＳＰ302・304・305・308～315からは古式土師器が出土したが、図化できるものはなかった。なお検出した各小穴の詳細については表15にまとめた。





ＳＩ301　90～93　　ＳＫ301　102　ＳＫ304　104・105
ＳＩ302　94～97　　ＳＫ303　103　ＳＫ309　106～109　Ｓ１
ＳＥ301　98～101

第17図　ＳＩ301・302、ＳＥ301、ＳＫ301・303・304・309出土遺物実測図



第18図　ＳＫ313平・断面図

ＳＤ301～321

平面形状は直線に伸びるもの、Ｌ字に曲がるものがある。断面形状は逆台形と皿状を呈す。埋土は単一であった。各溝は平面形状、規模、配置などに規則性は見られなかった。

ＳＤ301～306・308・309・311～314・316・317からは古式土師器が出土した。出土遺物のうち図化したものはＳＤ307の128である。128は布留式の複合口縁壺である。なお、検出した各溝の詳細については表16・17にまとめた。

遺構に伴わない出土遺物

５層からは古式土師器が出土した。遺物のうち図化したものは129・130である。

129は古式土師器のＶ様式系甕である。130は古式土師器の高杯で、布留式に比定できる。

表14　第３面土坑一覧表

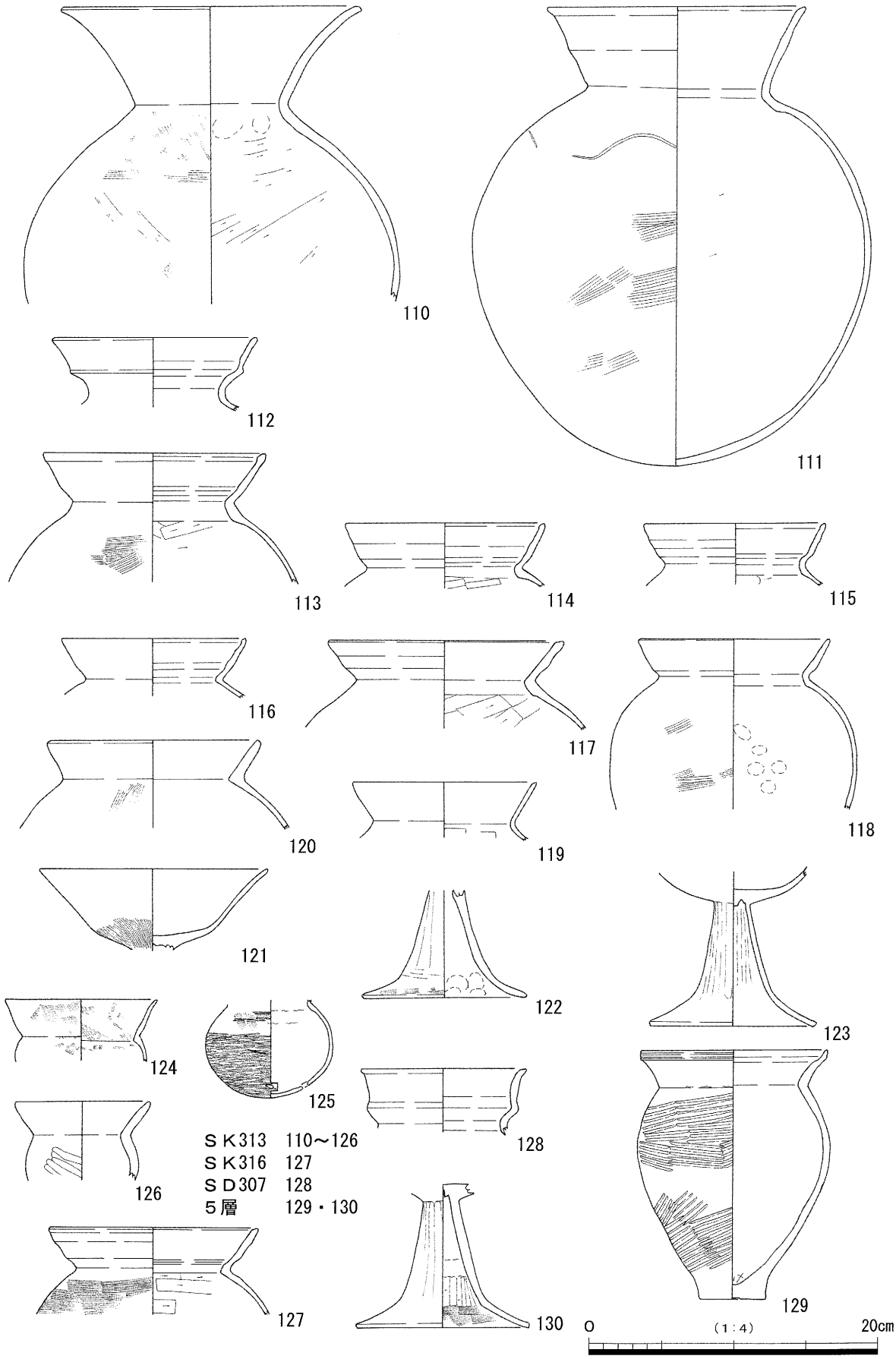
遺構番号	地区	平面形状	長径(m)	短径(m)	径(m)	断面形状	深さ(m)	埋土	出土遺物
ＳＫ301	２Ｃ	円形　ＳＩ301を切る	－	－	0.8	逆台形	0.25	7.5Y4/3暗オリーブ色粘土	古式土師器
ＳＫ302	２・３Ｃ・Ｄ	楕円形	1.75	1.4	－	逆台形	0.15	7.5Y4/3暗オリーブ色粘土	古式土師器
ＳＫ303	２Ｄ	円形　ＳＰ303に切られる	－	－	1.0	逆台形	0.1	7.5Y4/3暗オリーブ色粘土	古式土師器
ＳＫ304	２Ｄ	楕円形	1.8	0.7	－	逆台形	0.1	7.5Y4/3暗オリーブ色粘土	古式土師器
ＳＫ305	２Ｅ	円形　撹乱で切られる	－	－	0.8	逆台形	0.15	7.5Y4/3暗オリーブ色粘土	古式土師器
ＳＫ306	３Ｅ	円形　撹乱で切られる	－	－	1.8	逆台形	0.1	7.5Y4/3暗オリーブ色粘土	古式土師器
ＳＫ307	３Ｅ	楕円形	1.2	1.0	－	逆台形	0.1	7.5Y4/3暗オリーブ色粘土	なし
ＳＫ308	２Ｅ・Ｆ	不定形	3.4	2.0	－	逆台形	0.2	7.5Y4/3暗オリーブ色粘土	古式土師器
ＳＫ309	３Ｇ	不定形	1.6	1.2	－	逆台形	0.15	7.5Y4/3暗オリーブ色粘土	古式土師器
ＳＫ310	２Ｄ・Ｅ	不定形　撹乱で切られる	4.0	1.5	－	逆台形	0.1	7.5Y4/3暗オリーブ色粘土	なし
ＳＫ311	３Ｄ・Ｅ	不定形　撹乱で切られる	4.5	2.1		逆台形	0.15	7.5Y4/3暗オリーブ色粘土	古式土師器
ＳＫ312	２Ｆ	円形　撹乱で切られる	－	－	1.1	逆台形	0.1	7.5Y4/3暗オリーブ色粘土	古式土師器
ＳＫ313	３Ｇ・Ｈ	不定形	5.0	3.5	－	逆台形	0.4	7.5Y4/3暗オリーブ色粘土 5BG2/1青黒色細粒砂混粘土　土器含む 5G4/1暗緑灰色粘土	古式土師器
ＳＫ314	２Ｇ・Ｈ	不定形　西部は調査区外	0.9	0.4	－	逆台形	0.2	7.5Y4/3暗オリーブ色粘土	古式土師器
ＳＫ315	３Ｈ・Ｉ	楕円形	1.0	0.6	－	逆台形	0.2	7.5Y4/3暗オリーブ色粘土	なし
ＳＫ316	３Ｈ	楕円形	1.3	1.0	－	逆台形	0.25	10Y5/1灰色粘土 10YR2/1黒色細粒シルト　炭含む 10YR5/1褐灰色粘土 10YR2/1黒色細粒シルト　炭含む 5B4/1暗青灰色粘土	古式土師器
ＳＫ317	４Ｈ	不定形	1.2	0.8	－	逆台形	0.15	7.5Y4/3暗オリーブ色粘土	古式土師器

表15　第３面小穴一覧表

遺構番号	地区	平面形状	長径(m)	短径(m)	径(m)	断面形状	深さ(m)	埋土	出土遺物
ＳＰ301	３Ｃ	楕円形	0.5	0.3	－	逆台形	0.15	5Y5/1灰色細粒砂粘土	なし
ＳＰ302	３Ｄ	楕円形	0.3	0.1	－	逆台形	0.1	5Y5/1灰色細粒砂粘土	古式土師器
ＳＰ303	２Ｄ	円形　ＳＫ303を切る	－	－	0.3	皿状形	0.05	5Y5/1灰色細粒砂粘土	なし
ＳＰ304	３Ｆ	円形	－	－	0.5	逆台形	0.25	5Y5/4オリーブ色粘土	古式土師器
ＳＰ305	３Ｆ	楕円形	0.6	0.4	－	逆台形	0.35	5Y5/4オリーブ色粘土	古式土師器
ＳＰ306	３Ｆ	円形	－	－	0.2	逆台形	0.1	5Y5/4オリーブ色粘土	なし
ＳＰ307	３Ｆ	円形	－	－	0.25	逆台形	0.3	5Y5/4オリーブ色粘土	なし
ＳＰ308	３Ｆ・Ｇ	楕円形	0.4	0.3	－	逆台形	0.45	5Y5/4オリーブ色粘土	古式土師器
ＳＰ309	２Ｆ	楕円形	0.7	0.4	－	逆台形	0.1	5Y5/1灰色粗粒シルト混粘土	古式土師器
ＳＰ310	２Ｇ	楕円形	0.7	0.3	－	逆台形	0.1	5Y5/1灰色粗粒シルト混粘土	古式土師器
ＳＰ311	２Ｇ	円形	－	－	0.15	逆台形	0.1	5Y5/4オリーブ色粘土	古式土師器
ＳＰ312	３Ｈ	円形	－	－	0.18	逆台形	0.18	5Y5/1灰色粘土	古式土師器
ＳＰ313	３Ｈ	不定形	0.6	0.2	－	逆台形	0.15	5Y5/1灰色粘土	古式土師器
ＳＰ314	３Ｈ・Ｉ	楕円形	0.5	0.3	－	皿状形	0.05	5Y5/1灰色粘土	古式土師器
ＳＰ315	４Ｉ	不定形	0.5	0.3	－	逆台形	0.15	5Y5/1灰色粘土	古式土師器

表16　第３面溝一覧表（１）

遺構番号	地区	平面形状	幅（m）	断面形状	深さ(m)	埋土	出土遺物
ＳＤ301	３Ｄ	南東-北西方向に直線に伸びる	0.2	皿状形	0.05	2.5Y4/6オリーブ褐色細粒砂混粘土	古式土師器
ＳＤ302	３Ｃ・Ｄ	南東-北西方向に直線に伸びる	0.3	皿状形	0.04	2.5Y4/6オリーブ褐色細粒砂混粘土	古式土師器
ＳＤ303	３・４Ｃ	南西-北東方向に直線に伸びる ＳＤ304を切る	0.2	皿状形	0.05	2.5Y4/6オリーブ褐色細粒砂混粘土	なし
ＳＤ304	３Ｃ	南東-北西方向に直線に伸びる ＳＤ303に切られる	0.15	逆台形	0.08	5Y5/6オリーブ色細粒シルト混粘土	古式土師器
ＳＤ305	３Ｃ	南東-北西方向に直線に伸びる	0.8	逆台形	0.4	5Y6/1オリーブ色細粒砂混粘土	古式土師器
ＳＤ306	２Ｄ・Ｅ	南西-北東方向に直線に伸びる	0.18	皿状形	0.06	2.5Y4/6オリーブ褐色細粒砂混粘土	なし
ＳＤ307	３Ｆ	東西方向に直線に伸びる	0.6	逆台形	0.18	5Y4/3暗オリーブ色細粒砂混粘土	古式土師器
ＳＤ308	２Ｆ	東西方向に直線に伸びる	0.26	逆台形	0.06	2.5Y4/6オリーブ褐色細粒砂混粘土	なし
ＳＤ309	２Ｆ・Ｇ３Ｆ	東西方向に直線に伸びるＳＤ310、ＳＤ311を切る	0.9	逆台形	0.16	5Y4/3暗オリーブ色細粒砂混粘土	古式土師器



第19図　ＳＫ313・316、ＳＤ307、５層出土遺物実測図

表17　第３面溝一覧表(２)

遺構番号	地区	平面形状	幅（m）	断面形状	深さ（m）	埋土	出土遺物
ＳＤ310	２Ｆ・Ｇ	南北方向に直線に伸びる　ＳＤ309に切られる	0.55	逆台形	0.12	2.5Y6/1黄灰色細粒砂混粘土	古式土師器
ＳＤ311	２・３Ｆ・Ｇ	東西に直線に伸び、西部は北西方向に折れ曲がる　ＳＤ309に切られる	0.42	逆台形	0.1	2.5Y4/3オリーブ褐色細粒シルト混粘土	古式土師器
ＳＤ312	２Ｇ	東西方向に直線に伸びる	0.62	逆台形	0.15	5Y5/4オリーブ色粗粒シルト混粘土	古式土師器
ＳＤ313	２Ｇ	南北方向に直線に伸びる	0.65	逆台形	0.2	2.5Y6/1黄灰色細粒砂混粘土	なし
ＳＤ314	２Ｈ	東西方向に直線に伸びる	0.5	逆台形	0.22	5Y5/4オリーブ色粗粒シルト混粘土	なし
ＳＤ315	３Ｈ・Ｉ	南西-北東方向に直線に伸びる	0.2	逆台形	0.1	5Y4/4暗オリーブ色細粒砂混粘土	古式土師器
ＳＤ316	３Ｈ	南北方向に直線に伸びる	0.18	逆台形	0.1	5Y4/4暗オリーブ色細粒砂混粘土	なし
ＳＤ317	３Ｈ・Ｉ	南西-北東方向に直線に伸びる	0.26	皿状形	0.08	5Y4/4暗オリーブ色細粒砂混粘土	なし
ＳＤ318	３Ｈ・Ｉ	南西-北東方向に直線に伸びる	0.32	皿状形	0.08	5Y4/4暗オリーブ色細粒砂混粘土	古式土師器
ＳＤ319	３・４Ｈ	南西-北東方向に直線に伸びる　ＳＤ320に切られる	0.4	皿状形	0.05	5Y4/4暗オリーブ色細粒砂混粘土	なし
ＳＤ320	３・４Ｇ４Ｈ	南東-北西方向に直線に伸びる　ＳＤ319を切る	0.5	逆台形	0.2	5Y5/1灰色細粒シルト混粘土	なし
ＳＤ321	４Ｇ	南東-北西方向に直線に伸びる　ＳＥ301に切られる	0.32	皿状形	0.1	5Y5/1灰色細粒シルト混粘土	なし

表18　出土遺物観察表(11)

遺物番号 図版番号	遺構	器種	法量（cm）	形態・調整等	色調	胎土	焼成	備考
102	ＳＫ301	古式土師器 甕	口径14.0	口縁部は折れ曲がり内湾して伸びる。端部は内側に肥厚し面を形成する。口縁部の内面ナデ、外面はヨコナデを施す。体部の内面はヘラケズリ、外面はハケナデを施す。内面のヘラケズリは屈曲部におよんでいない。	10YR6/3 にぶい黄橙色	４㎜以下の砂粒を多量に含む。	良好	
103	ＳＫ303	古式土師器 鉢	口径10.8	体部は内湾する。口縁部は「く」の字に屈曲し内湾しながら外上方へ伸びる。端部は尖りぎみに丸く終わる。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はヘラミガキ、外面はヨコナデヨコナデを施す。	10YR7/6 明黄褐色	１㎜以下の砂粒を含む。	良好	
104	ＳＫ304	古式土師器 甕	口径13.6	口縁部は「く」の字に屈曲する。端部は内上方へつまみ出し面を形成する。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はユビナデ、外面はハケナデを施す。外面に黒斑がある。	10YR5/1 褐灰色	2.5㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	
105	ＳＫ304	古式土師器 甕	口径14.8	口縁部は「く」の字に屈曲したのち外反する。端部は面を形成する。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はヘラナデ、外面はハケナデを施す。口縁部の外面に粘土接合の痕跡と黒斑がある。	10YR5/1 褐灰色	３㎜以下の砂粒を含む。	良好	
106	ＳＫ309	古式土師器 製塩土器	底径3.2	底部は「ハ」の字に開く。体部の内面はヘラナデ、外面は左上がりのタタキのちユビナデを施す。底部の外面はユビナデを施し、底面にはヘラ状工具の痕跡がある。器壁は非常に薄く、二次焼成をうける。	10YR7/4 にぶい黄橙色	４㎜以下の砂粒を多量に含む。	良好	
107	ＳＫ309	古式土師器 甕	口径17.0 体部最大径24.0	口縁部は折れ曲がり内湾して伸びる。端部は内側に肥厚し面を形成する。口縁部の内面はナデ、外面はヨコナデを施す。体部の内面は上位ヘラケズリ、下位ユビナデを施す。体部の外面に縦方向と左上がりのハケナデを施した後、横方向のハケナデを施す。体部の外面上位にはヘラによる刺突文がある。外面には全体的に煤が付着。	10YR5/1 褐灰色	３㎜以下の砂粒を含む。	良好	
108	ＳＫ309	古式土師器 甕	口径13.8	口縁部は折れ曲がり内湾して伸びる。端部は内側に肥厚し面を形成する。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はヘラケズリ、外面はナデを施す。	10YR5/1 褐灰色	２㎜以下の砂粒を含む。	良好	
109	ＳＫ309	古式土師器 甕	口径14.0	口縁部は折れ曲がり内湾して伸びる。端部は内側に肥厚し面を形成する。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はヘラケズリ、外面はナデを施す。外面には煤が付着。	10YR5/1 褐灰色	１㎜以下の砂粒を多量に含む。	良好	
Ｓ１ 17	ＳＫ309	磨製大型蛤 刃石斧		刃部は両刃である。断面は楕円形を呈す。				
110	ＳＫ313	古式土師器 壺	口径20.0	口縁部は外反する。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はヘラケズリとユビナデ、外面はハケナデを施す。	5YR7/8 橙色	３㎜の砂粒を含む。	良好	
111 17	ＳＫ313	古式土師器 壺	口径17.4 器高31.9 体部最大径27.3	体部は球形である。口縁部は外反する。端部は尖りぎみに丸く終わる。口縁部の内外面はヨコナデを施し、体部の内面はヘラケズリのちユビナデ、外面はハケナデを施す。体部の外面上位にはヘラ状工具による波状文を施している。	7.5YR5/2 灰褐色	３㎜以下の砂粒を含む。	良好	

表19　出土遺物観察表(12)

遺物番号 図版番号	遺構	器種	法量（cm）	形態・調整 等	色調	胎土	焼成	備考
112 17	ＳＫ313	古式土師器 複合口縁壺	口径13.6	口縁部は外反したのち段を有し、さらに外上方へ外反する。端部は丸く終わる。口縁部の内外面はヨコナデを施す。	10YR6/6 明黄褐色	２㎜の砂粒を含む。	良好	
113	ＳＫ313	古式土師器 甕	口径15.0	口縁部は内湾する。端部は肥厚し面を形成する。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はヘラケズリ、外面はハケナデを施す。外面には黒斑がある。	10YR4/2 灰黄褐色	２㎜以下の砂粒を含む。	良好	
114	ＳＫ313	古式土師器 甕	口径13.6	口縁部は内湾する。端部は肥厚し面を形成する。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はヘラケズリを施す。外面には煤が付着している。	7.5YR6/6 橙色	3.5㎜以下の砂粒を含む。	良好	
115	ＳＫ313	古式土師器 甕	口径12.4	口縁部は内湾する。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はヘラケズリを施す。外面には煤が付着している。	10YR4/2 灰黄褐色	1.5㎜の砂粒を含む。	良好	
116	ＳＫ313	古式土師器 甕	口径12.4	口縁部は内湾する。端部は肥厚し面を形成する。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はヘラケズリを施す。	10YR4/2 灰黄褐色	２㎜の砂粒を含む。	良好	
117	ＳＫ313	古式土師器 甕	口径16.0	口縁部は内湾する。端部は面を形成する。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はヘラケズリ、外面はユビナデを施す。	10YR5/1 褐灰色	３㎜以下の砂粒を多量に含む。	良好	
118	ＳＫ313	古式土師器 甕	口径12.8	口縁部は内湾する。端部は面を形成する。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はヘラナデとユビナデ、外面はハケナデを施す。外面には煤が付着している。	10YR4/2 灰黄褐色	３㎜以下の砂粒を含む。	良好	
119	ＳＫ313	古式土師器 甕	口径12.6	口縁部は内湾する。端部は丸く終わる。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はヘラケズリを施す。	7.5YR6/6 橙色	1.5㎜の砂粒を含む。	良好	
120	ＳＫ313	古式土師器 甕	口径14.0	口縁部は「く」の字に屈曲し外上方へ伸びる。端部は丸く終わる。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はヘラケズリ、外面はハケナデを施す。	7.5YR7/6 橙色	３㎜以下の砂粒を多量に含む。	良好	
121	ＳＫ313	古式土師器 高杯	口径15.6	口縁部は外反する。端部は丸く終わる。杯部の内面はヨコナデ、外面の上位はヨコナデ、下位はハケナデを施す。	7.5YR6/6 橙色	３㎜の砂粒を含む。	良好	
122	ＳＫ313	古式土師器 高杯	裾径11.0	脚部は直線的に外下方に広がる筒状である。裾部は脚部からゆるやかに曲がり「ハ」の字に広がる。端部は尖りぎみに丸く終わる。脚部の内面はヘラケズリ、外面はヘラナデを施す。裾部の内面はユビナデ、外面はハケナデを施す。	5YR6/8 橙色	２㎜以下の砂粒を含む。	良好	
123	ＳＫ313	古式土師器 高杯	裾径11.2	脚部は直線的に外下方に広がる筒状である。裾部は脚部からゆるやかに曲がり「ハ」の字に広がる。端部は面を形成する。杯部の内外面は表部が摩耗しており調整は不明である。脚部の内面はユビナデを施し、しぼり目がある。外面はヘラナデを施す。裾部の内外面はユビナデを施す。	7.5YR7/6 橙色	４㎜以下の砂粒を多量に含む。	良好	
124	ＳＫ313	古式土師器 小型丸底壺	口径10.4	体部は横長の球形になると思われる。口縁部は屈曲し内湾ぎみに外上方に伸びる。端部は尖りぎみに丸く終わる。口縁部と体部の内外面はハケナデを施す。体部の内面には粘土接合の痕跡がある。	7.5ＹＲ7/3 にぶい橙色	１㎜程度の砂粒を含む	良好	
125 17	ＳＫ313	古式土師器 小型丸底壺	体部最大径8.7	体部は横長の球形である。体部の内面はナデ、外面の上位はハケナデのちヘラミガキ、中位と下位ヘラミガキを施す。体部の内面には粘土接合の痕跡がある。外面下位には穿孔がある。また外面下位には黒斑がある。	7.5YR6/6 橙色	３㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	
126	ＳＫ313	古式土師器 小型丸底壺	口径9.2	口縁部は屈曲し内湾ぎみに外上方に伸びる。端部は丸く終わる。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はユビナデ、外面はヘラミガキを施す。内外面には黒斑がある。	10YR7/8 黄橙色	２㎜以下の砂粒を含む。	良好	
127	ＳＫ316	古式土師器 甕	口径14.2	口縁部は内湾する。端部は肥厚し面を形成する。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はヘラケズリ、外面はハケナデを施す。口縁部の内面には黒斑がある。口縁部と体部の外面には煤が付着している。	7.5YR5/3 にぶい褐色	2.5㎜以下の砂粒を含む。	良好	
128	ＳＤ307	古式土師器 複合口縁壺	口径11.4	口縁部は外反したのち段を有し、さらに外上方へ外反する。端部は丸く終わる。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はヘラケズリを施す。	7.5YR5/1 褐灰色	３㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	
129 17	５層	古式土師器 甕	口径12.9 器高17.3 底部径4.4 体部最大径13.3	底部は突出する上げ底。体部は縦長。口縁部は「く」の字に屈曲し、外反する。端部は上方へつまみ出し面を形成する。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はナデ、外面は右上がりのタタキを施す。底部の内面にはヘラ状工具による痕跡がある。底部の外面はユビナデを施す。体部の外面には粘土接合の痕跡と黒斑がある。	10YR4/2 灰黄褐色	４㎜以下の砂粒を含む。	良好	
130 17	５層	古式土師器 高杯	裾径11.8	脚部は直線的に外下方に広がる筒状である。裾部は脚部からゆるやかに曲がり「ハ」の字に広がる。端部は面を形成する。脚部の内面はユビナデとヘラケズリ、外面ヘラナデを施す。裾部の内面はハケナデ、外面はユビナデを施す。	7.5YR6/6 橙色	２㎜以下の砂粒を含む。	良好	

第３章　まとめ

今回の調査では古墳時代初頭～近世までの遺構が検出された。以下では各時代の遺構および遺物について検出面毎に記載する。

第３面　（古墳時代初頭～前期[庄内式古相～布留式中相]）

古墳時代初頭［庄内式期古相］には調査地北部で検出した竪穴住居２棟（ＳＩ301・302）がある。南部には同時期の遺構の検出がないことから、同時期の居住域は北部に広がっている可能性が高いと考えられる。

古墳時代前期[布留式古相（布留Ⅰ）]には南東部で井戸（ＳＥ301）を、北部で土坑（ＳＫ303・304）を検出したことから、同時期の居住域は本調査地の周辺に存在していたと推測できる。

北西側約100ｍ地点の研究会第71次調査（ＫＨ2006－71）では、13区の第５層から布留式古相の土器が出土しており（樋口他2007）、北西側約200ｍ地点のセンターの調査では、生産域が検出されている（亀井他2007）。このことから、同時期の居住域の北西への広がりは、東西に伸びる府道加美旭町・久宝寺線から久宝寺緑地内の南部あたりまでであったと推測できる。東部への広がりは、調査例が少なく不明である。なお、本調査地の東部の研究会第６次調査（ＫＨ90－６）では、布留式古相の竪穴住居が検出され、さらに庄内式古相の井戸も検出しており、古墳時代初頭～前期にかけての居住域の存在が明らかになっている（原田1993）。また、研究会第35次調査（ＫＨ2000－35）でも、土坑などが検出されている（森本2002）。この２件の調査地と本調査地との距離は約400ｍを測り、かなり離れていることから一連の居住域と断定することは難しく、別の居住域があったと考えるのが妥当であろう。

布留式中相[布留Ⅱ～Ⅲ]では北部で土坑（ＳＫ301）を、南部で土坑（ＳＫ309・313・316）を検出した。ＳＫ309・313からは完形近くまで復元可能な土器が出土している状況から、同時期の居住域が本調査地の周辺に存在していたと推測できる。

第２面　（古墳時代前期[布留式期古相～中相]）

古墳時代前期[布留式期古相～中相]には、調査地全域で疎らに遺構を検出した。このうち、河川（ＮＲ201）は調査地の南端で検出した。東西方向に流路をもち、古墳時代前期の布留式期古相を中心とし、中相までの遺物が多くコンテナ箱約10箱程度廃棄されていた。出土遺物から布留式期古相に流れはじめ、中相に埋没したと考えられる。

ＮＲ201の廃絶時期の布留式期中相には土坑を数基と溝１条を検出したのみで、遺構の数が減り、居住域は廃絶したと見られる。

第１面　（奈良～平安時代、鎌倉時代、近世）

ＳＥ101は近世の農耕に関係する灌漑用の井戸の可能性があり、また、ＳＤ101は中世の農耕に関係する灌漑用の溝の可能性がある。さらに、ＳＤ102～108は奈良時代から平安時代にかけての、農耕に関連した素掘りの溝と推測される。このことから、奈良時代以降近世までは本調査地には生産域が広がっていたと推測される。

ＮＲ201内出土の環形付木製品について

今回出土した環形付木製品(以下本木製品と記す)の類例には、大阪府堺市下田遺跡、奈良県宇陀市戸石・辰巳前遺跡、滋賀県東近江市斗西遺跡がある(藤田1996・鈴木2000)。４例とも古墳時代のものであり、本木製品と時期は同じである。

本木製品は多くの土器が廃棄された河川からの出土で、出土状況が似ている例には下田遺跡がある。下田遺跡の環形付木製品の出土状況は、古墳時代前期[布留式期]の大溝の中から、多量の古式土師器や木器などとともに出土した(西村1996)。

下田遺跡出土の環形付木製品は「軸部は片手で掴む「握り」の部分と考えて良いだろう。木製品の軸の先端部に別の部材がついて完成品となる。(中略)あえて類品を推測すれば団扇か麈尾ないしは払子の類が挙げられる。」と言う考え方が報告されている(藤田1996)。

本木製品は軸の先端がないこと以外は、下田遺跡出土のものに形状が似ていることから、団扇か麈尾ないしは払子の可能性があると考えられる。

参考文献

・原田　昌則　1993「Ⅲ　久宝寺遺跡第６次調査(KH90－６)」　(財)八尾市文化財調査研究会報告37　(財)八尾市文化財調査研究会

・藤田　憲司　1996「第３章　威儀具(麈尾)について」『堺市下田所在　下田遺跡』-都市計画道路常盤浜寺線建設に伴う発掘調査報告書－(第二分冊)第Ⅲ部　考察篇　(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第18集　(財)大阪府文化財調査研究センター

・西村　歩他　1996『堺市下田所在　下田遺跡』－都市計画道路常盤浜寺線建設に伴う発掘調査報告書－　(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書　第18集　(財)大阪府文化財調査研究センター

・鈴木　裕明　2000　2000年度春季特別展『権威の象徴』-古墳時代の威儀具-　橿原考古学研究所付属博物館特別展図録第53冊　奈良県立橿原考古学研究所付属博物館

・森本めぐみ　2001「３.久宝寺遺跡第32次調査(KH99－32)」『平成12年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会

・森本めぐみ　2002「Ⅰ.久宝寺遺跡第35次調査(KH2000－35)」『八尾市立埋蔵文化財調査センター報告３』　八尾市教育委員会　(財)八尾市文化財調査研究会

・亀井　聡他　2007『八尾市　久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅶ－寝屋川流域下水道竜華水みらいセンター水処理施設等建設事業に伴う発掘調査他－』　(財)大阪府文化財センター調査報告書　第156集　財団法人大阪府文化財センター

・樋口　薫　　2007『久宝寺遺跡第71次調査』大阪府工業用水道改良事業配水管布設工事Φ400(八尾中央線分岐)に伴う埋蔵文化財発掘調査　(財)八尾市文化財調査研究会報告107　(財)八尾市文化財調査研究会

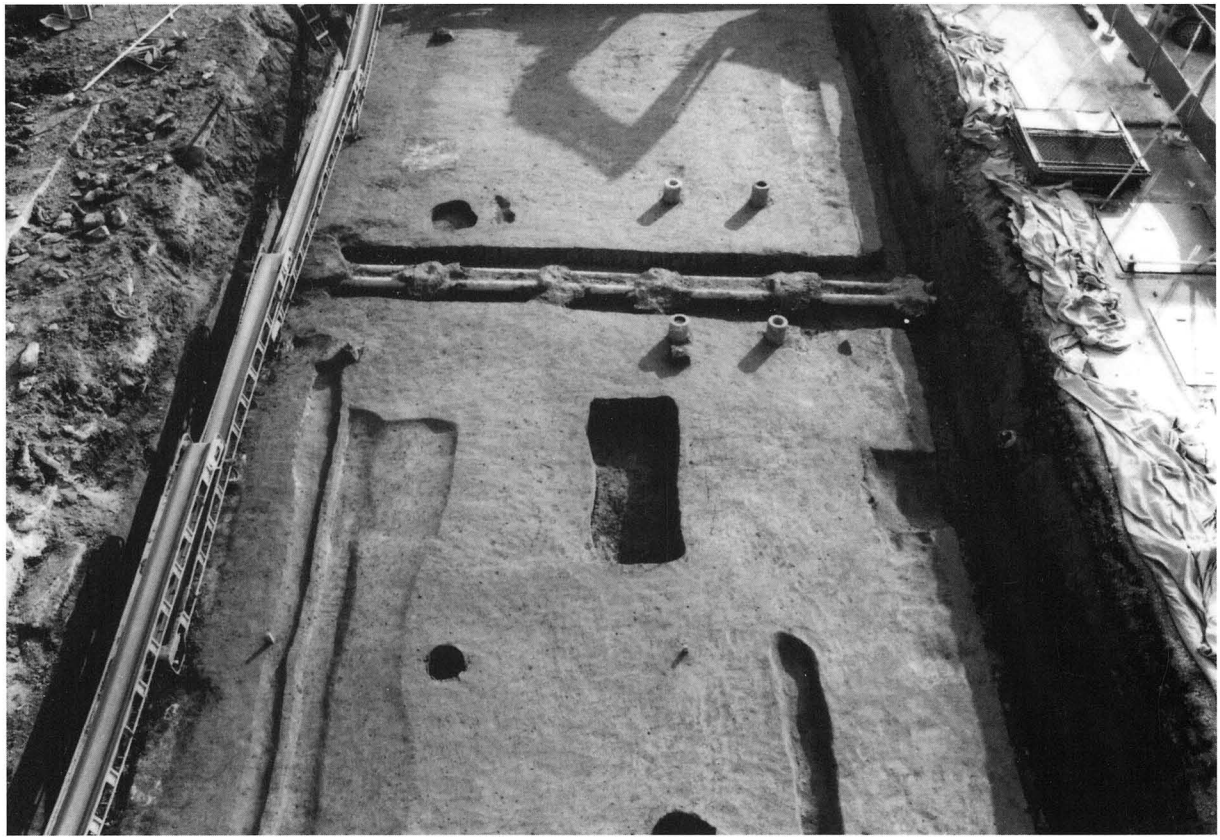
図　版

図版1

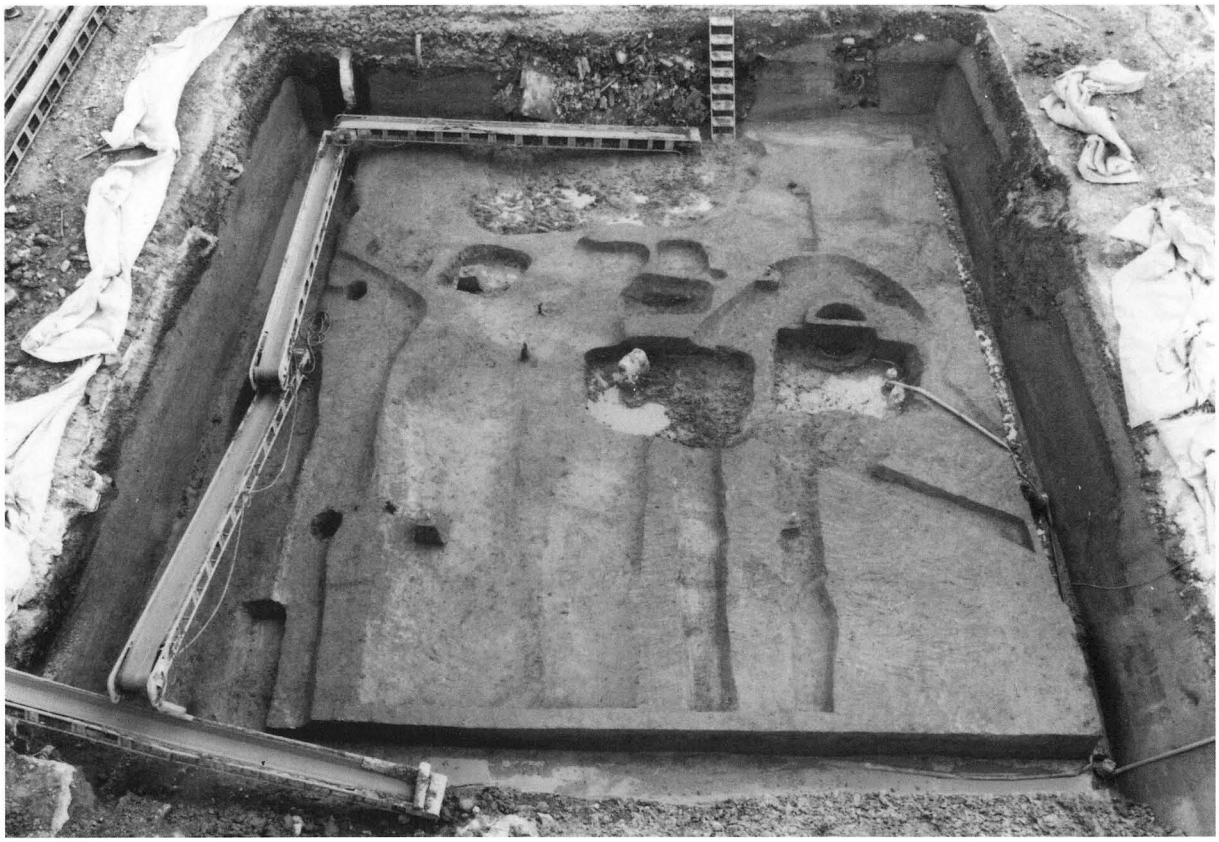
調査地周辺【中央は生駒山地】（西から）

調査前（南から）

図版2



北区　第１面全景（北から）

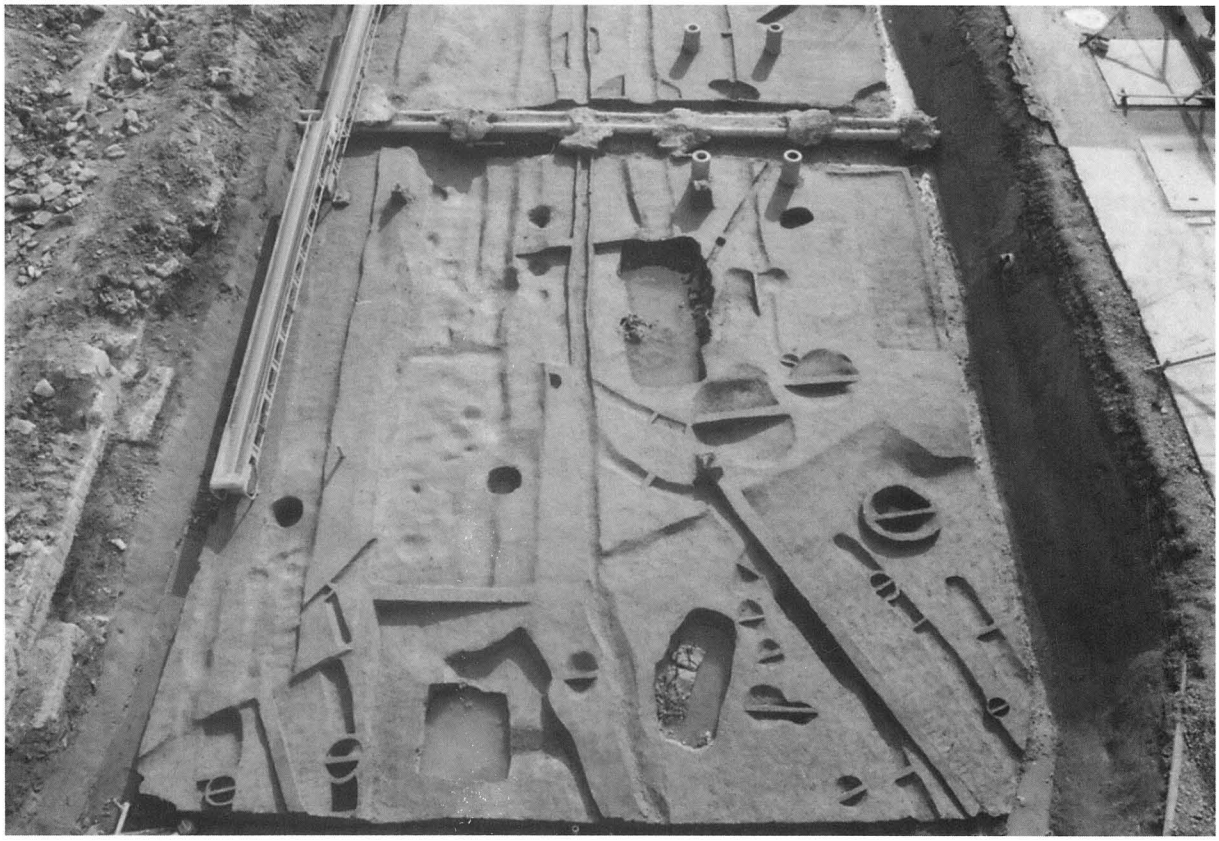


南区　第１面全景（北から）

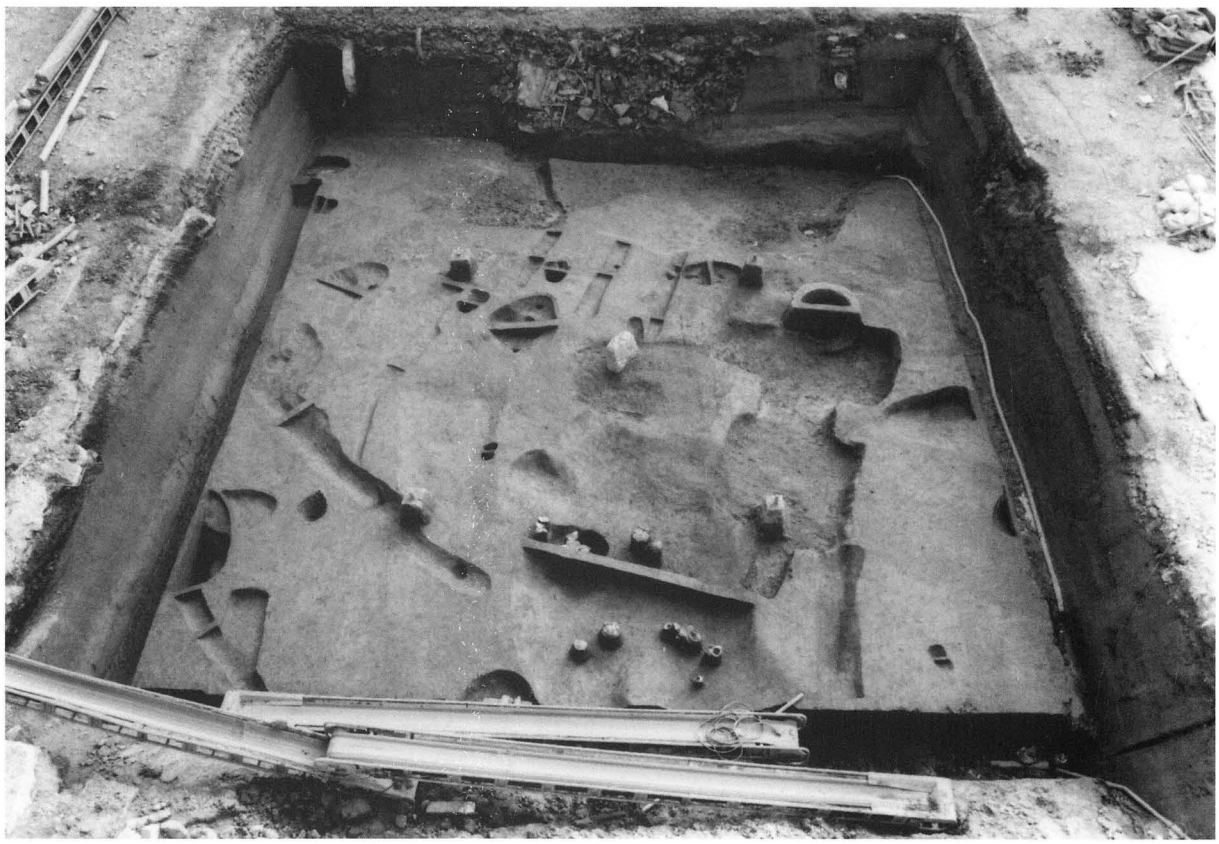
北区　第２面全景（北から）

南区　第２面全景（北から）

図版4



北区　第３面全景（北から）



南区　第３面全景（北から）

図版5

ＳＥ201（南から）

ＳＫ201（南から）

図版6

ＮＲ201（東から）

ＮＲ201遺物出土状況（南から）

ＮＲ201掘削状況（北から）

図版7

ＮＲ201環形付木製品出土状況（西から）

環形付木製品出土状況（西から）

図版8

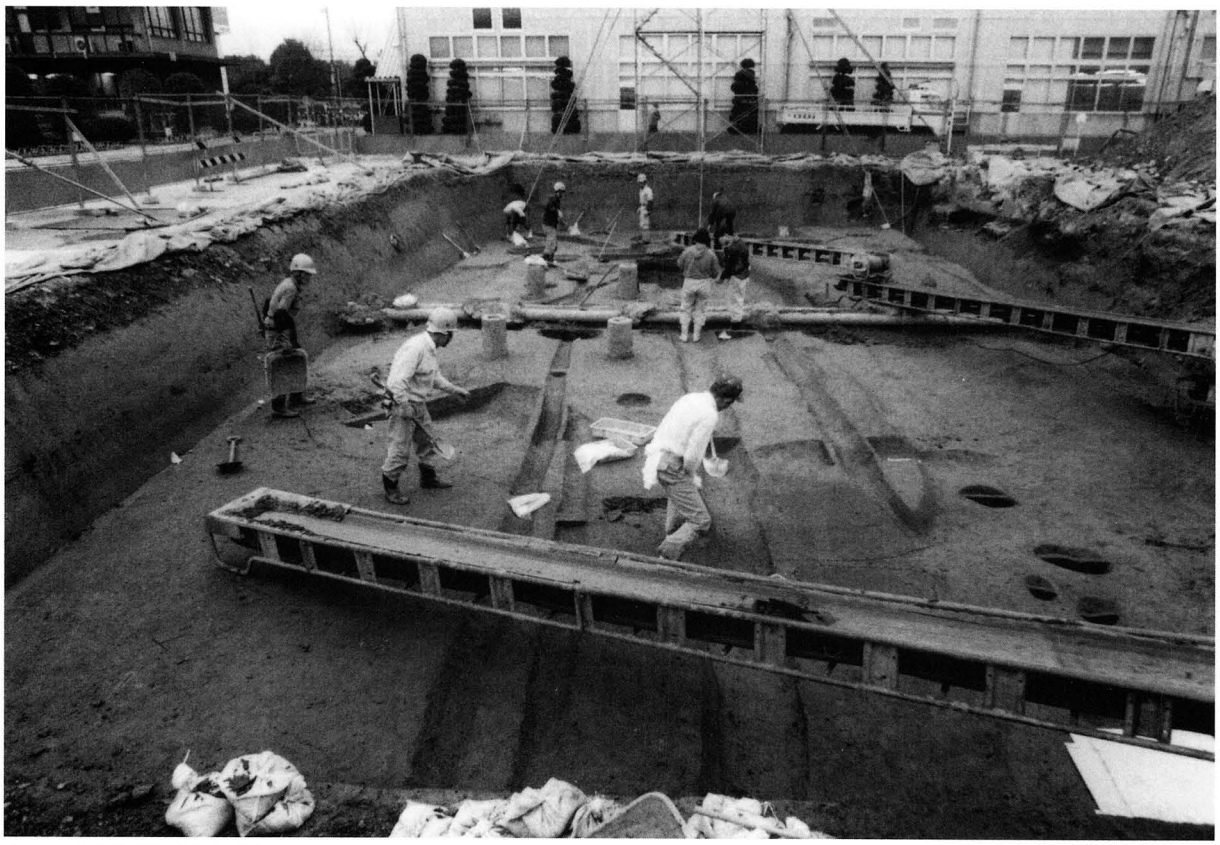
ＳＩ301（北西から）

ＳＩ302（北西から）

ＳＥ301（西から）

ＳＥ301遺物出土状況（西から）

図版10



第３面掘削状況（南から）

ＳＫ313（南から）

5

6

7

9

10

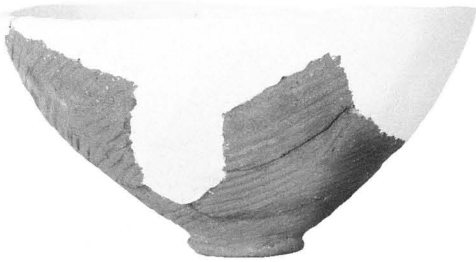
14

16

17

ＳＫ201（５・６）、ＮＲ201（７・９・10・14・16・17）出土遺物

図版12



1

24

23

27

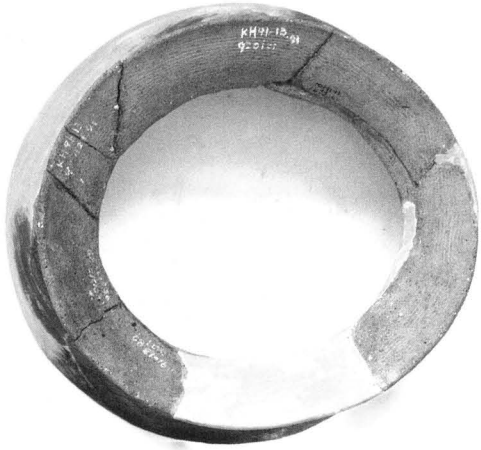
28

29

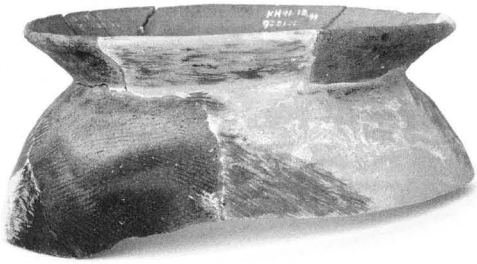
30

31

ＮＲ201出土遺物



44



41

45

46

47

48

56

ＮＲ201出土遺物

図版14

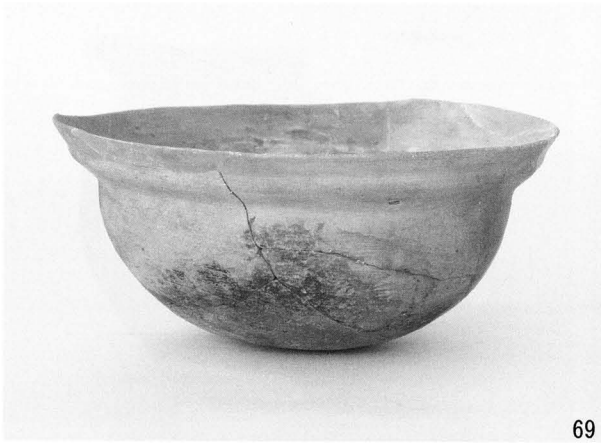
1

58

57

60

68



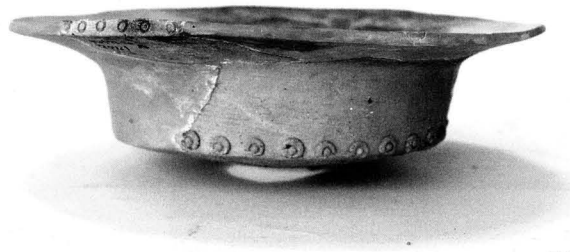
69

70

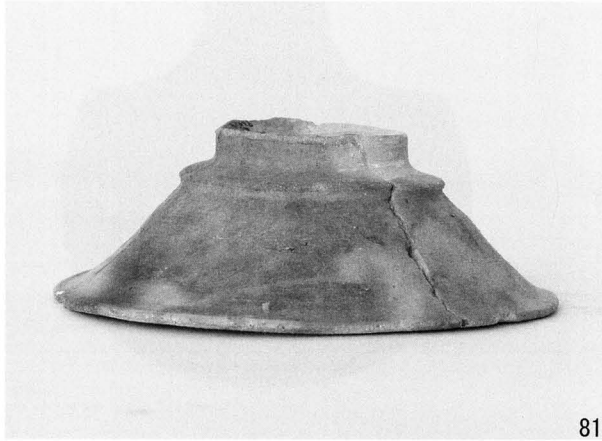
71

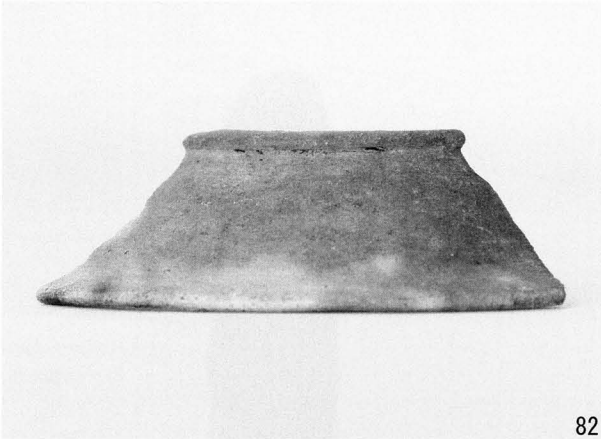
ＮＲ201出土遺物

77

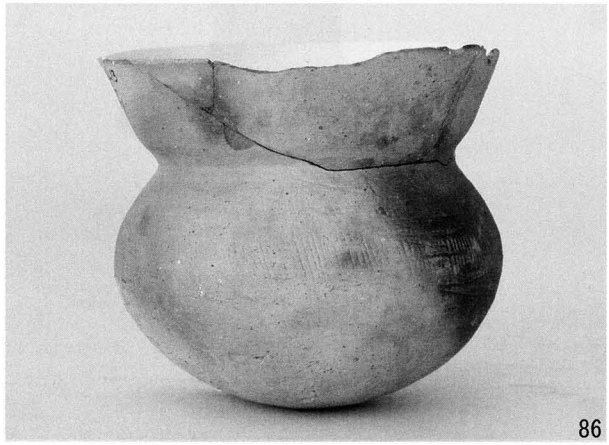

78

79


81


82

83


86

87

ＮＲ201出土遺物

図版16

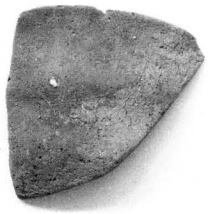
A面

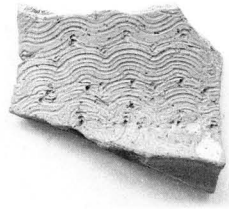
右側面

B面

左側面
W1

NR201出土遺物

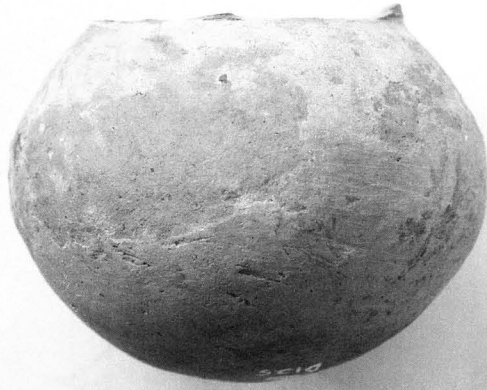

97


98

99

111

112


125

129

130

A面

B面

側面

刃部

S 1

S I 302(97)、S E 301(98・99)、S K 309(S 1)、S K 313(111・112・125)、5層(129・130)出土遺物

Ⅱ　久宝寺遺跡第14次調査（ＫＨ92－14）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市神武町190－１、及び大阪市平野区加美東７丁目１－１で実施した店舗付共同住宅建設に伴う久宝寺遺跡第14次調査（ＫＨ92－14）の発掘調査報告書である。

1．本調査は、八尾市教育委員会の指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が申請者から委託を受けて実施したものである。

1．調査は当調査研究会　坪田真一が担当した。

1．現地調査は、平成４年５月26日に着手し、同年８月10日に終了した。調査面積は約660㎡である。

1．現地調査には、垣内洋平・坂下　学・能勢直樹・濱田千年・山内千恵子の参加を得た。

1．内業整理は下記が参加し、現地調査終了後に着手して平成20年８月31日をもって終了した。

遺物復元－岩本順子・垣内・坂下・都築聡子・能勢・濱田

遺物実測－田島和惠・山内

遺物トレース－市森千恵子・村井俊子

遺構デジタルトレース－鈴木裕治・坪田

遺物写真撮影－垣内

その他－梶本潤二・田島宣子

1．本書の執筆及び編集は坪田が行った。

本　文　目　次

第１章　はじめに……35
第２章　調査概要……36
　第１節　調査方法……36
　第２節　基本層序……36
　第３節　検出遺構と出土遺物の概要……37
第３章　まとめ……73

挿　図　目　次

第１図　調査地位置図……35
第２図　地区割図……36
第３図　基本層序……37
第４図　第１面平面図……38
第５図　ＳＢ101平断面図……39
第６図　第２面平面図……40
第７図　ＳＩ201平断面図……41
第８図　ＳＩ201出土遺物……42
第９図　ＳＥ201出土遺物……42
第10図　ＳＥ201平断面図……43
第11図　ＳＥ202平断面図……44
第12図　ＳＫ206平断面図……44
第13図　ＳＥ202出土遺物……45
第14図　ＳＫ206・207出土遺物……45
第15図　第３面平面図……47
第16図　ＳＩ301～304平断面図……49
第17図　ＳＩ301～304出土遺物……50
第18図　ＳＢ301平断面図……50
第19図　ＳＢ302平断面図……51
第20図　ＳＥ301出土遺物……52
第21図　ＳＥ301平断面図……53
第22図　ＳＥ302平断面図……53
第23図　ＳＥ302出土遺物……53
第24図　ＳＥ303平断面図……54
第25図　ＳＥ303上層出土遺物……55
第26図　ＳＥ303下層出土遺物……56
第27図　ＳＥ304平断面図……57
第28図　ＳＥ305～307出土遺物……58
第29図　ＳＥ305平断面図……59
第30図　ＳＥ306平断面図……59
第31図　ＳＥ307平断面図……60
第32図　ＳＥ308平断面図……60
第33図　ＳＥ309平断面図……60
第34図　ＳＥ309・310出土遺物……61
第35図　ＳＥ310平断面図……62
第36図　ＳＥ311平断面図……63
第37図　ＳＥ311出土遺物……64
第38図　ＳＥ312平断面図……65
第39図　ＳＥ312出土遺物……65
第40図　ＳＫ309～311・314出土遺物……66
第41図　ＳＫ312平断面図……67
第42図　ＳＫ312出土遺物①……68
第43図　ＳＫ312出土遺物②……69
第44図　ＳＤ301出土遺物……71
第45図　ＳＤ322出土遺物……73

図　版　目　次

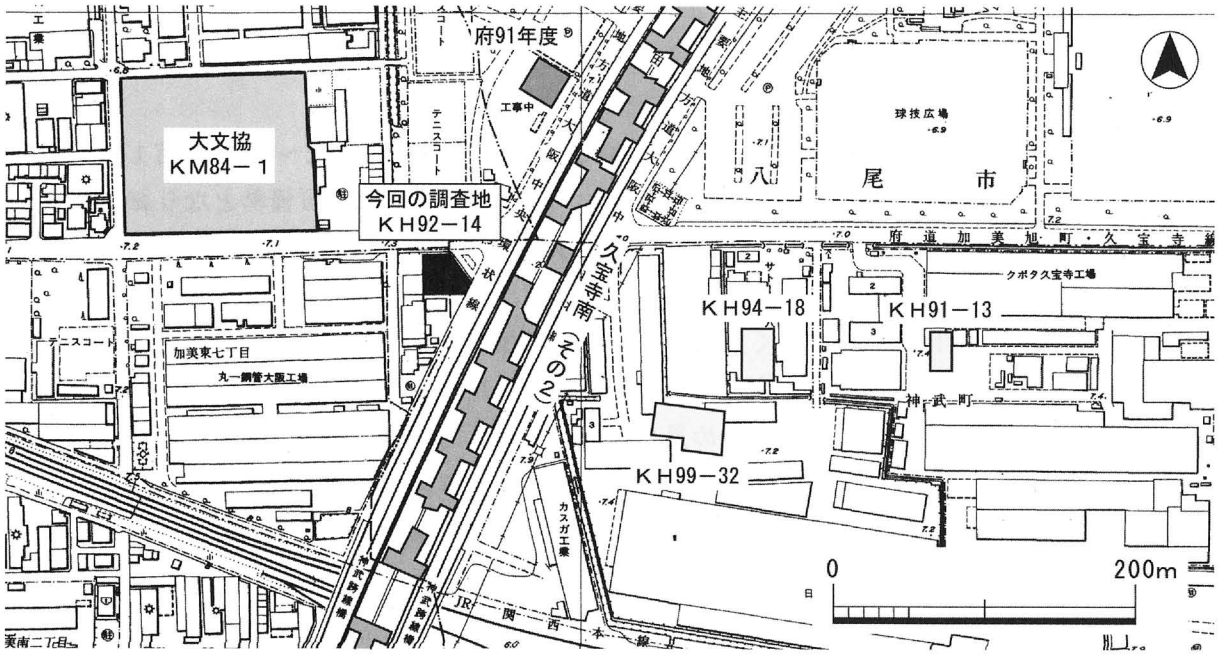
図版１　調査地周辺空中写真
図版２　東区第１面(南から)　　ＳＢ101(南から)
図版３　西区第２面(北から)
　　ＳＥ201(南から)　　ＳＥ202(南西から)
図版４　ＳＩ201(南から)
　　同K1(南から)　　同遺物出土状況(北西から)
図版５　西区第３面(北から)　　西区第３面(南から)
図版６　ＳＩ301～304(西から)　　同上(南から)
図版７　ＳＢ301(北東から)　　ＳＥ301遺物出土状況(南東から)
　　ＳＥ303上層遺物出土状況(北から)　　ＳＥ303(南から)
　　ＳＥ303完掘(西から)　　ＳＥ305(北西から)
図版８　ＳＥ306(北から)　　ＳＥ311遺物出土状況(南から)
　　ＳＥ311木器(153～155)出土状況(北から)　　ＳＥ312(北から)
　　ＳＤ301北部遺物出土状況(南西から)　　ＳＤ311中部遺物出土状況(南西から)
図版９　ＳＫ312(南東から)
　　同上(北東から)　　同細部(東から)
　　ＳＫ314(南東から)　　ＳＰ338(南西から)
図版10　出土遺物　ＳＩ201
図版11　出土遺物　ＳＩ201、ＳＥ202、ＳＩ301
図版12　出土遺物　ＳＥ301、ＳＥ302、ＳＥ303
図版13　出土遺物　ＳＥ303
図版14　出土遺物　ＳＥ303、ＳＥ305
図版15　出土遺物　ＳＥ305、ＳＥ306、ＳＥ307、ＳＥ309
図版16　出土遺物　ＳＥ309、ＳＥ310
図版17　出土遺物　ＳＥ311、ＳＥ312、ＳＫ310、ＳＫ311
図版18　出土遺物　ＳＫ314、ＳＫ312
図版19　出土遺物　ＳＫ312
図版20　出土遺物　ＳＫ312、ＳＤ301
図版21　出土遺物　ＳＤ301、ＳＤ322
図版22　出土遺物　ＳＥ301、ＳＥ305、ＳＥ311

第１章　はじめに

久宝寺遺跡は八尾市の西端に位置し、現在の行政区画によると、八尾市内では北久宝寺１～３、久宝寺１～６、西久宝寺、南久宝寺１～３、神武町、北亀井町１～３、龍華町１・２、渋川町１～７丁目がその範囲となっており、さらに西の大阪市域・北の東大阪市域に広がっている。地理的には旧大和川の主流である長瀬川の左岸にあたり、同地形上で南側に跡部遺跡・亀井遺跡・太子堂遺跡が存在する。なお西側の大阪市域では加美遺跡として調査が実施されているが、両遺跡は同一の遺跡として捉えられている。

当遺跡発見の契機は、昭和10年に八尾市久宝寺５丁目で行われた道路工事の際に、弥生土器・土師器・丸木船の残片が出土したことによる。昭和48年度には、大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センターによる近畿自動車道天理～吹田線関連の総延長13.5kmに及ぶ発掘調査が開始され、このほぼ中位に位置する久宝寺遺跡は、北地区・南地区に分割され、昭和55年度から昭和61年度にわたって調査が実施された。また・東大阪市文化財協会・八尾市教育委員会・当調査研究会においても多次にわたる発掘調査が実施されている。これらの調査成果から、当遺跡は縄文時代晩期～近世にわたる遺跡であることが確認されている。

このような情勢下の平成４年、八尾市神武町190-1における店舗付き共同住宅建築工事の届出書が、八尾市教育委員会文化財課に提出された。これを受けた同文化財課では、当該地が周知の遺跡範囲内にあたることから、平成４年２月17日に遺構確認調査を実施した。[註1] その結果、古墳時代前期の遺構・遺物包含層が確認され、同文化財課では発掘調査が必要であると判断し、事業者にその旨を通知した。そして、発掘調査を実施することが両者で合意され、調査にあたっては、事業者・文化財課・当調査研究会の三者協定により、当調査研究会が主体となって実施することとなった。



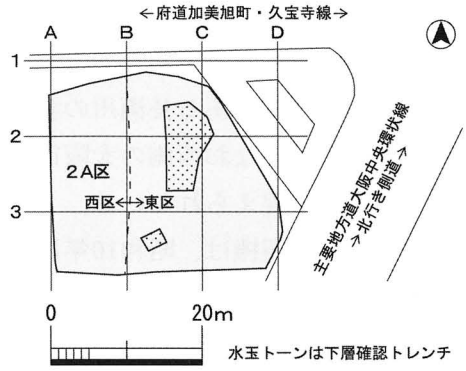
第１図　調査地位置図

第２章　調査概要

第１節　調査方法

今回の調査は店舗付共同住宅建設に伴う調査で、当調査研究会が久宝寺遺跡内で実施した第14次調査（ＫＨ93－14）にあたる。

調査区平面形は西辺・南辺がほぼ直角を成す台形に近い不整形を呈している。



第２図　地区割り図

調査に当たっては、掘削排土処理の都合上、調査区を東西に二分割し、西区から調査を行い、埋め戻し後に東区の調査を実施した。なお調査地は大阪市と八尾市に跨っており、概ね西区が大阪市域、東区が八尾市域となる。また調査区の西・北・東辺には簡易矢板による土留めが施されたため、周囲に幅約50㎝の畦を残しての調査となった。

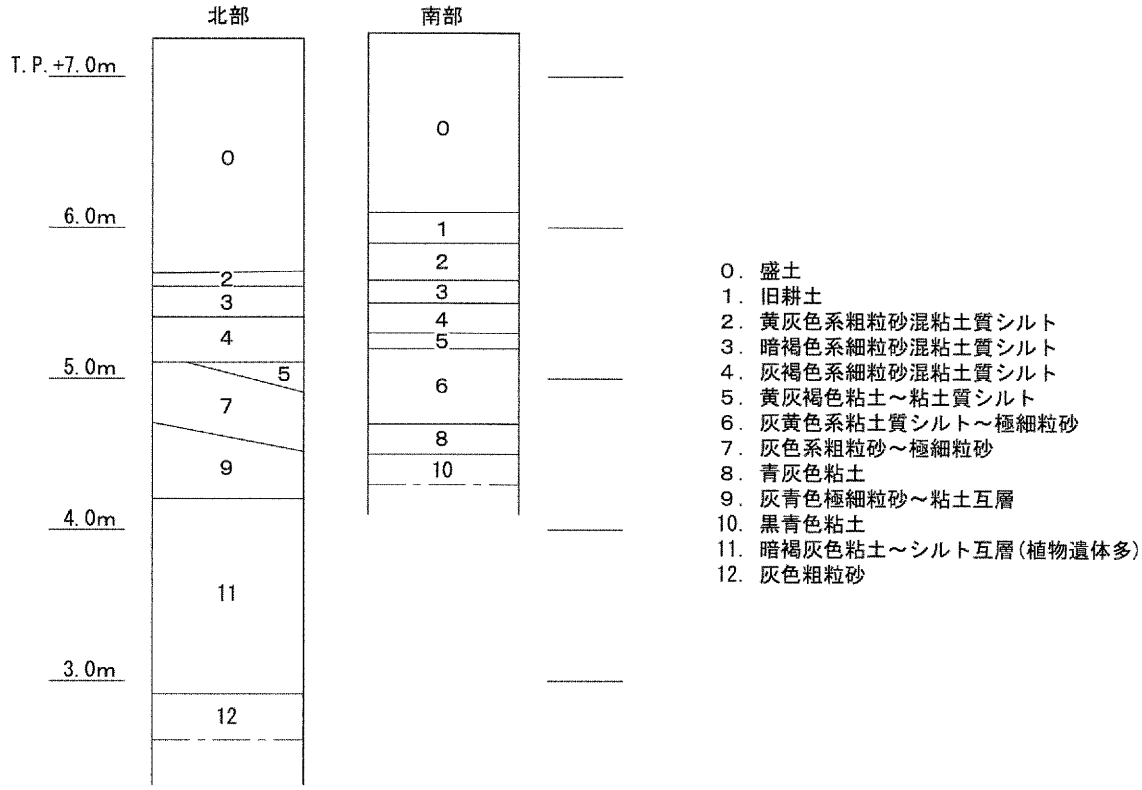
調査は、西区では地表下約1.6ｍまで、東区では約1.7ｍまでを機械掘削とし、以下の約0.5～0.6ｍを対象として人力掘削により実施した。また、下層確認調査として東区の北部・南部に２か所のトレンチを設定し、機械・人力掘削併用により平面・断面の観察を行った。

地区割については、調査区平面形に合わせて10ｍ方眼を任意に設定した。そして南北ラインにアルファベット（西からＡ～Ｄ）、東西ラインに数字（１～３）を冠し、10ｍ四方の地区名は北西交点のポイント（１Ａ～３Ｃ）に代表させた。なお現地における平板平面図と1/2500地形図との合成によると、この南北ラインは座標北から西に約0.5度振っている。

調査で使用した標高値の基準は、調査地の南西約550ｍに所在する大阪市立加美南部小学校内の水準点（T.P.+7.08ｍ）より移動した。

第２節　基本層序

調査地の現地表面はT.P.+7.2～7.3ｍを測る。第０層は盛土で、層厚1.2～1.5ｍ。第１層は旧耕土で、北部では見られなかった。第２層の粘土質シルトは、北部ほど砂質優勢となり細粒砂層となっている。第３層は古墳時代初頭～前期の土器を多量に含む包含層で、層厚10～20㎝を測る。第４層も同様の遺物包含層で、層厚20～30㎝を測り、西部ほど砂粒の含有が少なくなっている。中央部～南部では上面に部分的に薄く灰褐色細粒砂の堆積が見られた。第３層上面が第１面、第４層上面が第２面である。第５層は南部を中心に確認された。第６層は、南部ほど層厚が厚く、北部では第７層の砂層が隆起しているため見られない。第７層は北部から北東部でのみ見られた流水層と考えられる砂層である。第５～７層の上面が第３面である。第８～10層は一連の土層と考えられ、西部では粘土、東部では粘土質シルト～極細粒砂となっている。下層確認調査では第９層上面・第11層上面で精査を行ったが、遺構は検出されず、また第５層以下からは遺物は出土しなかった。



第３図　基本層序

第３節　検出遺構と出土遺物

調査では第１～３面の３面を確認した。

〈第１面(T.P.+5.6～5.7m)〉

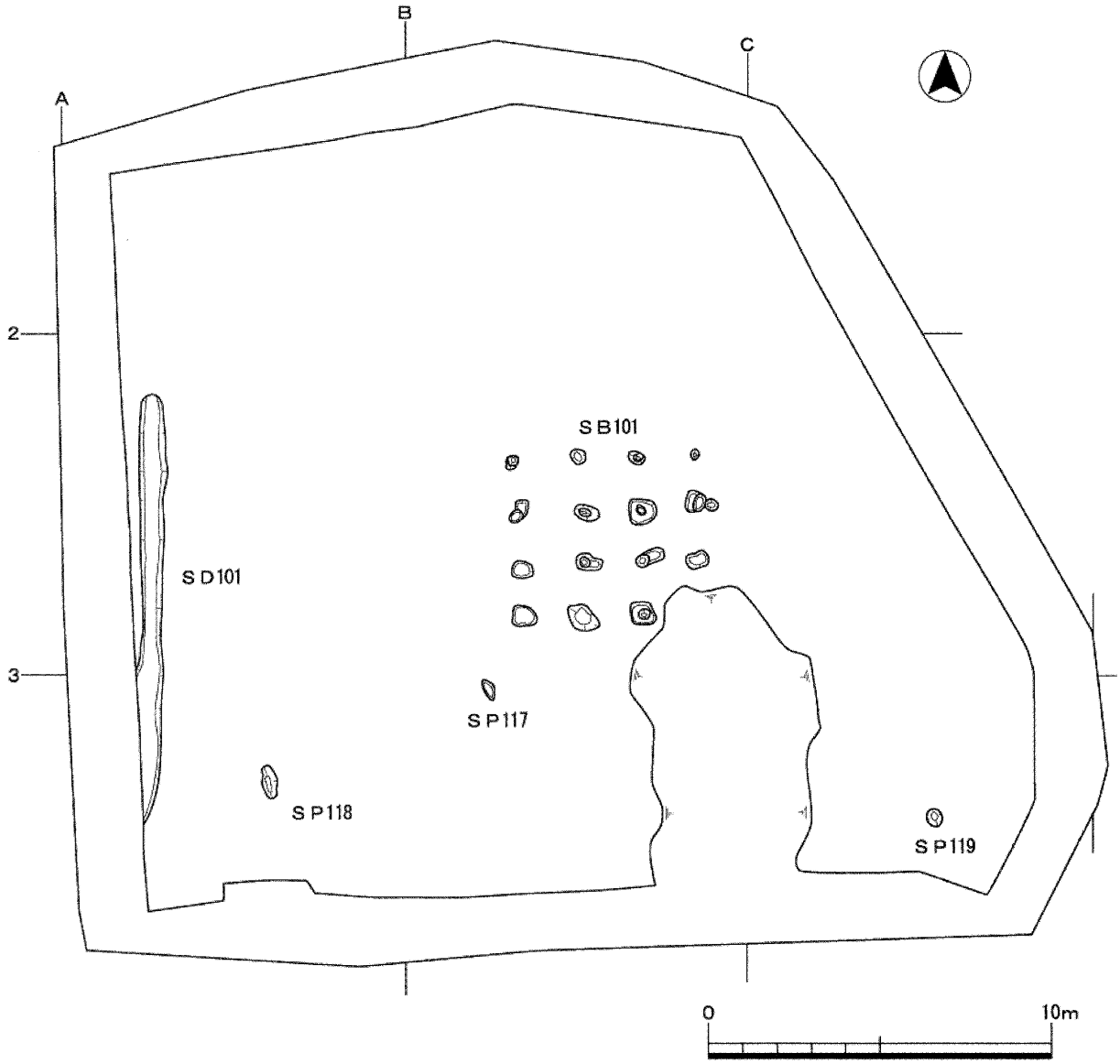
古墳時代前期までの遺物包含層である第４層上面で、掘立柱建物１棟(ＳＢ101)、溝１条(ＳＤ101)、ピット３個(ＳＰ117～119)を検出した。ＳＤ101から飛鳥～奈良時代に比定される須恵器片が出土しており、これを第１面の遺構の時期として捉えておきたい。

ＳＢ101

調査区中央の２Ｂ区で検出した総柱の掘立柱建物で、ＳＰ101～116で構成され、南東角の柱穴は攪乱により削平されている。検出面のレベルはT.P.+5.6～5.7mを測り、規模は南北３間(約4.7m：柱間約1.6m)×東西３間(約5.3m：柱間約1.8m)で、主軸は西－約2.0°－北である。柱穴は平面が隅丸方形を成すもの(ＳＰ107・115)もあるが、不定形が多い。規模は直径30～80cmを測り、深さは内部のＳＰ106・107・110・111が30～45cmと深くなっており、外周のものは５～33cmと浅い。なおいずれにも柱根は遺存していない。遺物はＳＰ103・108・110・112・115から庄内式・布留式土器の細片が出土している。

ＳＤ101

調査区西部２～３Ａ区で検出した南北方向に直線的に伸びる溝で、検出長12.5m・幅50～80cm・深さ約10cmを測る。断面皿状を成し、埋土は灰黄色細粒砂混粘土質シルトの単層である。遺物は飛鳥～奈良時代に比定される須恵器片が出土している。他に鉄錆の塊が１点出土しているが詳細は不明である。



第４図　第１面平面図

ＳＰ117～119

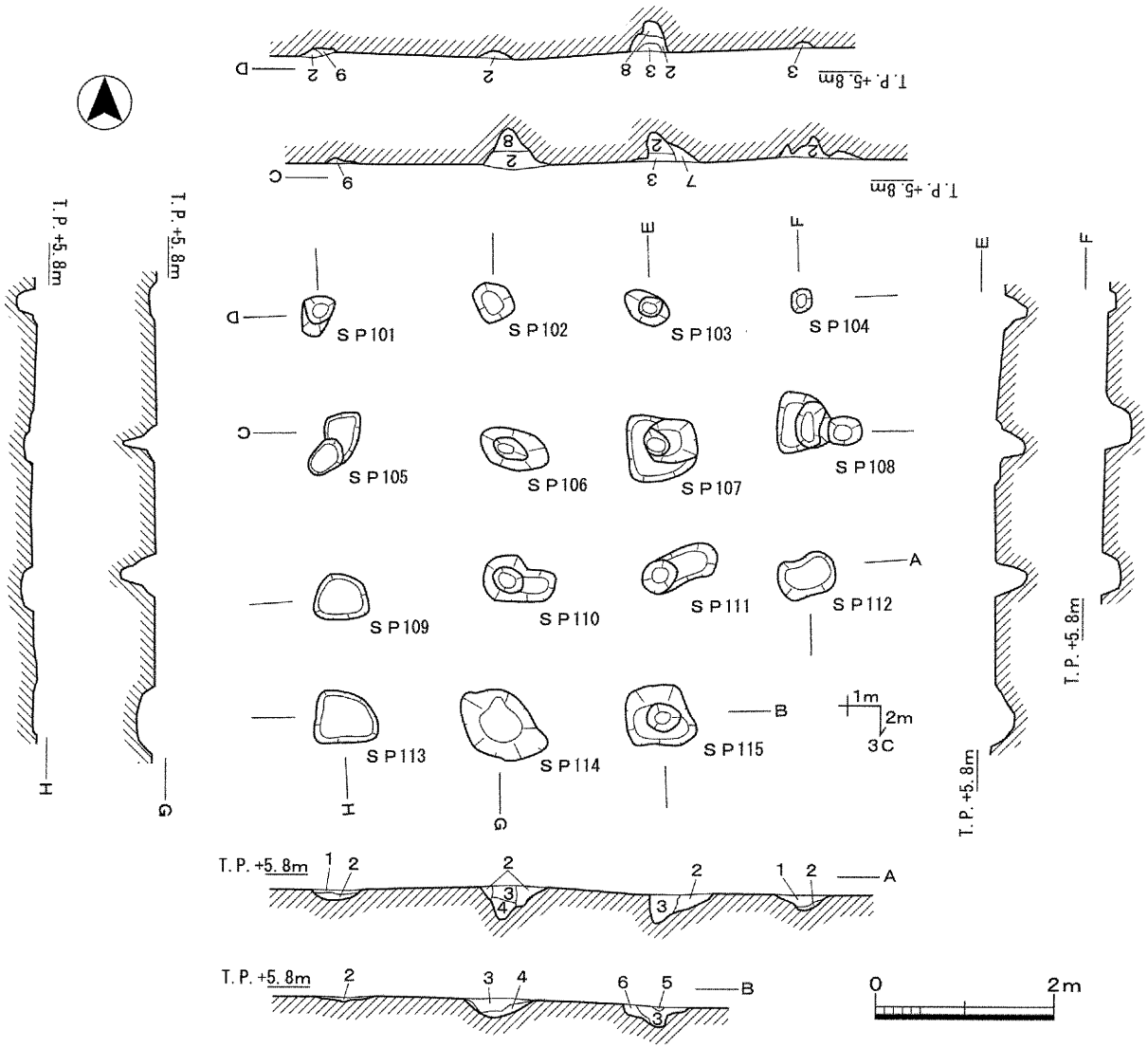
ＳＰ117・118は３Ａ・Ｂ区で検出したもので、深さ５㎝程度を測る。埋土はＳＤ101と同じであり、同様の溝の残欠と思われる。遺物は出土していない。ＳＰ119は３Ｃ区に位置し、平面形は直径約20㎝の円形を成す。深さ約30㎝を測り、埋土は黄灰褐色細粒砂混粘土質シルトである。ＳＢ101と同様の建物関連のピットと考えられる。布留式土器の細片が出土している。

〈第２面(T.P.+5.4～5.5m)〉

第５層上面で、竪穴住居１棟(ＳＩ201)、井戸２基(ＳＥ201・202)、土坑８基(ＳＫ201～208)、溝２条(ＳＤ201・202)、ピット５個(ＳＰ201～205)を検出した。これらの遺構の時期は出土遺物から布留式期前半と考えられる。

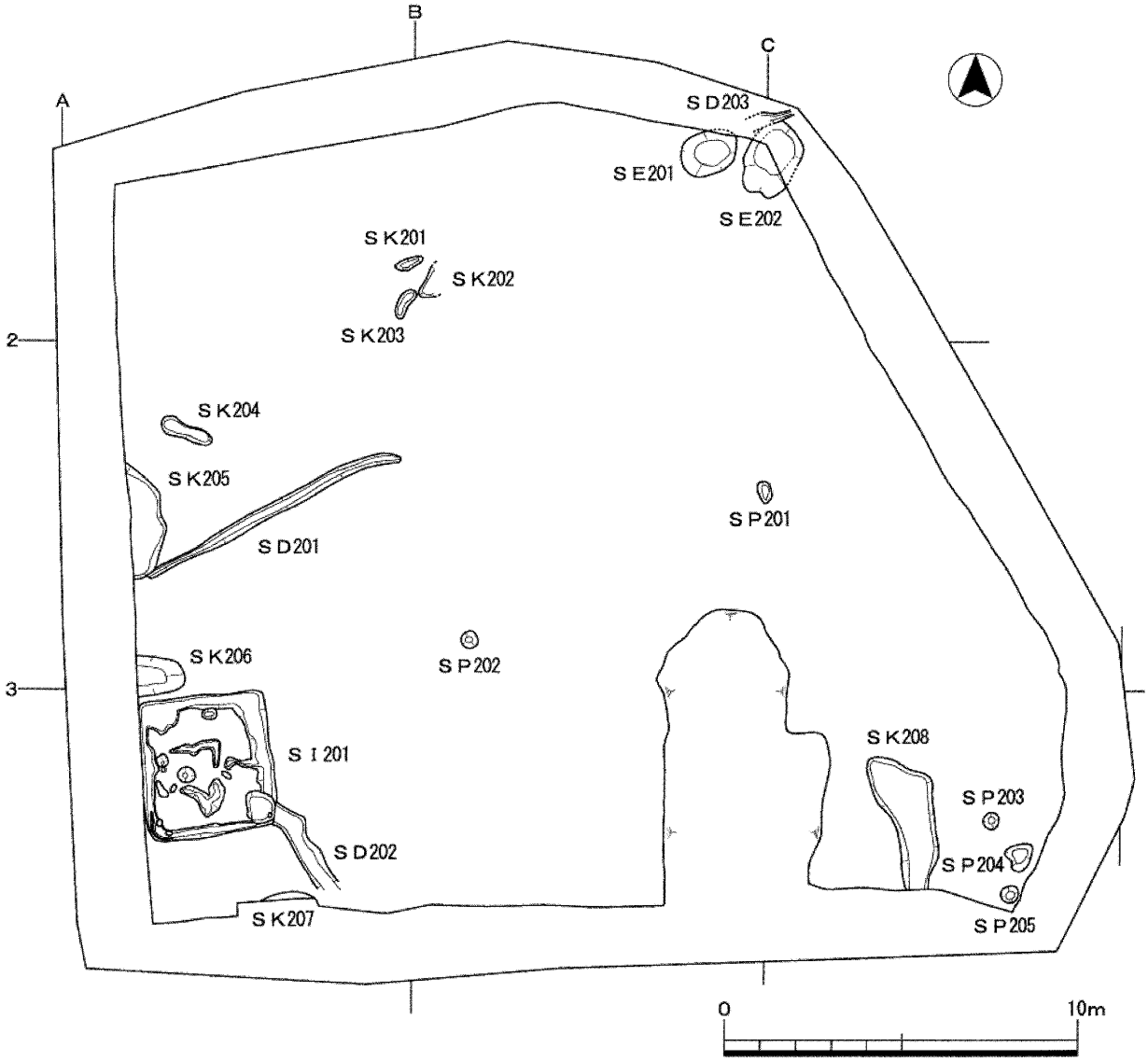
ＳＩ201

調査区南西部の３Ａ区で検出した竪穴住居である。平面形は方形を成し、主軸は西－約6.5°－



第５図　ＳＢ101平断面図

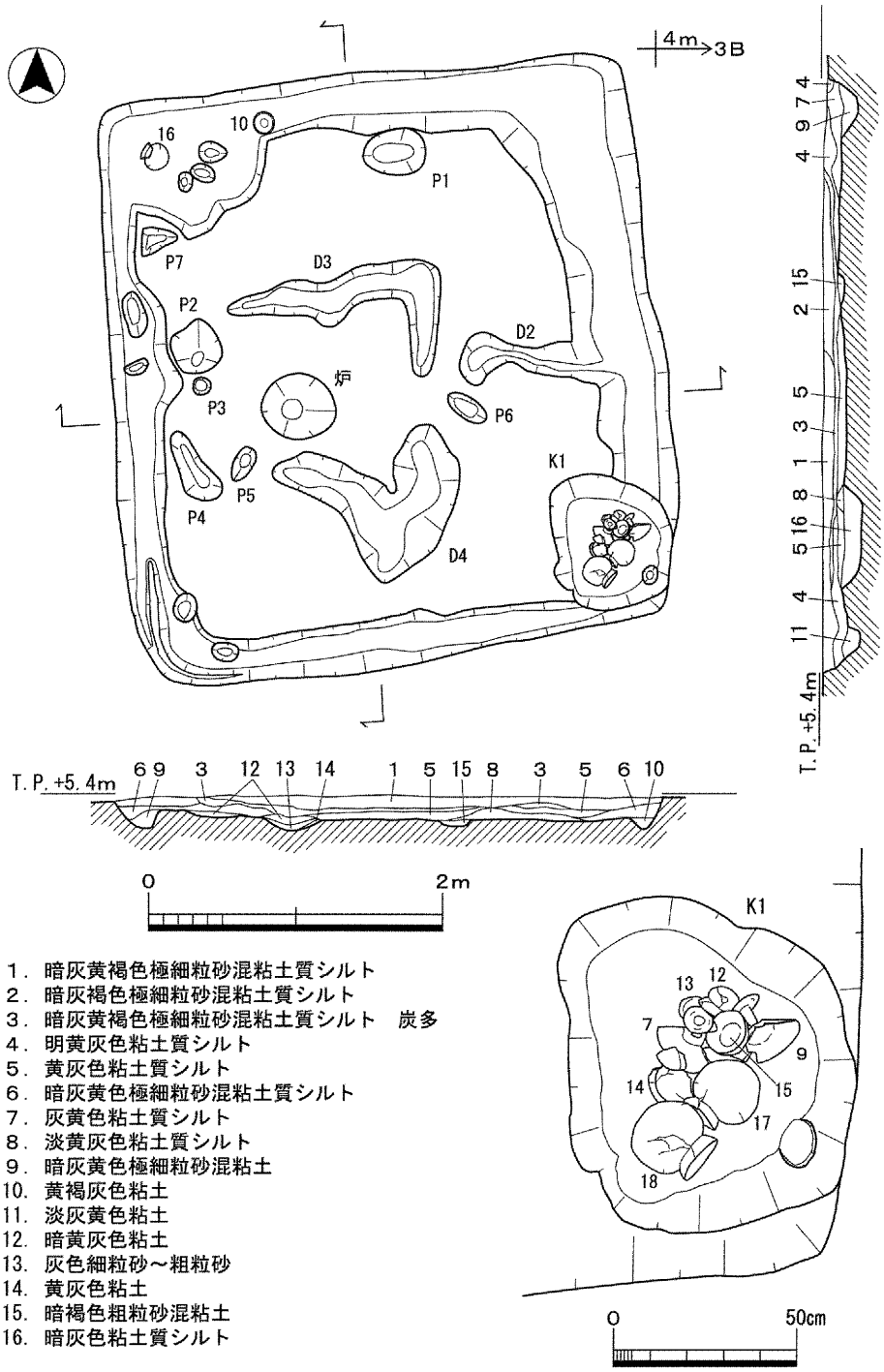
北である。規模は南北約4.0m・東西約3.7mを測る。検出面のレベルは約T.P.+5.35m、床面のレベルは約T.P.+5.25mを測る。床面では壁溝の他、炉、土坑１基(K1)、ピット７個(P1～7)、溝３条(D2～4)を検出した。なお一般的な四本柱の竪穴住居にみられるような主柱穴は認められず、上屋構造は不明である。炉は中央やや西に位置する平面円形の土坑である。規模は50×45cm・深さ10cmで断面皿状を呈し、底部には全面に煤が付着する。また炉の周囲から南東角のK1にかけての床面には砂が敷きつめられた状況が見られ、この砂はD3やP3～6の埋土に及んでいる。壁溝は全周しており、幅25～40cm・深さ５～10cmを測る。西壁溝内底部の数箇所には小さな窪みが見られた。D2は東壁溝中央から内側に伸びる溝で、深さ約10cmを測り、断面逆台形で埋土は暗灰色粘土質シルトである。D3・4はＬ字型を成し、炉を囲む状況である。埋土はD3が暗褐色粗粒砂混粘土、D4



第６図　第２面平面図

が暗灰色粘土質シルトである。ピットはP2～5については位置関係から見てD3・4と同様、炉に付随する遺構と捉えられる。埋土はP2・7が暗褐色粘土質シルト、他はD3と同じく暗褐色粗粒砂混粘土である。K1は南東角の壁溝と重複し、規模は80×90cm・深さ約25cmを測る。埋土は淡灰色粘土質シルトである。底部からは完形の土器９点(甕２・高杯２・小形丸底壺３・小形鉢２)がまとまって出土しており、埋納されたものと思われる。

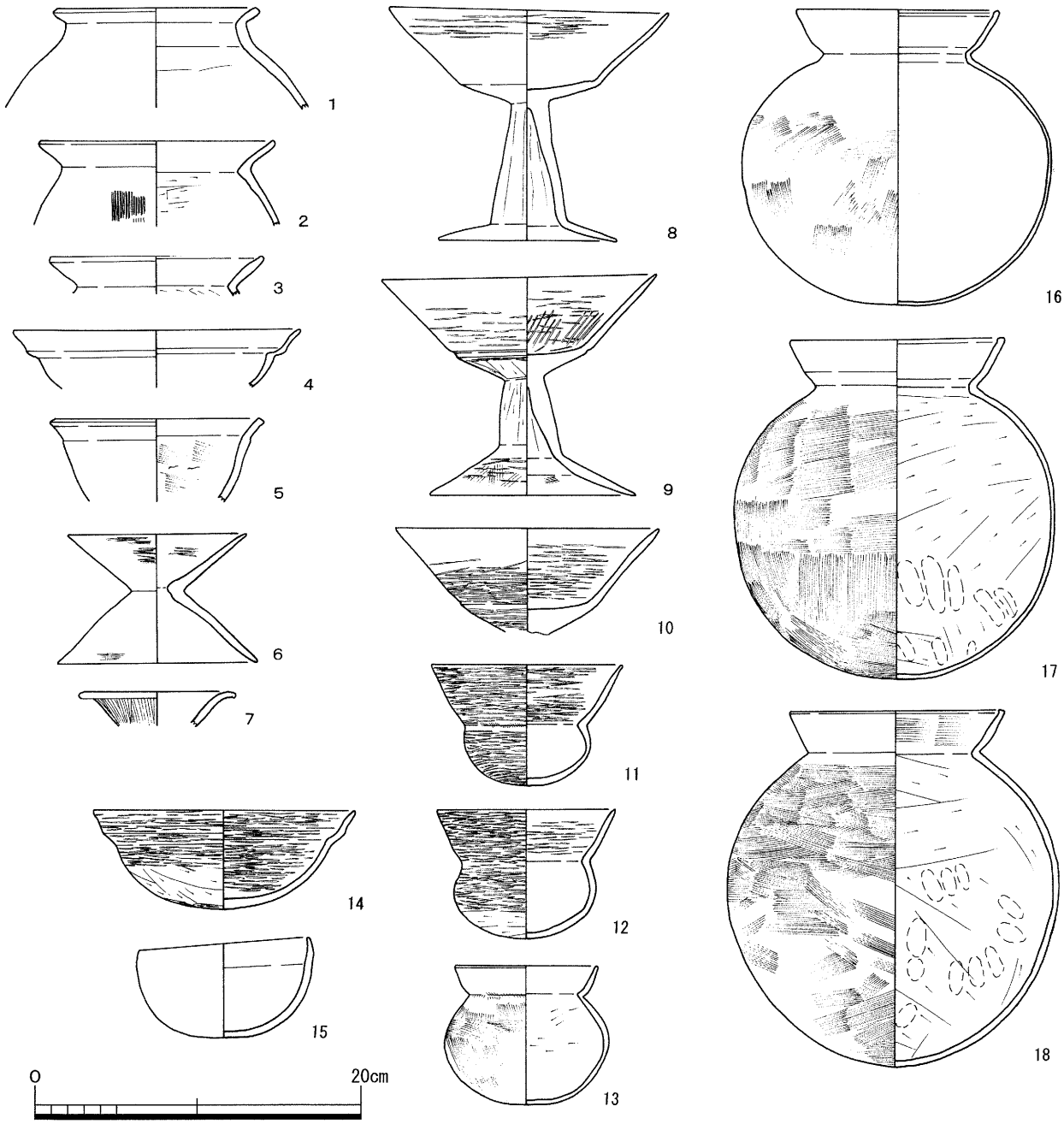
遺物は１～18を図化した。１～７は住居埋土、８・９・11～15・17・18はK1、10・16は北西部壁溝内の出土である。１～３は甕である。１は形態に四国系の特徴を持つ。２・３は庄内式甕である。２は肩部のタタキがほぼ垂直方向に施される。４は精製の有段口縁鉢、５は口縁部が外反する鉢である。６は鼓型器台で、口径10.8cm・底径12.0cm・器高7.8cmを測る。口縁部内外面、及び脚部外面は横位のヘラミガキである。７は器種不明の口縁部で、外面縦位のヘラミガキを施す。小形器台か。８～10は有稜高杯で、９は稜部に沈線が生じている。調整はヘラミガキを多用し、



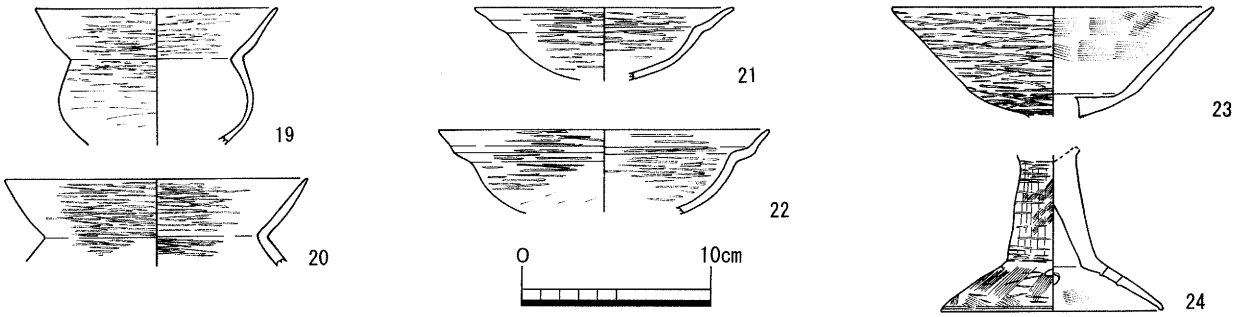
1．暗灰黄褐色極細粒砂混粘土質シルト
2．暗灰褐色極細粒砂混粘土質シルト
3．暗灰黄褐色極細粒砂混粘土質シルト　炭多
4．明黄灰色粘土質シルト
5．黄灰色粘土質シルト
6．暗灰黄色極細粒砂混粘土質シルト
7．灰黄色粘土質シルト
8．淡黄灰色粘土質シルト
9．暗灰黄色極細粒砂混粘土
10．黄褐灰色粘土
11．淡灰黄色粘土
12．暗黄灰色粘土
13．灰色細粒砂～粗粒砂
14．黄灰色粘土
15．暗褐色粗粒砂混粘土
16．暗灰色粘土質シルト

第７図　ＳＩ201平断面図

９は杯底部～脚部の外面がヘラケズリで、裾部にはハケが見られる。口径・器高・底径は８が16.8・13.9・10.7cm、９が16.5・13.2・12.3cmを測る。11～13は精製の小形丸底壺である。11・12はヘラミガキを多用し、12の底部外面はヘラケズリである。13は口縁部ヨコナデ、底体部外面ハケ、内面ヘラケズリである。口径・器高・体部最大径は11が11.5・7.3・7.7cm、12が10.7・7.8・8.6cm、13が8.6・8.3・9.9cmである。14はヘラミガキを多用する精製の有段鉢で、底部外面はヘラケズリである。口径15.7cm・器高6.0cmを測る。15は手捏ね成形による小型鉢で、調整は口縁部ヨコナデ、底体部ナデ。口径10.3cm・器高5.6cmを測る。16～18は球形の体部を成す布留式甕である。



第８図　ＳＩ201出土遺物

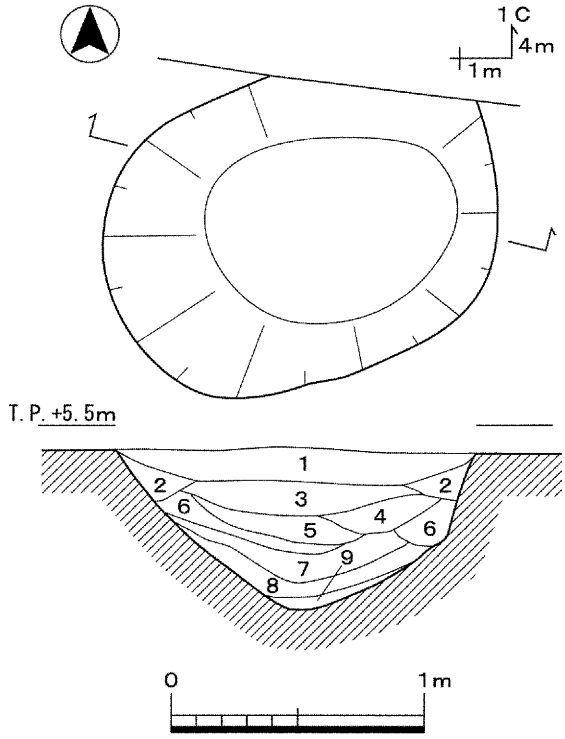


第９図　ＳＥ201出土遺物

口縁端部の内側への肥厚は、16・17が丸みをもち、18は尖り気味で端面に沈線が生じる。調整はいずれも口縁部ヨコナデ、底体部外面ハケ、内面ヘラケズリで、18は口縁部内面にヨコハケが見られる。口径・器高・体部最大径は16が12.2・17.8・18.6cm、17が13.0・20.5・19.2cm、18が13.0・21.5・19.9cmである。これらの土器は布留式古相に位置付けられる。

ＳＥ201

１Ｂ区に位置し、北部は側溝掘削により削平したが、平面形は南北約1.2m×東西約1.6mの楕円形を呈すると思われる。断面逆台形を呈し、深さは約0.7mを測る。埋土は粘土質シルト～シルト質粘土主体の９層から成り、中層以下に炭・灰が認められる。遺物は布留式期古相の土器が出土しており、６点(19～24)を図化した。いずれもヘラミガキを多用する精製の器種である。19・20は壺で、口径は12.0・14.8cmを測る。19は底部外面ヘラケズリである。21・22は有段鉢で、口径は12.8・16.4cmを測る。23・24は有稜高杯である。23は杯内面横位のハケ、24も外面ヘラミガキの前にハケを施す。



1．暗黄褐色細粒砂混粘土質シルト
2．黄褐色極細粒砂混粘土質シルト
3．灰色細粒砂混粘土質シルト
4．暗灰色細粒砂混シルト質粘土
5．灰黒色シルト質粘土　炭
6．灰黄色細粒砂混シルト質粘土
7．黒灰黄色シルト質粘土　炭　灰
8．暗褐色シルト質粘土～極細粒砂
9．明褐色シルト質粘土

第10図　ＳＥ201平断面図

ＳＥ202

ＳＥ201の東側に隣接している。中央部は側溝掘削により削平したが、平面形は南北約2.2m×東西約1.5mの歪な楕円形を呈する。断面逆台形を成し、深さ約0.5mを測る。埋土はブロック状の４層から成り炭を含む。遺物は布留式期古相の土器が出土しており、25～35を図化した。25は小型丸底壺で、調整はハケの後、口縁部内面に斜放射状にヘラミガキを加える。26は粗製で薄手の壺で、製塩土器の可能性がある。胎土中にクサリ礫を多量に含み、色調は淡灰褐色。27～29は有段口縁鉢である。調整は27がヘラミガキ、28・29はヨコナデである。30・31は有稜高杯である。30は口縁部外面縦方向に、31は内外面下位に乱方向にヘラミガキを施す。32は四国系の特徴を備えた甕である。33～35は布留式甕である。口縁端部は33が内側に小さく巻き込み、34・35は内側に肥厚し内傾する端面を成す。34は肩部外面に３個の刺突文を施す。

なお26・29・34は西側のＳＥ201からも破片が出土している。このことから両遺構は同時期頃に埋まったものと思われる。

ＳＫ201～204

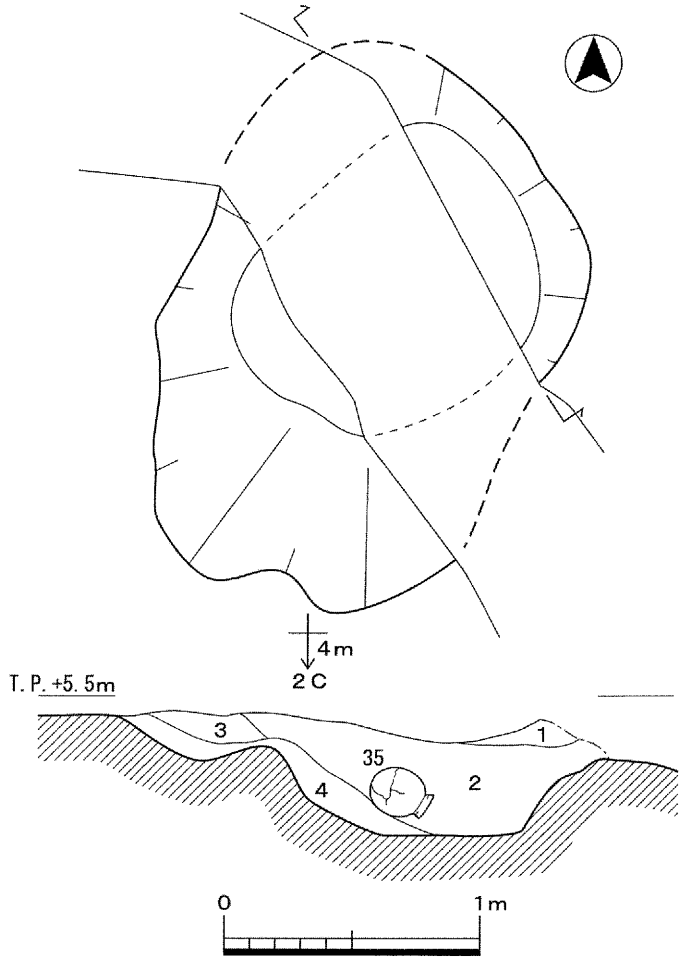
調査区北西部で検出した土坑群である。平面形は不定形～溝状を成し、埋土は黄灰褐色粘土質シルトである。ＳＫ201・202・204は、平面形から見て溝の残欠である可能性が高い。遺物は出土していない。

ＳＫ205

２Ａ区で東部を検出した土坑で、西は調査区外に至るため詳細は不明であるが、調査区西壁にわずかに及ぶ程度の規模である。検出部分の規模は南北約3.4ｍ・東西約1.0ｍ・深さ約10cmを測る。断面皿状を呈し、埋土は灰褐色粘土質シルトである。遺物は出土していない。

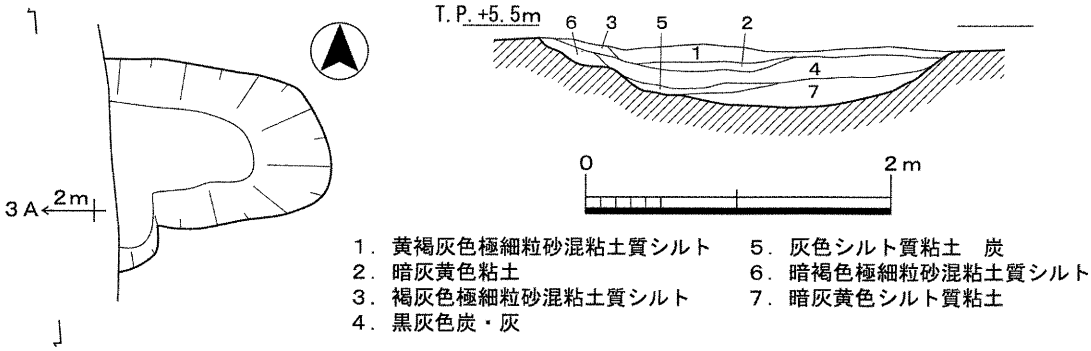
ＳＫ206

２・３Ａ区、ＳＩ201北側に隣接して検出した土坑で、西は調査区外に至るため詳細は不明である。検出部分の規模は東西約1.5ｍ・南北約1.4ｍ・深さ約20cmを測るが、西部では規模を増しており、西壁では南北約2.7ｍ・深さ約45cmが確認できる。断面椀形を呈し、埋土は粘土質シルト～シルト質粘土から成る７層が底面に沿って堆積している。中位には炭・灰を多量に含んでいる。遺物は布留式期古相までの土器が出土しており、36～46を図化した。36・37・41は布留式傾向甕とした。36は頸部内面が尖り、37は肩部にタタキを施す。41は口径17.1cm・器高21.9cm・体部最大径21.6cmを測る。ハケ調整、球形の底体部、底部内面の指頭圧痕といった布留式甕の属性が顕著に見られるが、口縁端部の摘み上げや、内面ヘラケズリが頸部内面に及ぶといった庄内式甕の特徴を残している。生駒西麓産の胎土である。38～40は布留式甕である。42は形態的に四国産の可能性がある。43は鉢、44は有段口縁鉢で、共に精良な胎土である。45は大形の有段口縁鉢で、口径18.2cm・器高8.2cm以上を測る。全面横位のヘラミガキで、底部外面中央にはヘラケズリが見られる。46は鼓型器台である。



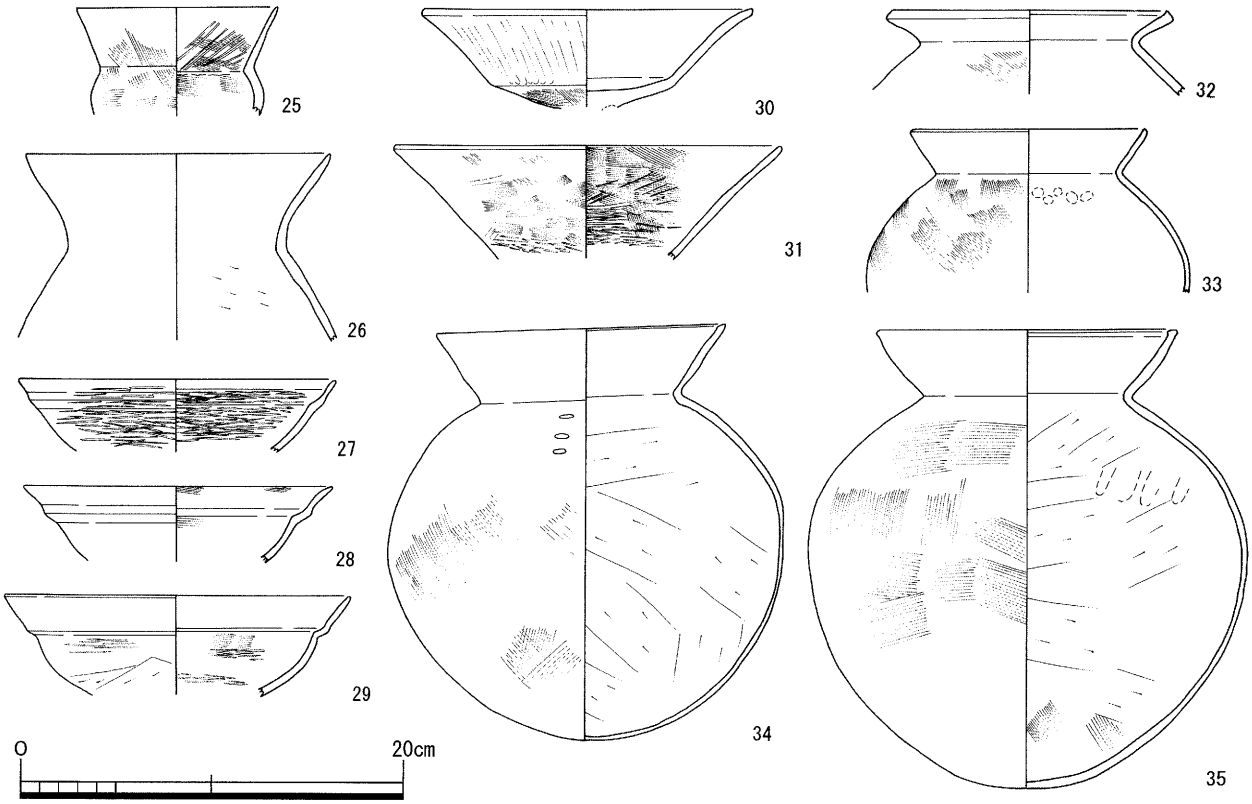
１．暗褐灰色細粒砂混粘土質シルト
２．暗灰褐色細粒砂混粘土質シルト　炭
３．暗褐灰色粗粒砂混粘土質シルト
４．暗灰色細粒砂混粘土質シルト　炭

第11図　ＳＥ202平断面図

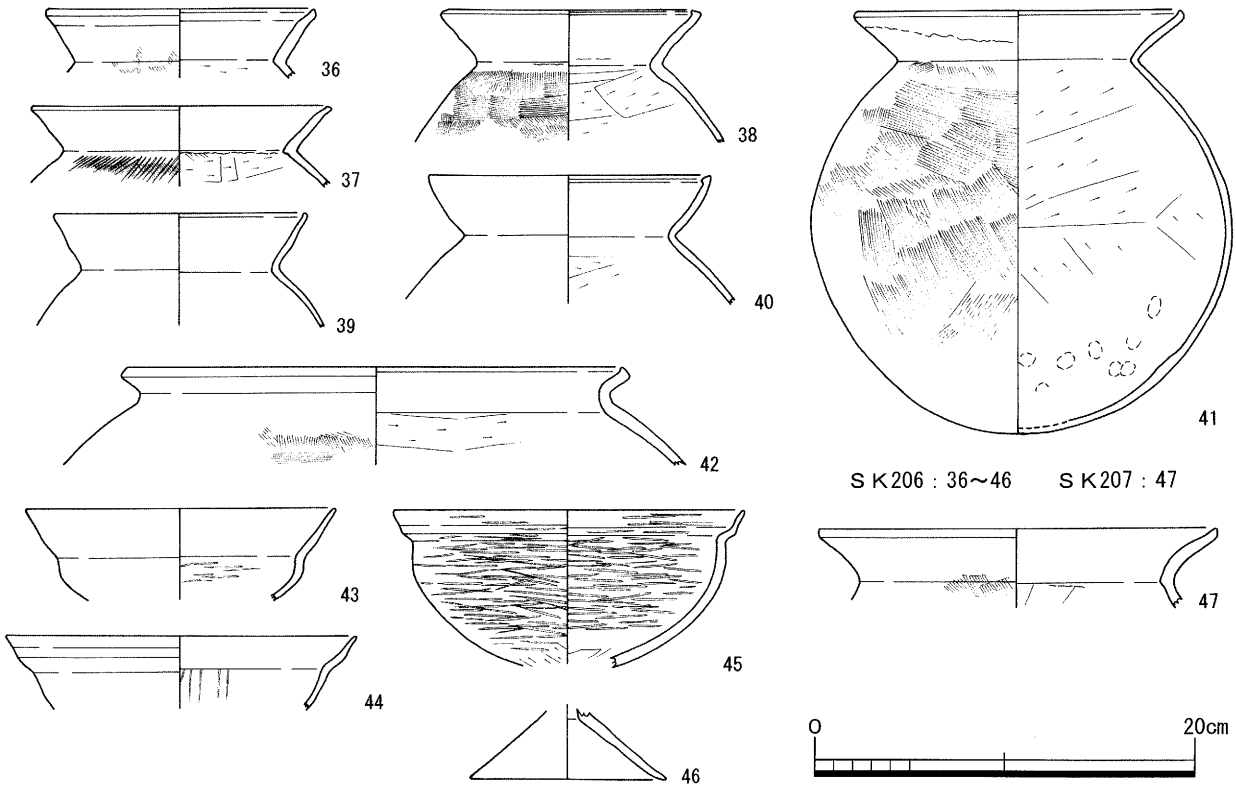


１．黄褐灰色極細粒砂混粘土質シルト
２．暗灰黄色粘土
３．褐灰色極細粒砂混粘土質シルト
４．黒灰色炭・灰
５．灰色シルト質粘土　炭
６．暗褐色極細粒砂混粘土質シルト
７．暗灰黄色シルト質粘土

第12図　ＳＫ206平断面図



第13図　ＳＥ202出土遺物



第14図　ＳＫ206・207出土遺物

ＳＫ207

３Ａ区で弧状を成す掘方の北部のみを検出したもので、南は調査区外に至る。検出部分の規模は東西約1.6m・南北約0.3mを測る。深さは南壁で約50cmを測り、断面逆台形を呈する。埋土は粘土質シルトを基調とし、底面に沿って８層が堆積する。下部には炭を多く含む。遺物は布留式期古相までの土器が出土しているが、図化しえたのは土師器甕(47)のみである。体部外面は最上位にハケ調整が確認できるが、器壁が厚く、Ｖ様式系甕の可能性がある。

ＳＫ208

３Ｃ区で検出した南北に長い土坑で、南は調査区外に至る。規模は南北約4.0m・東西0.7～1.7m・深さ約10cmを測る。断面皿状を呈し、埋土は暗灰褐色粘土質シルトの単層である。時期不明の土師器片が出土しているが、図化しえるものはなかった。

ＳＤ201

２Ａ区で検出した北東－南西方向に直線的に延びる溝で、北端で東にややカーブする。検出長約7.9m・幅約35cm・深さ約5.0cmを測る。断面皿状で、埋土は黄灰褐色粘土質シルトの単層である。遺物は出土していない。

ＳＤ202

３Ａ区に位置する北西－南東方向の溝で、ＳＩ201の南東角に取り付く状況であり、何らかの関連が考えられる。規模は検出長約3.0m・幅約0.6m・深さ約10cmを測る。断面皿状を成し、埋土は暗灰褐色粘土質シルトの単層である。弥生時代後期～古墳時代前期に比定される土器が出土しているが、図化しえるものはなかった。

ＳＰ201

２Ｂ・Ｃ区に位置し、平面形は南北65cm・東西38cmの楕円形を成す。深さ約５cmを測り、断面皿状で、埋土は暗褐灰色粘土質シルトの単層である。遺物は出土していない。

ＳＰ202

２Ｂ区に位置し、平面形は直径約50cmのほぼ円形を成す。深さ約24cmを測り、断面逆台形で、埋土は暗褐色細粒砂混粘土の単層である。遺物は出土していない。

ＳＰ203

３Ｃ区に位置し、平面形は南北55cm・東西45cmの楕円形を成す。深さ約10cmを測り、断面逆台形で、埋土は灰褐色粘土質シルト～シルト質粘土である。遺物は出土していない。

ＳＰ204

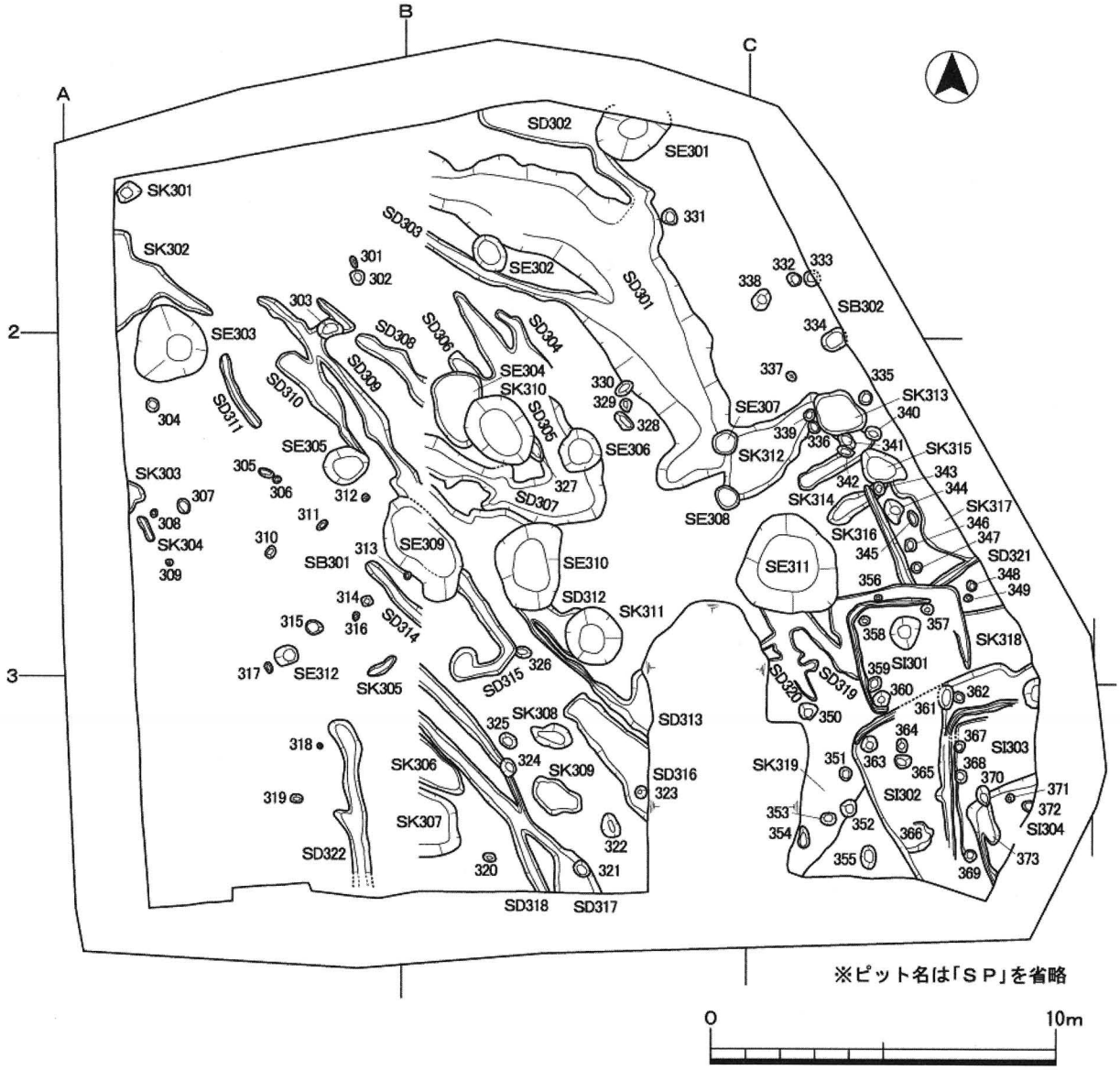
ＳＰ203の南側に位置し、平面形は南北80cm・東西80cmの不定形を成す。深さ約10cmを測り、断面逆台形で、埋土はＳＰ203と同じである。遺物は出土していない。

ＳＰ205

ＳＰ204の南側に位置し、平面形は直径約50cmのほぼ円形を成す。深さ約18cmを測り、断面逆台形で、埋土はＳＰ203と同じである。遺物は出土していない。

〈第３面(T.P.+5.1～5.3m)〉

竪穴住居４棟(ＳＩ301～304)、掘立柱建物２棟(ＳＢ301・302)、井戸12基(ＳＥ301～312)、土坑17基(ＳＫ301～308)、溝22条(ＳＤ301～322)、ピット73個(ＳＰ301～373)を検出した。これらの遺構の時期は出土遺物から古墳時代初頭後半～前期前半が中心と考えられ、わずかに弥生時代



第15図　第３面平面図

後期に遡るものもある。

ＳＩ301～304は２～３Ｃ区で検出した竪穴住居群で、さらに調査区南部・東部に広がる状況である。切り合っており全容の知れるものはなく、各々の先後関係も明確ではない。井戸は全て素掘り井戸としての検出で、直径1.5～3.0ｍを測るものと、直径0.7ｍ程度の小規模なものがある。後者は、掘方が垂直に近いもので、底部が湧水層に達していることから井戸とした。溝はほとんどが北西－南東方向のものである。なお、ＳＩ301北側で検出した直角に屈曲するＳＤ321についても竪穴住居の壁溝である可能性がある。

ＳＩ301

南東部が不明であるが、一辺3.8ｍ程度の平面方形を呈すると思われる。主軸は西－12°－北である。壁溝は幅20～35㎝・深さ５～10㎝を測る。炉は中央やや北に位置し、平面形は95×80㎝の円形に近い。断面逆台形を呈し、深さ約25㎝を測る。ピットは北壁溝外側で１個(ＳＰ356)、床面で４個(ＳＰ357～360)を検出した。いずれも壁溝に近接するもので、平面形は円形・楕円形を呈

し、平面規模・深さはＳＰ356－22×18・14cm、ＳＰ357－33×30・27cm、ＳＰ358－30×26・８cm、ＳＰ359－53×39・15cm、ＳＰ360－55×46・16cmである。遺物は床面、炉、ＳＰ359・360から出土しており、床面出土の48、炉出土の49～51を図化した。48はＶ様式系甕、49は庄内式甕である。50は有稜高杯で、口径15,2cmを測る。口縁部外面に縦位、内面に横位のハケを施す。51は粗製の小形壺で、全体に歪で器壁が厚い。全体に火を受けている。ほぼ完形で口径11.7cm・器高11.5cmを測る。これらの土器は庄内式期新相に比定されよう。

ＳＩ302

西部のみ検出した状況で、主軸は西－28°－北である。北辺の東部が屈曲しており、東辺が張り出すような平面形態での可能性がある。規模は東西5.9m以上を測る。壁溝は北辺西部と西辺南部で遺存しており、幅12～24cm・深さ５cm程度を測る。炉は北東角に位置し、規模は南北79cm・東西38cm以上・深さ約10cmを測る。断面椀形を呈し、埋土中には炭層が見られる。ピットは床面で６個(ＳＰ361～366)を検出した。平面形は円形・楕円形・不定形を呈し、平面規模・深さはＳＰ361－68×42・17cm、ＳＰ362－33×32・９cm、ＳＰ363－49×43・15cm、ＳＰ364－42×34・28cm、ＳＰ365－52×38・10cm、ＳＰ366－92×79・５cmである。遺物はＳＰ364・365から庄内式期～布留式期に比定される土器片が少量出土しているが、図化しえるものはなかった。

ＳＩ303

北西部のみを検出した状況で、主軸は西－５°－北、規模は南北4.3m以上を測る。壁溝は幅15～40cm・深さ５cm程度を測る。ピットは床面で４個(ＳＰ367～370)を検出した。平面形は円形・不定形を成し、平面規模・深さはＳＰ367－34×30・20cm、ＳＰ368－40×39・20cm、ＳＰ369－34×31・33cm、ＳＰ370－57×31・22cmである。ＳＰ367～379は西壁溝に近接して並んでいる。遺物はＳＰ367～369から庄内式期～布留式期に比定される土器片が少量出土しているが、図化しえるものはなかった。

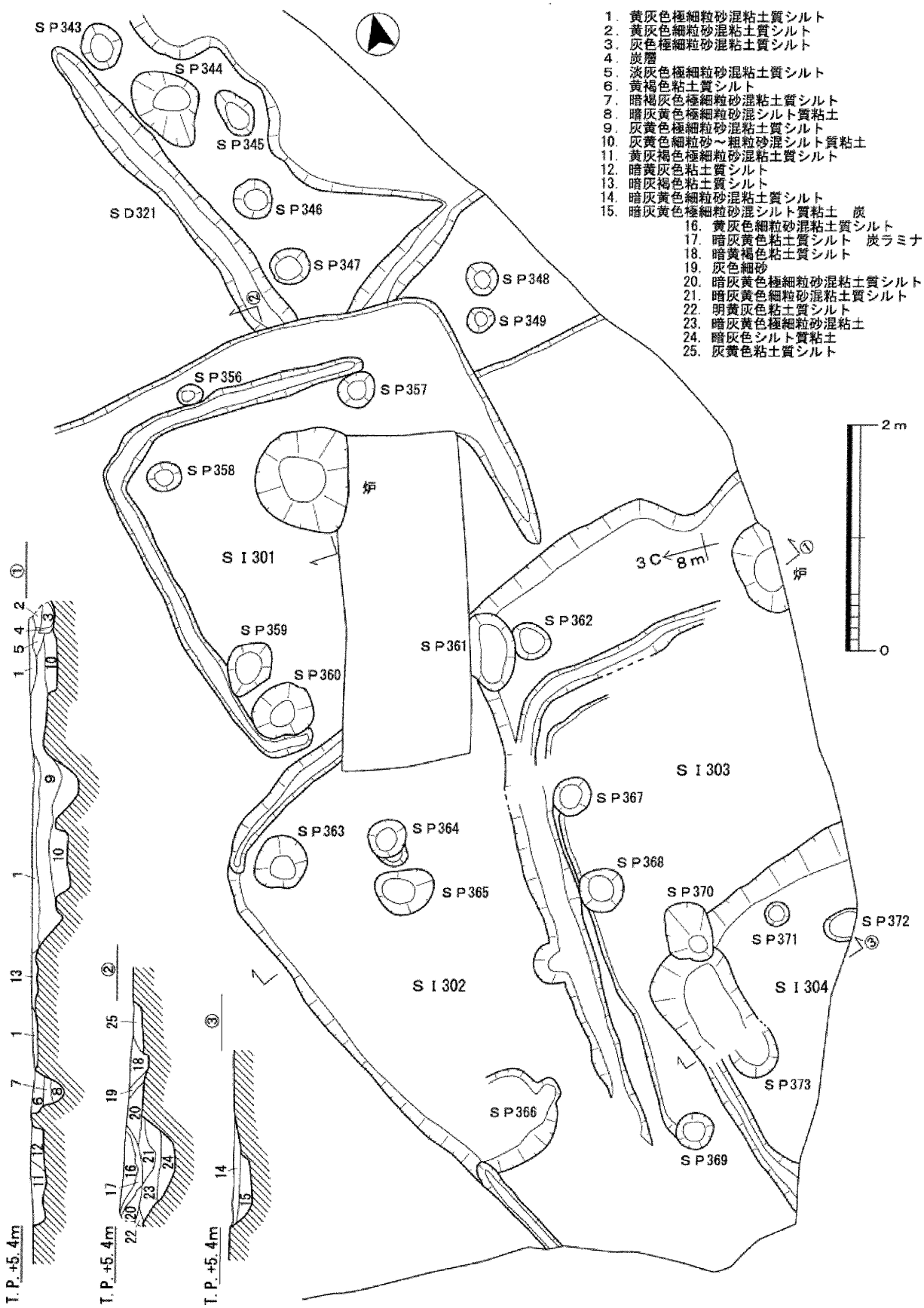
ＳＩ304

北西部のみの検出で、主軸は西－22°－北、規模は南北2.6m以上を測る。壁溝は西辺南部にのみ遺存しており、幅18～27cm・深さ５cm程度を測る。ピットは床面で３個(ＳＰ371～373)を検出した。平面形は円形・楕円形を成し、平面規模・深さはＳＰ371－21×21・13cm、ＳＰ372－35×28・48cm、ＳＰ373－43×32以上・17cmである。ＳＰ373には長さ68cm・直径約10cmの柱根が遺存している。遺物はＳＰ370から庄内式期に比定される土器片が少量出土しているが、図化しえるものはなかった。

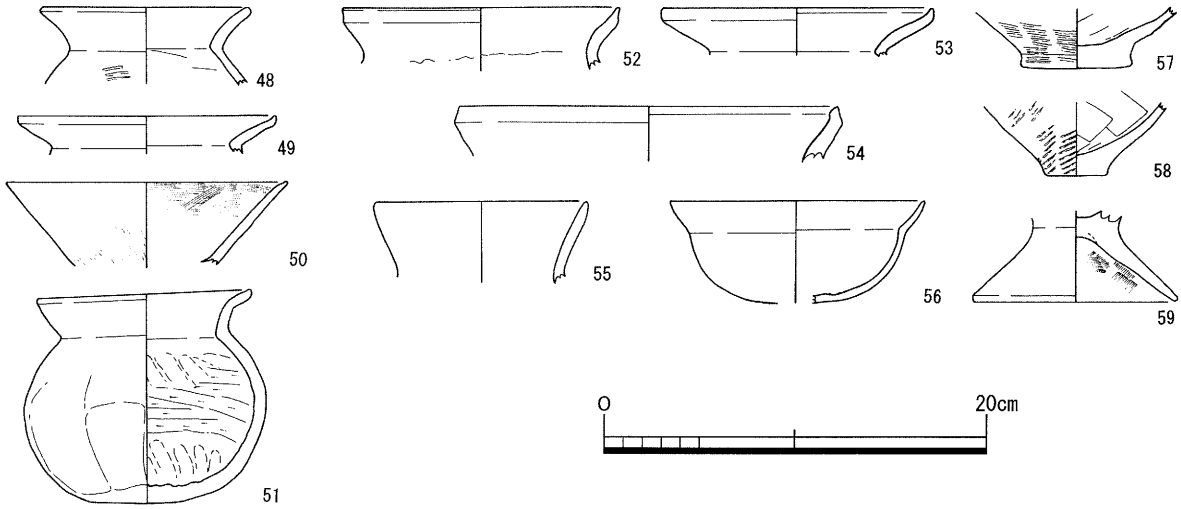
ＳＩ302～304検出時に出土した遺物については、明確に峻別できていないため一括して取り扱う。52～59を図化した。52はＶ様式系甕、53は庄内式甕である。54は口縁端部が内上方に短く屈曲するもので、壺と考えられる。55は広口短頸壺である。56は精製の小形鉢で、口径13.8cmを測る。調整は磨耗のため不明。57は壺底部と考えられ、外面にタタキを施す。58は甕あるいは鉢の底部で、外面はタタキをナデ消している。59は竪穴住居の可能性があるＳＤ321の内側から出土したもので、台付き甕の脚台部と思われる。淡灰色の胎土で搬入品の可能性が高く、東海地方が考えられる。これらの土器は布留式期古相までに比定されよう。

ＳＢ301

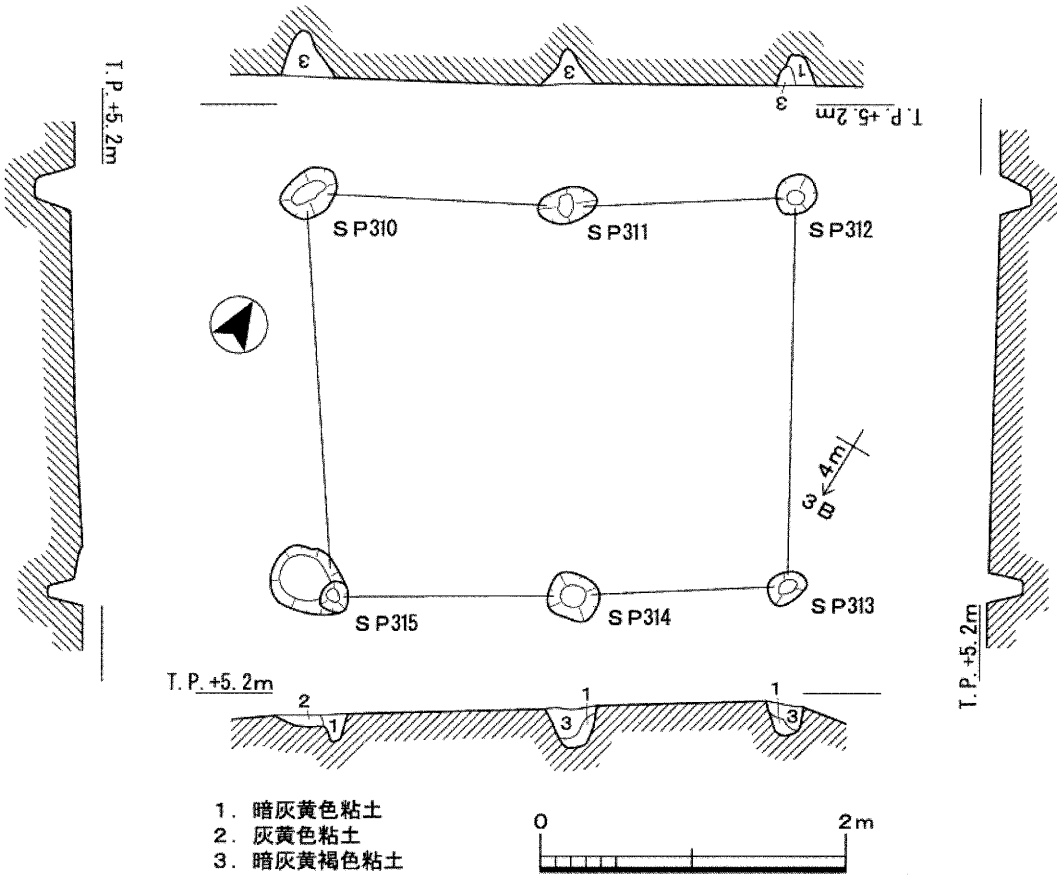
２Ａ～Ｂ区で検出した掘立柱建物で、ＳＰ310～315で構成される。主軸は西－30°－北で、規



第16図　ＳＩ301～304平断面図



第17図　ＳＩ301～304出土遺物

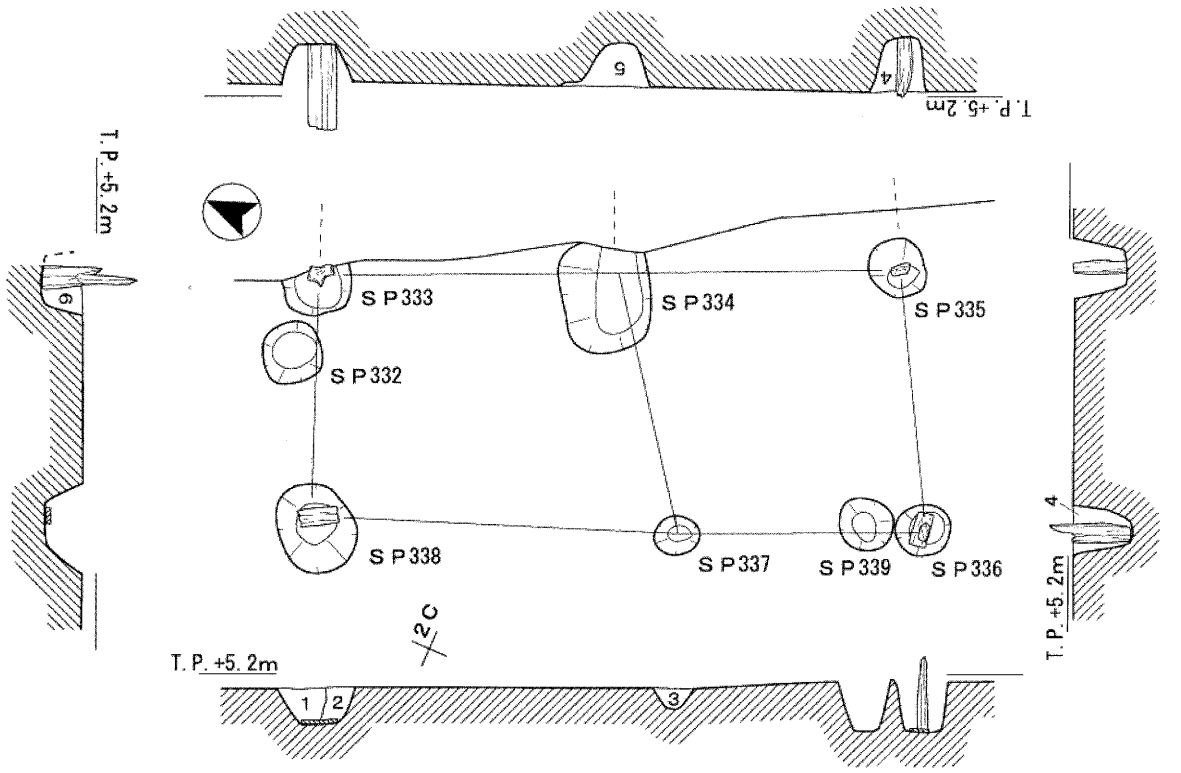


第18図　ＳＢ301平断面図

模は南北１間(2.6m)×東西２間(3.2m：柱間約1.6m)である。柱穴はＳＰ314が平面方形に近い他は、円形・楕円形を成し、径20～55cm・深さ18～30cmを測る。遺物はＳＰ310・311・313から布留式期の土器片が出土している。

ＳＢ302

１～２Ｃ区に位置し、ＳＰ333～338で構成される。主軸は西－26°－北で、規模は南北２間(約

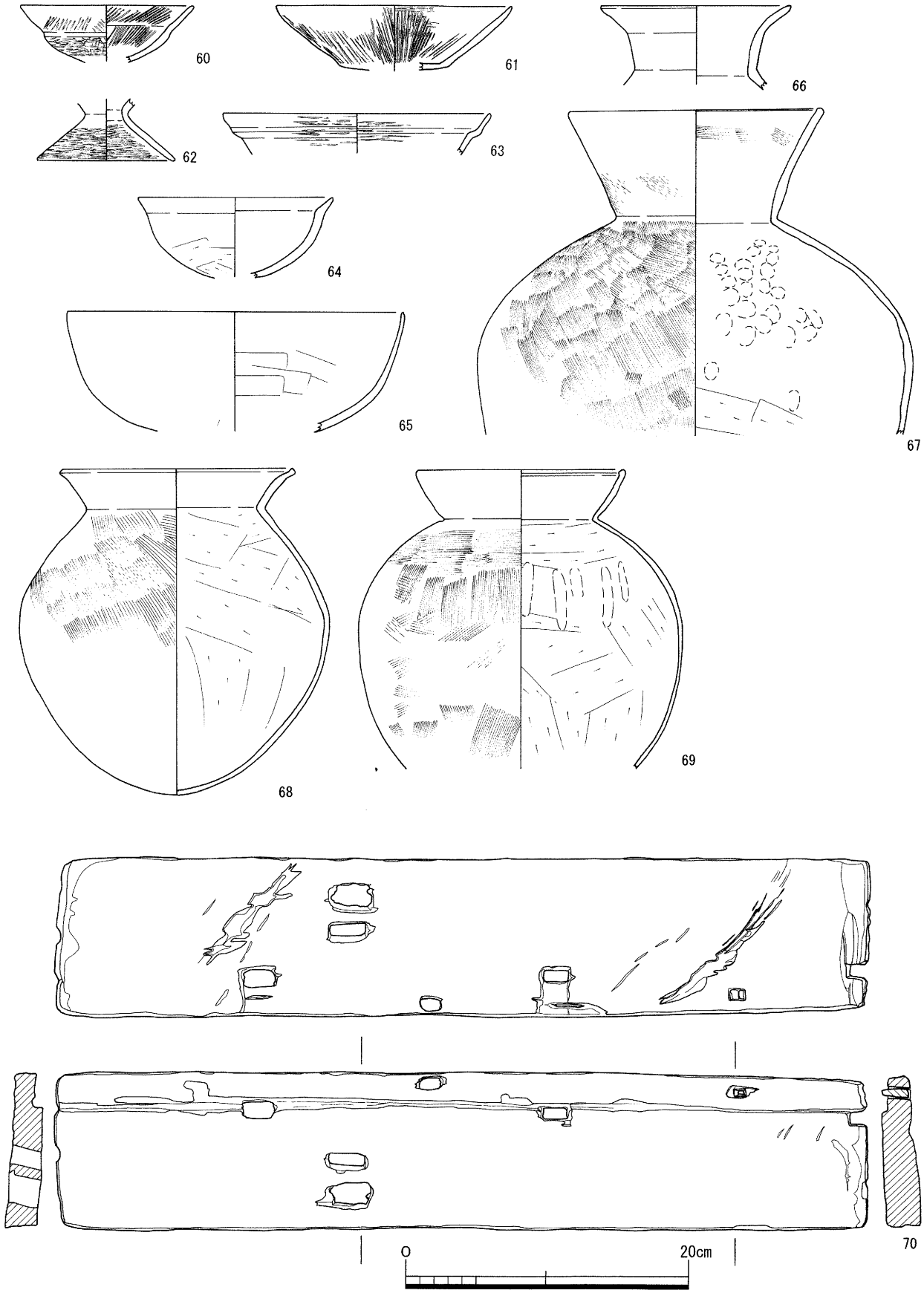


第19図　ＳＢ302平断面図

3.9m：柱間1.6～2.4m)、東西は２間(柱間約1.7m)以上の総柱の建物であると考えられる。柱穴は直径25～70cmの円形から隅丸方形で、深さ15～40cmを測る。ＳＰ333・335・336に柱根、またＳＰ336・338には礎板が遺存している。柱根は長さ35～60cm・径10～18cmを測る。礎板は長さ約24.0cm・幅約11.0cm・厚さ1.9～2.7cmの長方形の板材である。柱穴から土器は出土していない。

ＳＥ301

１Ｂ区で南部を検出したもので、北側は側溝掘削時に削平した。平面形は楕円形を呈すると思われ、検出部の規模は東西2.0m・南北1.7mを測る。断面逆台形に近く、深さ約0.8mを測る。埋土は、粘土質シルトを基調とする６層が底面に沿って堆積している。遺物は布留式期古相までの土器の他、木製品が出土しており、60～70を図化した。60は小形の高杯と思われ、口径12.2cmを測る。ヘラミガキを多用し、杯部内面は底部放射状、口縁部斜放射状に施す。61は有稜高杯で、口径16.4cmを測る。口縁部調整は縦位ヘラミガキで、内面には先行するハケが見られる。胎土は精良で、色調は淡灰褐色である。調整や口縁部がわずかに内灣する特徴から、東海地方からの搬入品と考えられる。62・63は精製の鼓型器台・有段口縁鉢である。64は小形の丸底鉢で、口径13.6cmを測る。65は粗製の鉢で、外面にはクラックが認められ、胎土中には２～３mm大の砂粒を多く含んでいる。66は口縁部が中位で屈曲する壺である。67は大形の直口壺で、口径17.8cmを測る。調整はハケを多用する。68は布留式の影響を受けた庄内式甕に位置付けられる。外面ハケ調整で、口径16.4cm・器高23.2cm・体部最大径21.6cmを測る。69は布留式甕で、口径14.6cmを測る。70は

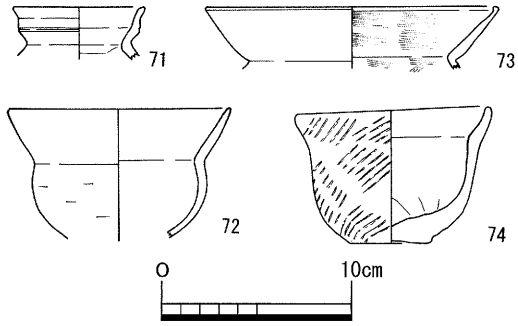


第20図　ＳＥ301出土遺物

不明木製品で、長さ70.6cm・幅約13.5cm・厚さ2.5～3.0cmを測る板材である。片面の側部には幅約3.0cm・深さ約６mmの段を施しており、６箇所に長方形の枘穴を穿つ他、一端に方形の刳り込みを施す。また枘穴の一つには楔状の木片が遺存している。

ＳＥ302

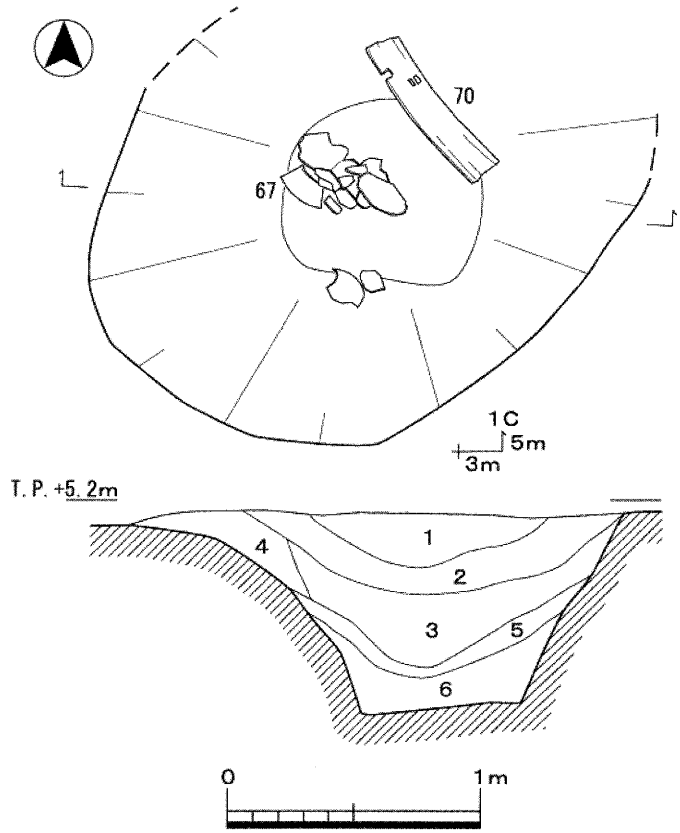
１Ｂ区で検出した井戸で、平面形は長辺約1.2m・短辺0.9mの楕円形を呈する。断面ほぼ逆台形で、深さ72cmを測り、埋土は粘土質シルトを基調とする４層から成る。上層には炭を多く含んでいる。遺物は71～74を図化した。71・72は小形丸底壺である。71は複合口縁を成し、口径6.8cmを測る。72は口径11.4cmを測り、磨耗のため調整は不明である。73は口縁端部を小さく巻き込む布留式甕である。口縁部内面に横位のハケを施す。74は小形の鉢で、口径10.2cm・器高6.9cm・底径4.2cmを測る。外面全面タタキ調整の後、ヨコナデにより口縁部を形成している。これらの土器は布留式期古相までに比定される。



第23図　ＳＥ302出土遺物

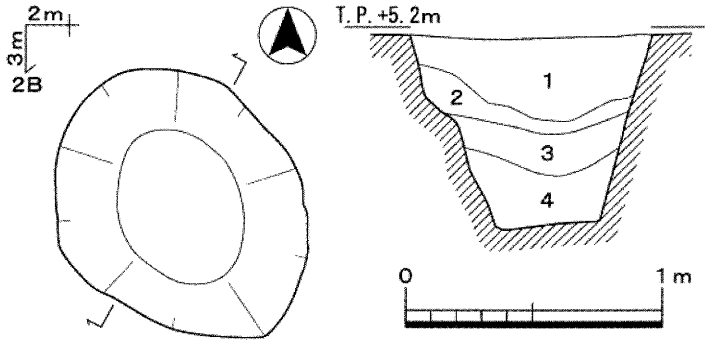
ＳＥ303

１・２Ａ区に位置し、平面形は南北2.3m×東西2.0mの不整円形を成す。断面椀形を呈し、深さ約0.8mを測る。埋土は細粒砂混粘土を基調とする５層



1．暗灰褐色粗粒砂混粘土質シルト(炭多)
2．灰黄色粗粒砂混粘土質シルト
3．暗灰黄色粗粒砂混粘土質シルト
4．黄灰色粗粒砂混粘土質シルト
5．灰色細粒砂～シルト互層(植物遺体)
6．灰色細粒砂混粘土質シルト

第21図　ＳＥ301平断面図



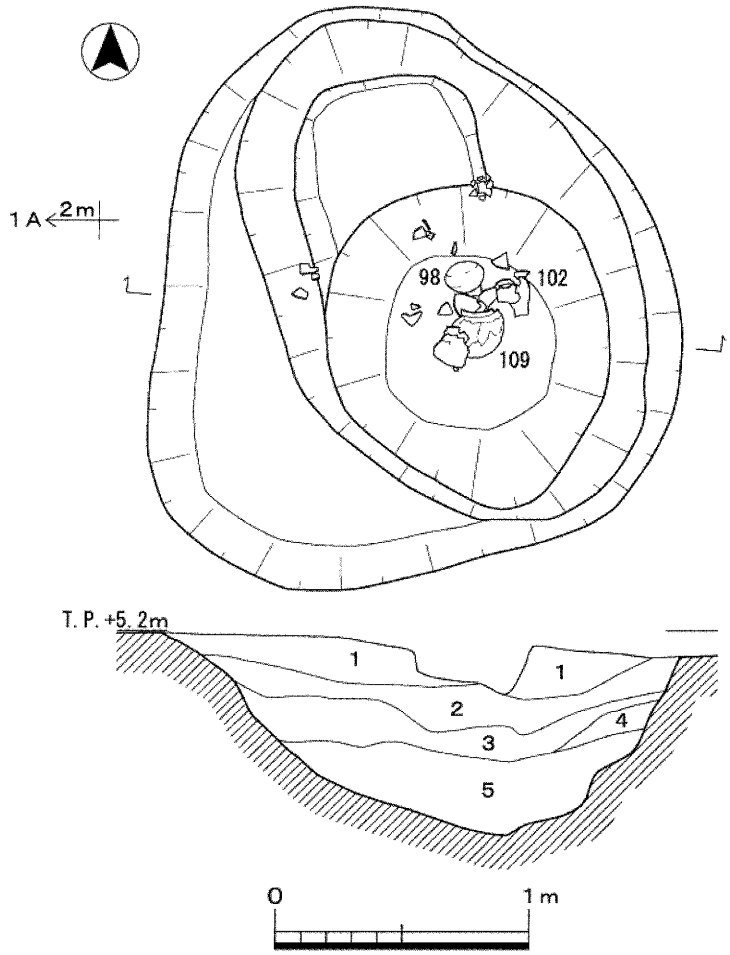
1．暗褐灰色細粒砂混粘土質シルト(炭多)
2．暗黄灰色極細粒砂混粘土
3．灰色細粒砂混粘土質シルト
4．暗灰色粘土質シルト

第22図　ＳＥ302平断面図

から成り、１～４層はブロック状を呈する。

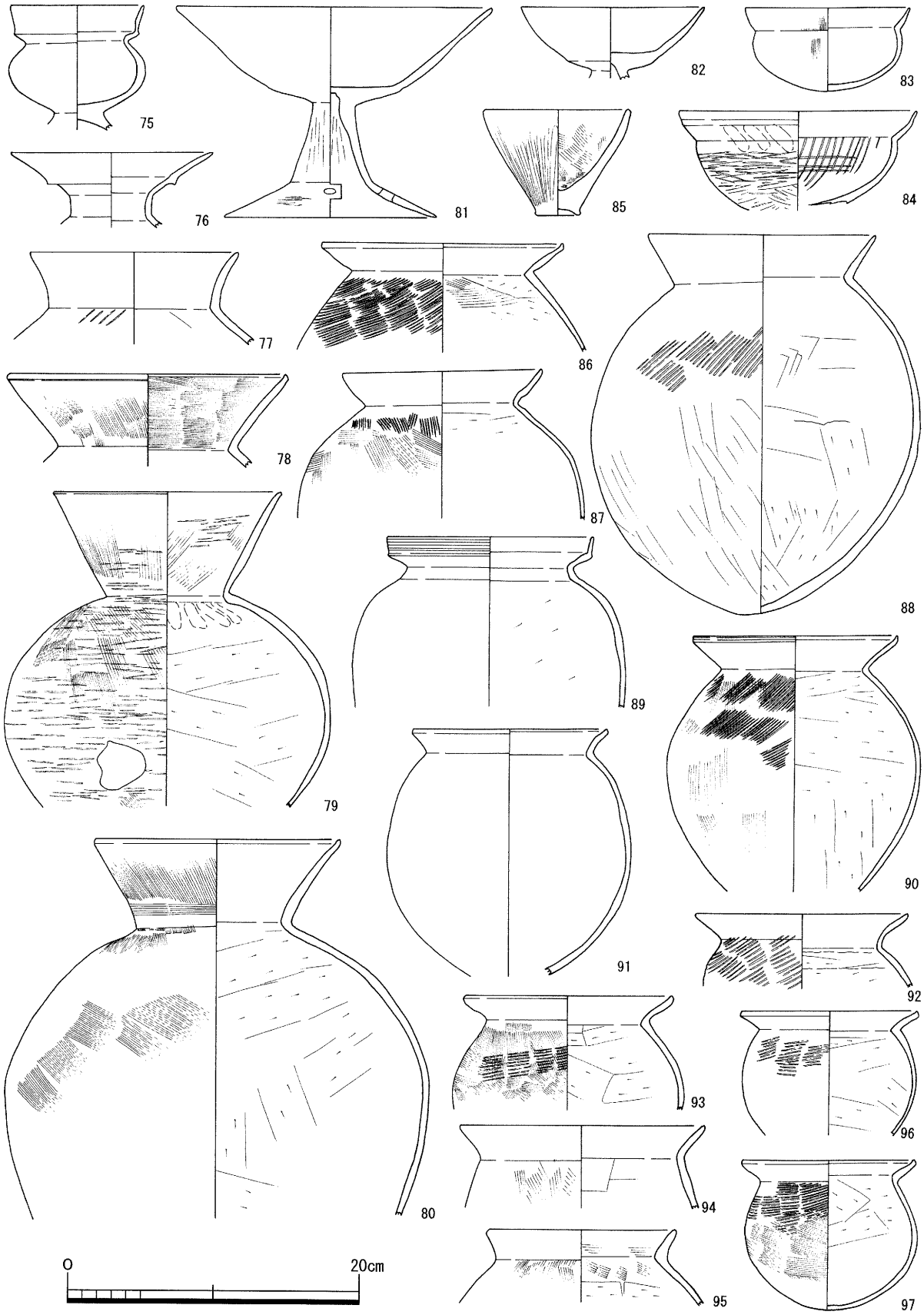
遺物は１・２層から庄内式期新相に比定される土器が多量に出土しており、布留式期古相に下る土器もわずかに含む。なお検出時には当遺構上部を土器集積として捉えており、これらを上層出土土器とした。上層には布留式期古相に下る土器が下層よりも多く含まれている。上層出土土器(75～97)、下層(１・２層)出土土器(98～109)を図化した。

上層－75は脚台付きの小形複合口縁壺で、口径9.2cmを測る。色調は淡灰褐色で、形態から見て山陰地方からの搬入品と考えられる。76は複合口縁壺で、口縁部外面中位に断面三角形の稜を成す。77は広口壺で、肩部外面にタタキが認められる。78～80は直口壺である。78は口縁部内外面、80は口縁部～体部外面ハケ調整である。79は口径16.0cmを測り、調整は口縁部～体部外面ハケ後横位ヘラミガキ、体部内面ヘラケズリである。体部下半に黒斑を有する他、穿孔と思われる直径約３cmの焼成後の欠損部が見られる。81・82は大形・小形の有稜高杯で、口径は22.0cm・12.6cmを測る。いずれも口縁部に黒斑を有する。83はほぼ完形の小形丸底鉢で、口径11.5cm・器高5.8cmを測る。口縁部～体部に縦位のハケを施し、体部に黒斑を有する。84は有段口縁鉢で、口径16.4cmを測る。85は鉢で、口径10.2cm・器高7.5cm・底径3.3cmを測る。外面縦位ヘラミガキ、内面ハケ調整である。86～97は甕である。86・90・96・97は庄内式新相、87・93～95は布留式古相に比定されよう。96・97は小形甕で、97は口径12.1cm・器高10.5cm・体部最大径12.0cmを測る。87は肩部に縦位のタタキを施している。93は布留式傾向甕に位置付けられる。94・95は、体部外面ハケ調整であるが、形態に典型的な布留式甕の要素を備えておらず詳細は不明である。88は口縁部が直口状を成し、タタキは肩部下位にのみ認められ、器壁がやや厚い。在地甕とは趣が異なり搬入品であろう。89は吉備地方からの搬入品である。91は磨耗のため調整不明である。色調は淡褐色を呈し、形態的に搬入品と思われる。92はタタキが粗く、庄内式古相に比定される。

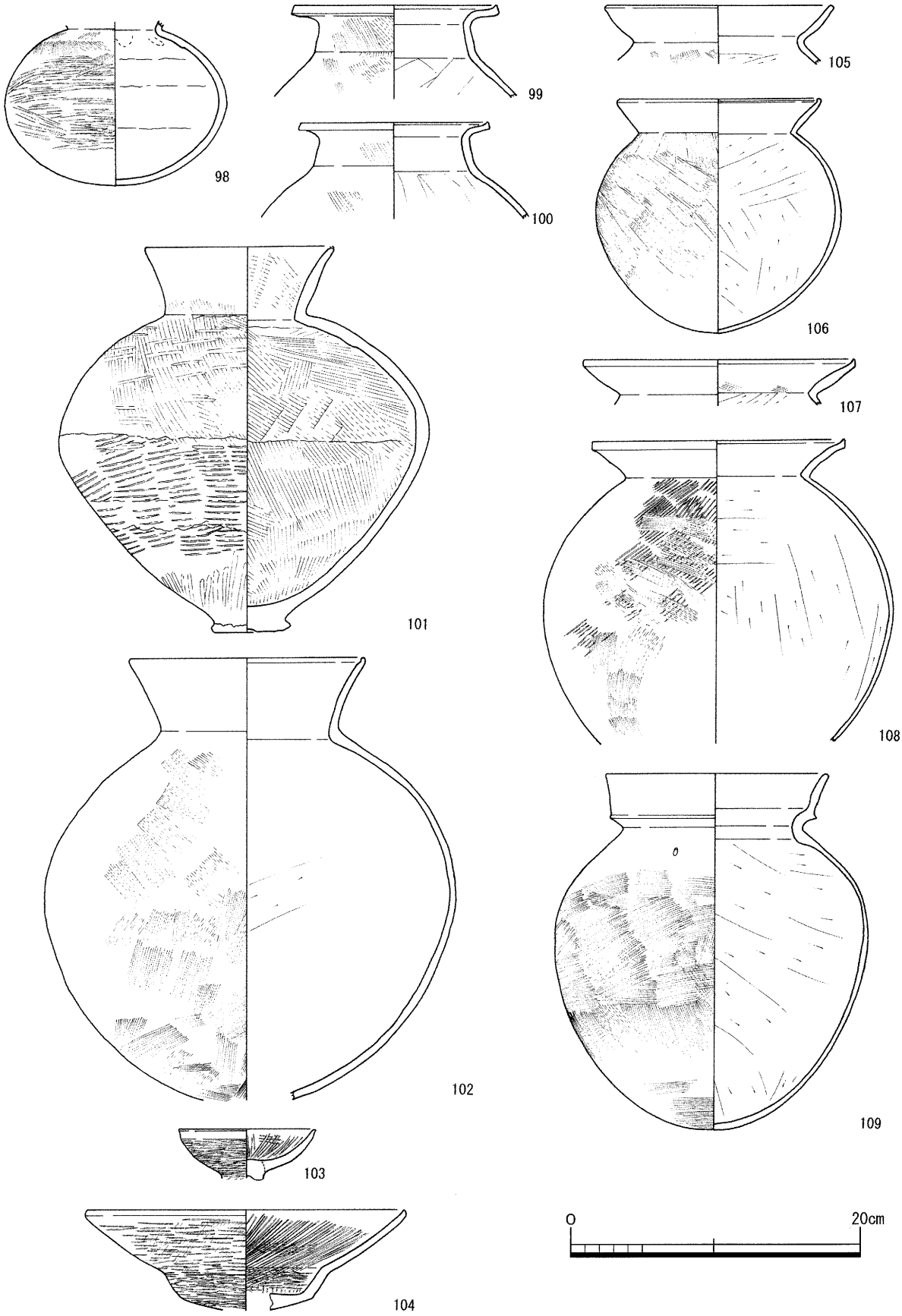


1．暗灰黄色粗粒砂混粘土質シルト　ブロック状
2．暗灰色粗粒砂混粘土　ブロック状
3．暗黄灰色細粒砂混粘土　ブロック状
4．灰黄色細粒砂混粘土　ブロック状
5．灰色細粒砂混粘土

第24図　ＳＥ303平断面図

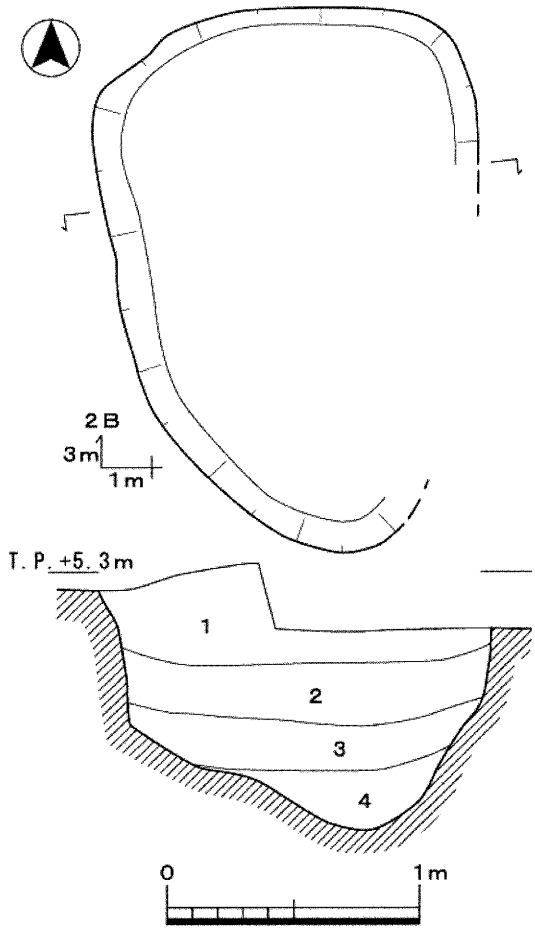


第25図　ＳＥ303上層出土遺物



第26図　ＳＥ303下層出土遺物

下層－98は精製の壺で、底体部完存である。体部にヘラミガキを施す。99・100は、内傾する頸部から口縁部が屈曲し、端部はつまみ上げる。形態的に四国からの搬入品であろう。101・102は直口壺である。101は口径13.0cm・器高26.2cmを測る。底体部外面にヘラミガキを施すが、粗いため先行する上半のハケ、下半のタタキが明瞭に認められる。102は球形の底体部を呈し、口径16.2cmを測る。外面ハケ調整で、底部に黒斑を有する。103は小形器台で、外面に横位、内面に放射状ヘラミガキを施す。104は有段高杯で、口径21.0cmを測る。調整はハケ後ヘラミガキである。105は布留式甕、106は布留式影響の庄内式甕、107・108は庄内式甕である。106はほぼ完形に復元され、口径14.0cm・器高16.0cm・体部最大径16.7cmを測る。体部は球形化し、外面調整はハケである。底部のみ煤けている。109はほぼ完形で、口径15.3cm・器高24.4cm・体部最大径21.3cmを測る。外面ハケ調整で、肩部に１個の刺突文を施す。山陰地方からの搬入品である。



1．暗灰黄色細粒砂混粘土質シルト　ブロック状
2．暗灰黄色粘土～粘土質シルト　ブロック状
3．暗灰青色粘土質シルト　ブロック状
4．灰色粗粒砂混粘土質シルト　ブロック状

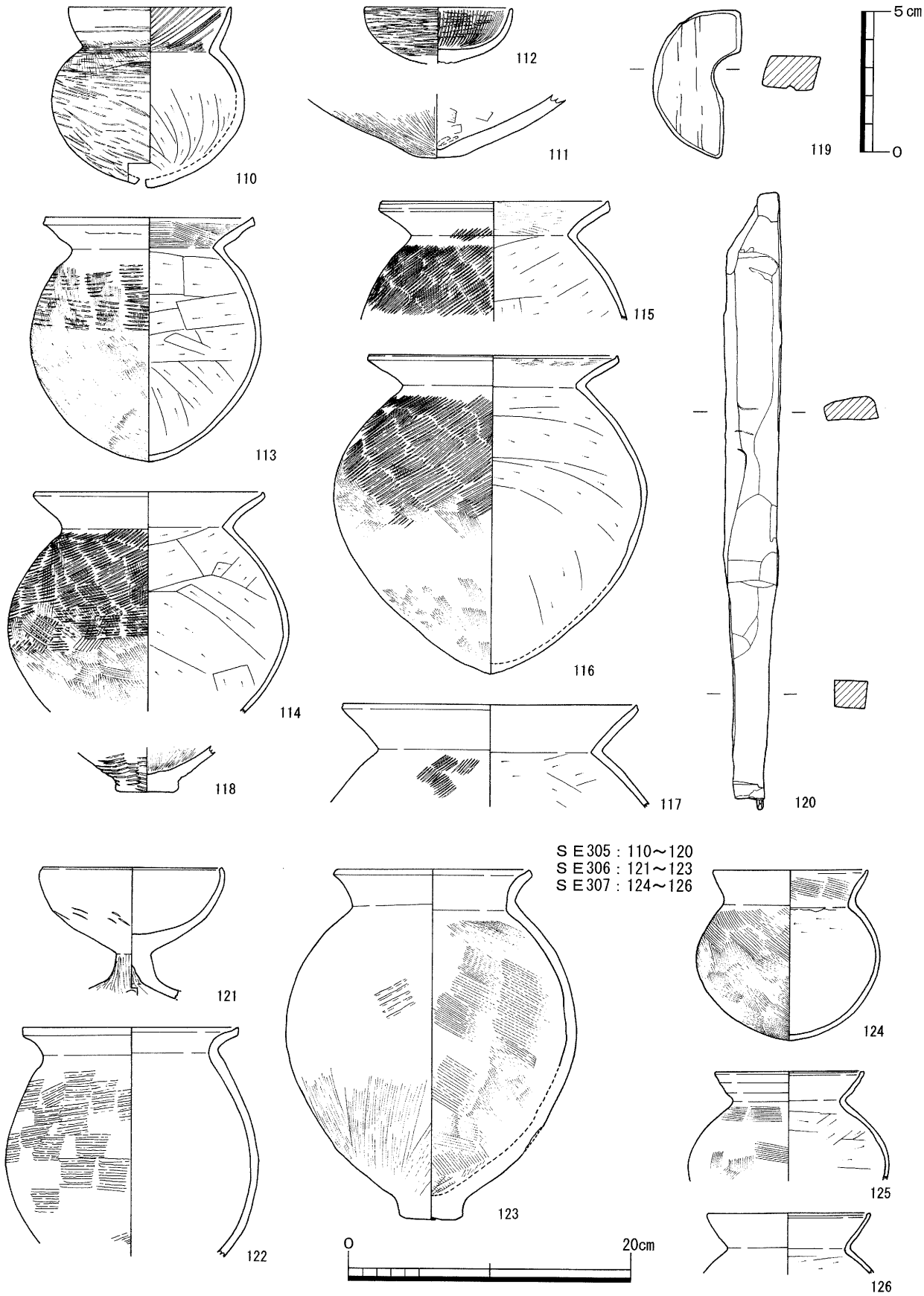
第27図　ＳＥ304平断面図

ＳＥ304

２Ｂ区に位置し、平面形は南北約2.2m×東西約1.5mの楕円形に近い。断面ほぼ逆台形で、深さ約1.0mを測り、埋土はブロック状を呈する砂混粘土質シルトを基調とする４層が水平に堆積する。東部はＳＫ301に削平されている。遺物は出土していない。

ＳＥ305

２Ａ区に位置し、平面形は約1.3×1.1mの楕円形に近い。断面ほぼ逆台形を呈し、深さ約0.5mを測る。埋土は粘土質シルトを基調とする６層から成り、１～３層はブロック状を呈する。遺物は４層以下から庄内式期新相までに比定される土器の他、木製品が出土している。110～120を図化した。この内110・120は底部付近の出土である。110はヘラミガキを多用する精製の短頸直口壺で、ほぼ完形である。口径11.4cm・器高12.7cmを測る。尖り気味の底部のほぼ中央に、直径５mm程度の焼成前の穿孔を施している。111は大形の壺底部と思われ、底部外面に黒斑を有する。112は精製の椀型高杯で、調整は横位ヘラミガキの後、内面に放射状ヘラミガキを加える。113～117は庄内式甕で、口径は14.8cm(113)～20.6cm(117)を測る。113は肩部タタキがほぼ水平方向に施される。116は口径17.6cm・器高22.5cm・体部最大径21.9cmを測り、全体に厚く煤けている。体部外面のハケは、一部が肩部に及ぶものの、ほぼ体部中位までである。118はタタキを施す甕底部で、底径4.4cmを測る。Ｖ様式系甕と思われる。119は不明木製品で、輪状を成す製品の一部と考えら



第28図　ＳＥ305～307出土遺物

れる。残存長5.2cm・厚さ約1.2cmを測る。120は棒状木製品で、用途は不明である。残存長43.5cmを測り、下端部は欠損している。断面形状は、下方は2.0cm×2.2cmの方形、先端部は幅広になり3.8cm×1.6cmの長方形を成す。幅広部分の表面には削りの痕跡が明瞭に観察できる。

ＳＥ306

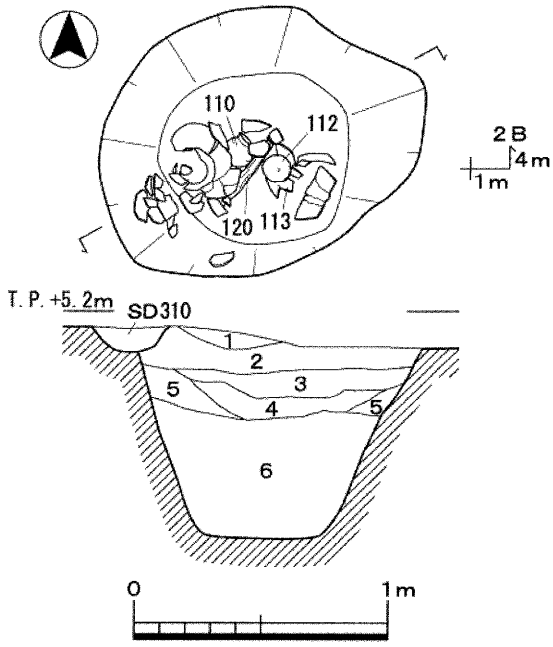
２Ｂ区に位置し、平面形は直径約1.2mの不整円形を呈する。断面逆台形を呈し、深さ約0.8mを測る。埋土は粘土質シルトを基調とする５層から成り、１・２層はブロック状を呈する。遺物は上層から庄内式期古相に比定される土器が出土している。121～123を図化した。121は椀形高杯で、杯部が完存し、口径12.8cmを測る。口縁端部に段を成し、調整は杯部ナデ、脚部はヘラミガキで４方孔を施す。122・123はＶ様式系甕である。122の外面のタタキはほぼ水平に施される。123は口径14.0cm・器高24.6cmを測る。調整は外面下半板ナデで、上半はタタキをナデ消しており、内面はハケである。体部下半が煤ける。これらの土器は弥生時代後期末に比定することもできると考えられる。しかし他の出土土器片の中に、細目のタタキを施す甕の破片が含まれていることから、庄内式期古相とした。

ＳＥ307

２Ｂ区に位置し、平面形は一辺約0.7mの隅丸方形に近い。断面逆台形を呈し、深さ約0.5mを測る。埋土は粘土～粘土質シルトを基調とする３層が、ほぼ水平に堆積する。遺物は布留式期古相に比定される土器が出土している。124～126を図化した。124はほぼ完形の直口壺で、口径10.9cm・器高12.0cmを測る。調整はハケを多用し、底部に黒斑を有する。125・126は布留式甕である。共に口縁端部が内側に小さく肥厚する。

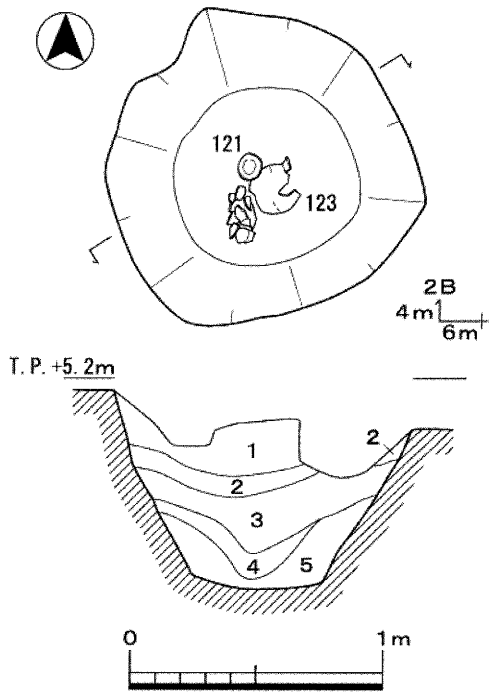
ＳＥ308

２Ｂ区、ＳＥ307の南側に位置し、平面形は0.8m×0.6mの楕円形を呈する。断面逆台形を呈



1．暗灰黄色極細粒砂混粘土質シルト　ブロック状
2．灰黄色極細粒砂混粘土質シルト　ブロック状
3．暗灰黄色粘土質シルト　ブロック状
4．暗黄灰色粘土質シルト～極細粒砂互層
5．暗黄灰色粘土質シルト
6．灰色粘土～粘土質シルト

第29図　ＳＥ305平断面図



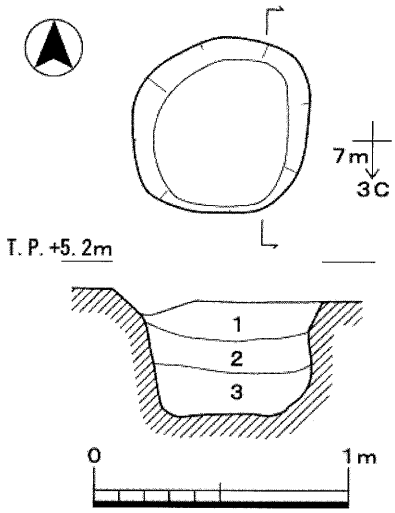
1．灰黄色粘土質シルト　ブロック状
2．暗灰黄色極細粒砂混粘土　ブロック状
3．灰色粘土質シルト
4．暗灰色粘土質シルト　植物遺体少
5．暗灰青色極細粒砂混粘土質シルト

第30図　ＳＥ306平断面図

し、深さ約0.5mを測る。埋土は粘土質シルトを基調とする４層が、ほぼ水平に堆積する。遺物は布留式期古相に比定される土器片が少量出土しているが、図化しえるものは無かった。

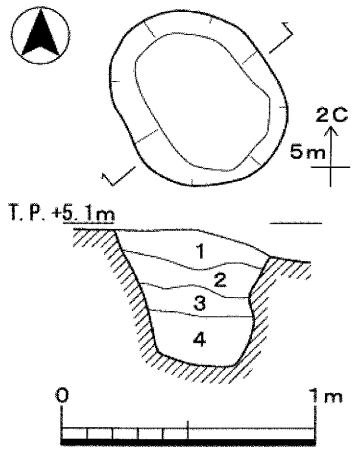
ＳＥ309

２Ａ～Ｂ区に位置し、平面形は南北約3.3m×東西約1.7mの歪な長円形を呈する。断面逆台形を呈し、深さ約1.1mを測る。埋土は粘土～粘土質シルトを基調とする５層が、ほぼ水平に堆積する。遺物は庄内式期新相に比定される土器が出土しており、127～135を図化した。127は精製の直口壺で、口縁部はやや内湾する。口径10.8cm・器高18.0cmを測り、口縁部の一部を欠く。調整はヘラミガキを多用し、口縁部内面に斜放射状ヘラミガキを加える。128は直口壺口縁部で、端部がやや開く。口径15.0cmを測り、調整はハケである。129は複合口縁壺で、口径16.5cmを測る。磨耗のため調整は不明瞭であるが、体部外面下半にヘラミガキ、上半にはタタキが認められる。130・131は小形



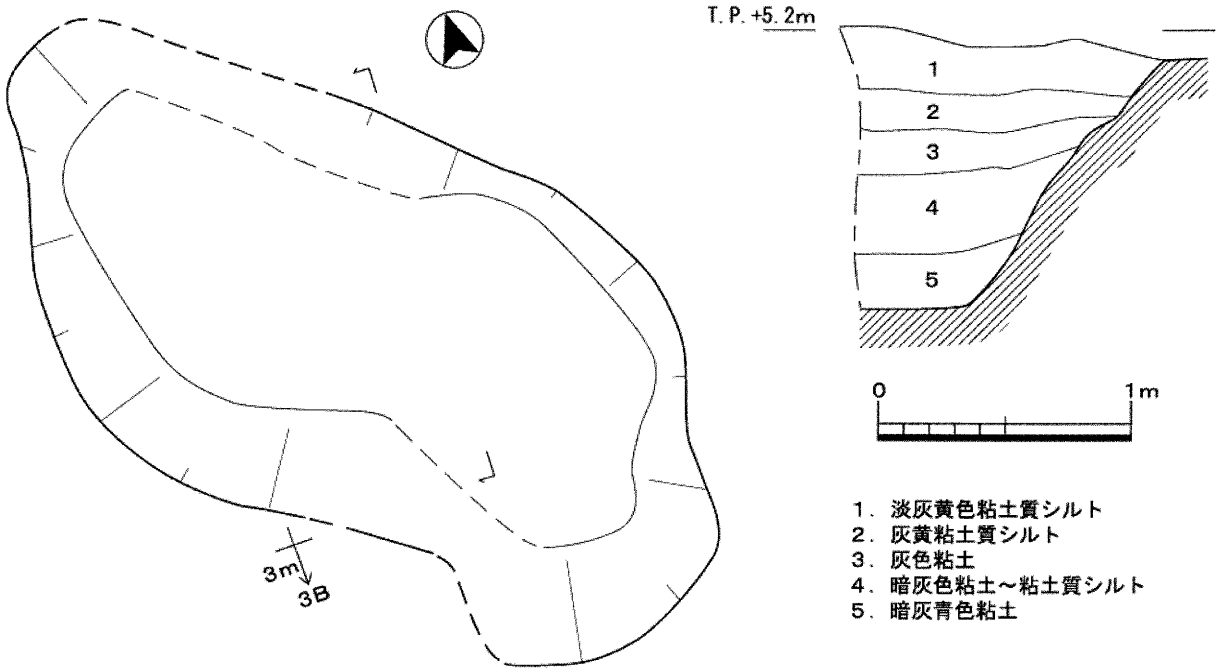
1．暗灰色極細粒砂混粘土
2．暗灰色極細粒砂混粘土質シルト
3．暗灰色粘土質シルト

第31図　ＳＥ307平断面図



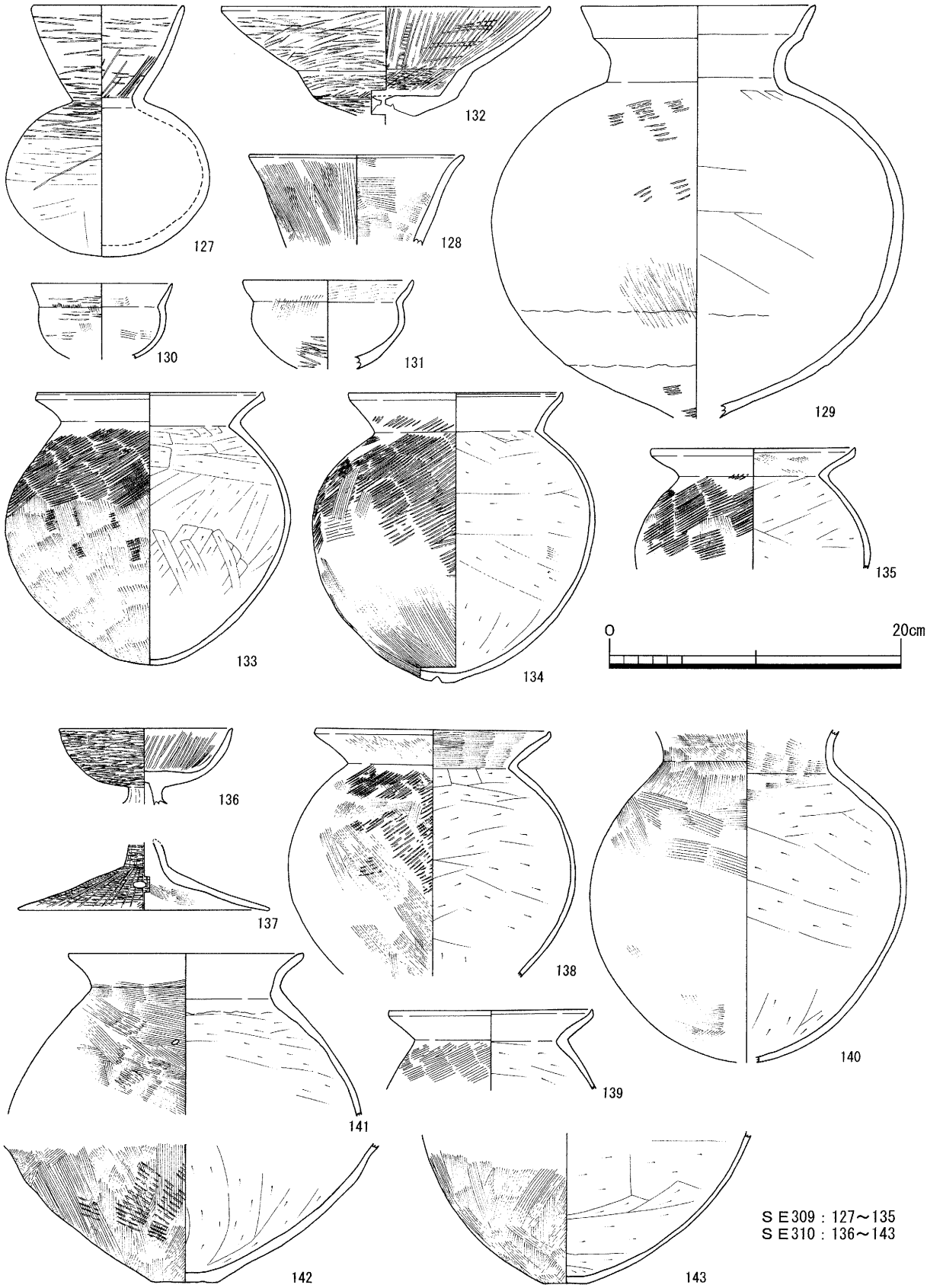
1．暗黄褐色粘土質シルト
2．暗灰褐色粘土質シルト
3．暗灰色細粒砂混粘土質シルト
4．暗灰色粘土質シルト

第32図　ＳＥ308平断面図



1．淡灰黄色粘土質シルト
2．灰黄粘土質シルト
3．灰色粘土
4．暗灰色粘土～粘土質シルト
5．暗灰青色粘土

第33図　ＳＥ309平断面図



第34図　ＳＥ309・310出土遺物

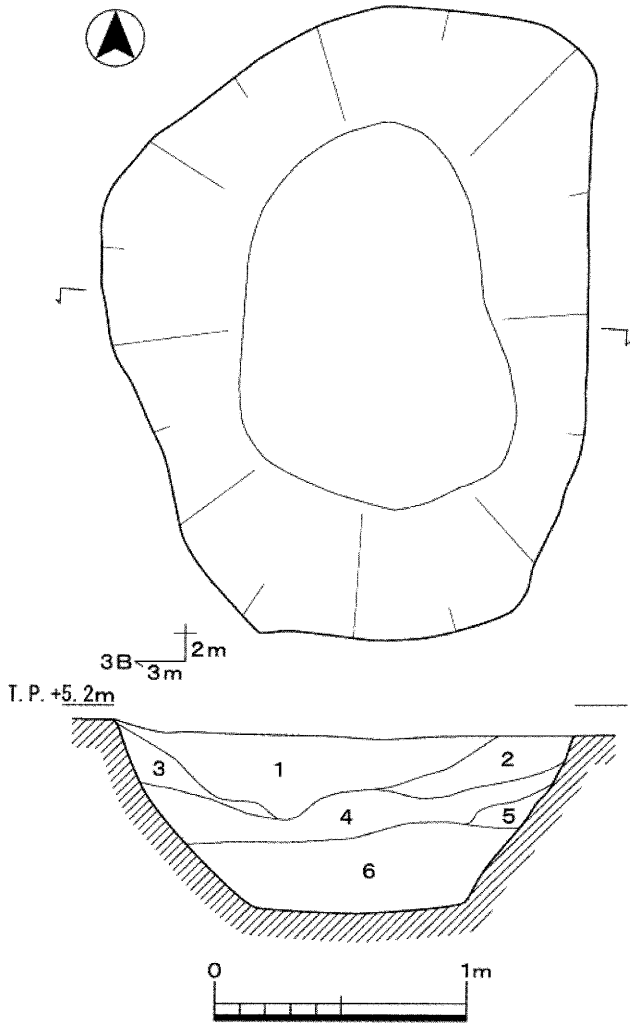
の丸底鉢で、口径10.0cm・12.0cmを測る。調整はハケ後ヘラミガキで、131は底部のみ粗いヘラミガキを加える。132は有段高杯で、口径23.2cmを測る。調整はヘラミガキを多用し、杯底部中央には直径約４mmの焼成後の穿孔を施している。口縁部に黒斑を有する。133～135は庄内式甕である。133・134は口径16.3・15.2cm、器高19.4・20.6cm、体部最大径20.2・20.0cmを測る。調整は体部上半タタキ、下半ハケで、134の底部中央に直径約７mm・深さ約５mmの窪みが見られる。体部最大径の位置は134がやや高く、古い様相といえる。共に厚く煤ける。

ＳＥ310

２Ｂ区に位置し、平面形は南北2.5m×東西1.9mの歪な楕円形を呈する。断面逆台形を呈し、深さ約0.7mを測る。埋土は粘土～粘土質シルトを基調とする６層から成る。遺物は庄内式期新相に比定される土器が出土しており、136～143を図化した。136・137は精製の椀形高杯で、ヘラミガキを多用し、137は脚部内面ハケで、４方孔を有する。136は口径12.2cm、137は底径18.0cmを測る。138・139は庄内式甕で、口径16.6・14.6cmを測る。138は厚く煤ける。140は口縁部を欠き詳細は不明である。肩部のハケ調整や頸部の形態からみて、山陰地方の複合口縁壺の可能性がある。全体に煤けており煮沸に使用している。141は壺、あるいは甕で、口径16.8cmを測る。外面調整は左上りのタタキ後ハケである。142・143は、底径4.6・3.0cmの小さな平底を有するもので、壺と考えられる。調整は外面ハケ、内面ヘラケズリで、142はハケに先行するタタキが残る他、底面にもハケが及んでいる。

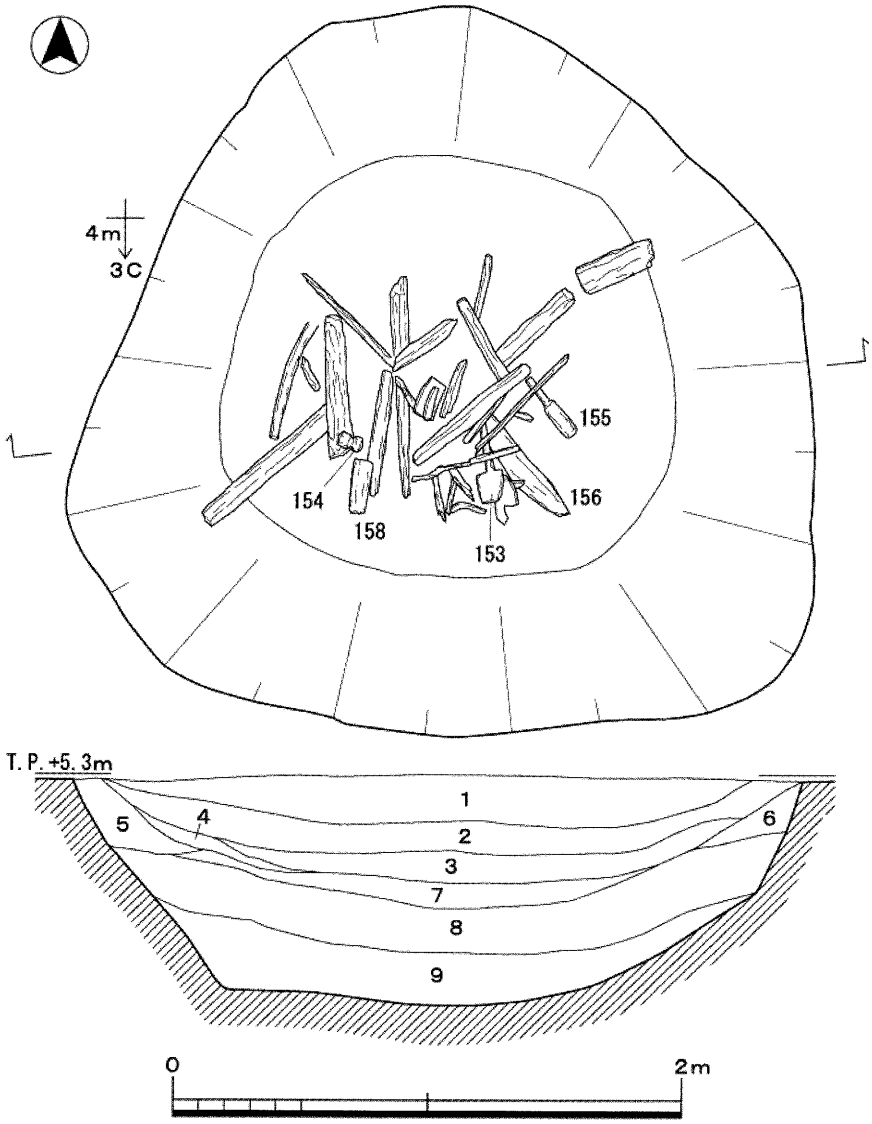
ＳＥ311

２Ｂ～Ｃ区に位置し、平面形は南北2.9m×東西2.9mの不整円形を呈する。断面逆台形を呈し、深さ約0.9mを測る。埋土は粘土質シルトを基調とする９層から成り、３・４層には炭を含む。遺物は８・９層に多く含まれており、布留式期古相を主とする土器の他、木製品・自然木が多く出土している。土器(144～152)・木製品(153～158)を図化した。144は複合口縁壺の口縁部と思われる。調整はヨコナデで、口縁端部を上下に肥厚させる。145は複合口縁壺で、口径16.6cmを測る。胎土中に砂粒を多く含む。146・147は直口



1．暗灰黄色シルトブロック混粘土質シルト
2．暗灰黄色粘土質シルト
3．灰黄色粘土質シルト
4．暗灰黄色極細粒砂混粘土質シルト
5．淡灰色粘土
6．灰色粘土～粘土質シルト

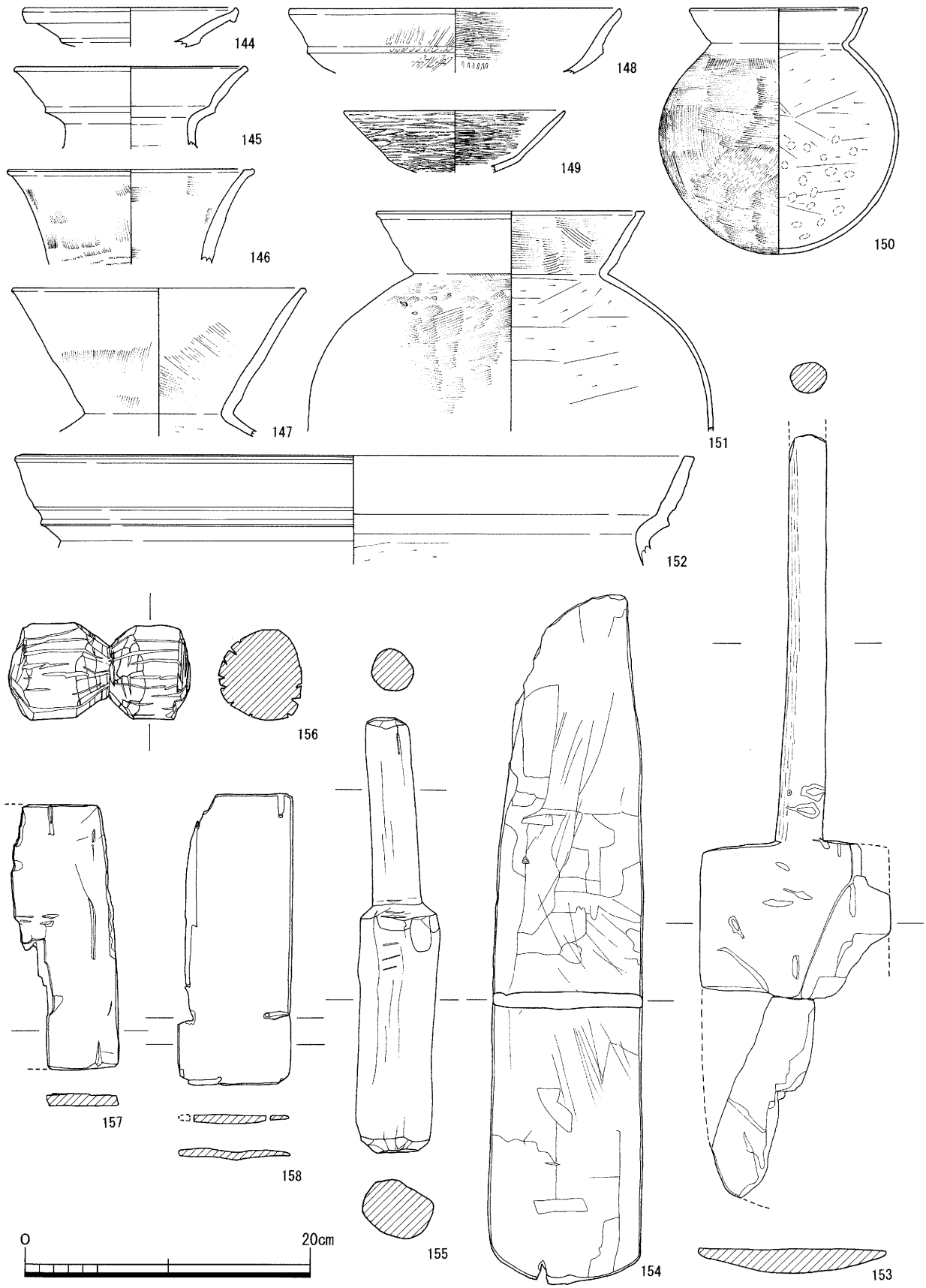
第35図　ＳＥ310平断面図



1．灰黄褐色細粒砂混粘土質シルト
2．暗灰黄色細粒砂混粘土質シルト
3．灰色粘土質シルト　炭含む
4．暗灰色粘土質シルト　炭含む
5．暗黄灰色細粒砂混粘土質シルト
6．灰黄色粘土
7．暗灰色細粒砂混粘土質シルト
8．暗灰青色細粒砂混粘土質シルト
9．灰青色粘土質シルト

第36図　ＳＥ311平断面図

壺で、調整は共にハケを多用する。148・149は有稜高杯である。148は砂粒を多く含む胎土で、形態的に弥生時代後期のものに近く古相を呈する。調整は共にヘラミガキである。150・151は布留式甕である。150はほぼ完形に復元され、口径12.7cm・器高17.7cm・体部最大径17.0cmを測る。口縁端部は内側に肥厚し、上端面に沈線を生じている。肩部にはハケに先行する縦位のタタキがわずかに残る。151は大形で、口径19.0cm・体部最大径28.8cmを測る。口縁端部は外・内に肥厚し、肩部には３個の刺突文を施す。形態的にやや新相に位置付けられる。152は大形の複合口縁鉢で、口径48.2cmを測る。形態的に山陰地方からの搬入品と考えられる。153は一木鋤で、側面観からは直伸鋤に分類される。残存長54.6cmを測る。身は角肩を成し、断面は前面中央が膨らみ、後面が平坦である。身幅13.4cm・身厚1.8cmを測る。柄は断面円形を成し、柄径2.5～3.3cmを測る。154は曲柄平鍬の身部と考えられ、残存長49.4cmを測る。身はなだらかな肩部から先端部に向かって

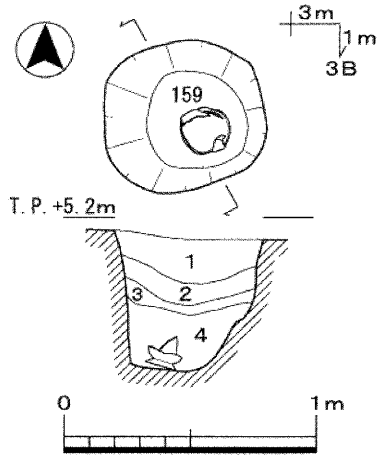


第37図　ＳＥ311出土遺物

徐々に幅広になる形状で、身先端部で幅11.1cmを測る。身横断面は長方形を成し、厚さは約1.1cmを測る。表面には加工痕が明瞭に残る。155は横槌で、全長31.1cmを測る。身は断面偏円形を成し、直径3.6～5.2cmを測る。側面は使用痕が顕著で全体に痩せており、先端は面取りされ中央が膨らむ。柄は長さ13.5cmを測り、断面は直径約3.2cmの円形を成す。身と同様に、先端が面取りされ中央が膨らむ。156は木錘で、側面鼓形を成す４類に分類される。断面偏円形を成し、両端面は面取りされ中央が膨らむ。法量は長さ12.8cm・幅3.5～6.6cmを測る。157・158は平面長方形を成す用途不明の板状木製品である。長さ・幅・厚さは157－18.8・7.4・0.8cm、158－20.9・8.1・0.6cmを測る。157は一部火を受ける。158は縁辺の３箇所(推定４箇所)に直径約４mmの円孔を有する。

ＳＥ312

２Ａ区に位置し、平面形は直径65cm程度の隅丸方形に近い。断面逆台形を呈し、深さ約0.6mを測る。埋土は粘土～粘土質シルトを基調とする４層から成り、１・２層はブロック状を呈する。遺物は、布留式期古相までの土器が出土しており、底部付近出土の159を図化した。159はほぼ完形に復元され、口径15.7cm・器高21.4cm・体部最大径20.5cmを測る。ハケ調整であるが、口縁部に庄内式甕の特徴を残すもので、布留式傾向甕に位置付けられる。外面全体が煤ける。



1．粘土質シルトブロック混暗灰黄色粘土
2．粘土質シルトブロック混暗黄灰色粘土
3．暗灰色粘土質シルト　植物遺体含む
4．灰色粘土～粘土質シルト

第38図　ＳＥ312平断面図

ＳＫ301

１Ａ区で検出した土坑で、平面形は東西55cm・南北50cmの方形に近い。断面皿状を呈し、深さ７～12cmを測り、埋土は淡灰黄色粘土の単層である。遺物は出土していない。

ＳＫ302

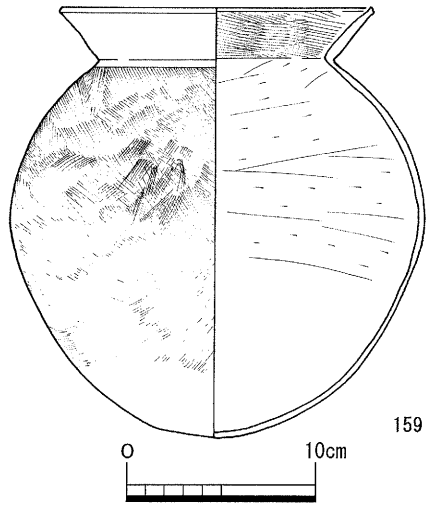
１Ａ区、ＳＫ301の南部に位置し、西側は調査区外に続く。検出部分の平面形は不定形で、規模は東西2.6m・南北2.8mを測る。断面皿状を呈し、深さ約16cmで、埋土は暗灰色粘土の単層である。東部は溝状を成しており、その状況から見てＳＤ310と繋がっていた可能性がある。遺物は出土していない。

ＳＫ303

２Ａ区に位置し、西側は調査区外に続くため詳細は不明である。検出部分の平面形は不定形で、規模は東西48cm・南北86cmを測る。断面逆台形を成し、深さ約10cmを測り、埋土は淡褐灰色粘土の単層である。遺物は出土していない。

ＳＫ304

２Ａ区、ＳＫ303南側に位置する。平面形は溝状を成し、規模は東西25cm・南北80cmを測る。断面椀形を成し、深さ約７cmで、埋土はＳＫ303と同じである。遺物は出土していない。



第39図　ＳＥ312出土遺物

ＳＫ305

２Ａ区に位置し、平面形は北東－南西方向の溝状を成す。規模は長さ95cm・幅33cmを測る。断面椀形を成し、深さ約13cmで、埋土は褐灰黄色粘土質シルトである。遺物は出土していない。

ＳＫ306

３Ｂ区で遺構の東部を検出した。平面形は不定形を成し、検出部分の規模は東西1.3m・南北1.4mを測る。断面皿状を成し、深さ約15cmで、埋土は灰褐色粘土質シルトである。遺物は出土していない。

ＳＫ307

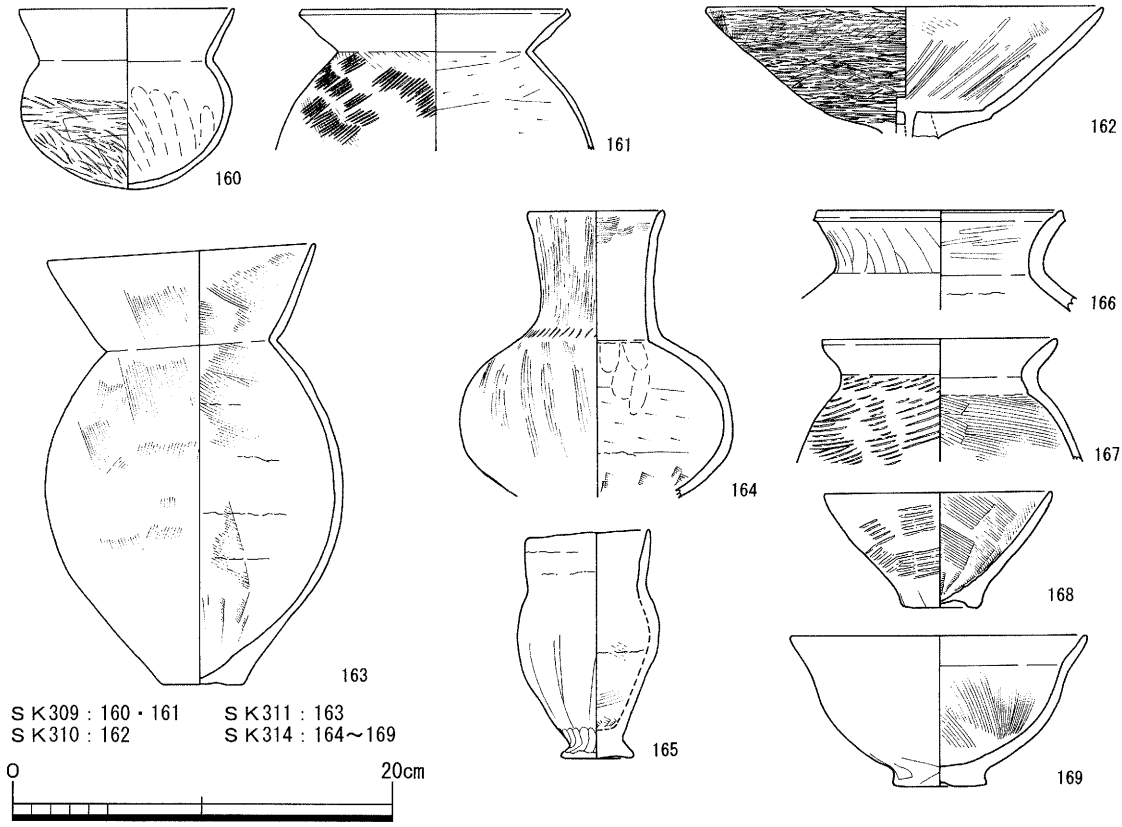
３Ｂ区、ＳＫ306南側で遺構の東部を検出した。平面形は不定形を成し、検出部分の規模は東西1.2m・南北2.0mを測る。断面皿状を成し、深さ約27cmで、埋土はＳＫ306と同じである。遺物は出土していない。

ＳＫ308

３Ｂ区で検出した土坑で、平面形は不定形を成し、規模は東西1.2m・南北0.7mを測る。断面逆台形を成し、深さ約22cmを測り、埋土は暗灰褐色粘土質シルトである。遺物は庄内式期新相頃に比定される土器の他、長さ25cm・幅約５cmを測る木片が出土している。図化しえるものはなかった。

ＳＫ309

３Ｂ区、ＳＫ308南側で検出した土坑で、平面形は不定形を成し、規模は東西1.6m・南北0.9mを測る。断面逆台形を成し、深さ約20cmで、埋土は灰褐色粘土質シルトである。遺物は布留式



第40図　ＳＫ309～311・314出土遺物

期古相までの土器が出土しており、160・161を図化した。160は小形丸底壺で、口径12.0cm・器高10.1cm・体部最大径11.8cmを測る。調整は口縁部ヨコナデ、体部内面ナデ、底体部外面ヘラケズリで、中位以下にヘラミガキを加える。体部外面に黒斑を有する。布留式期古相に比定される。161は庄内式甕で、口径15.0cmを測る。庄内式期新相に比定される。

ＳＫ310

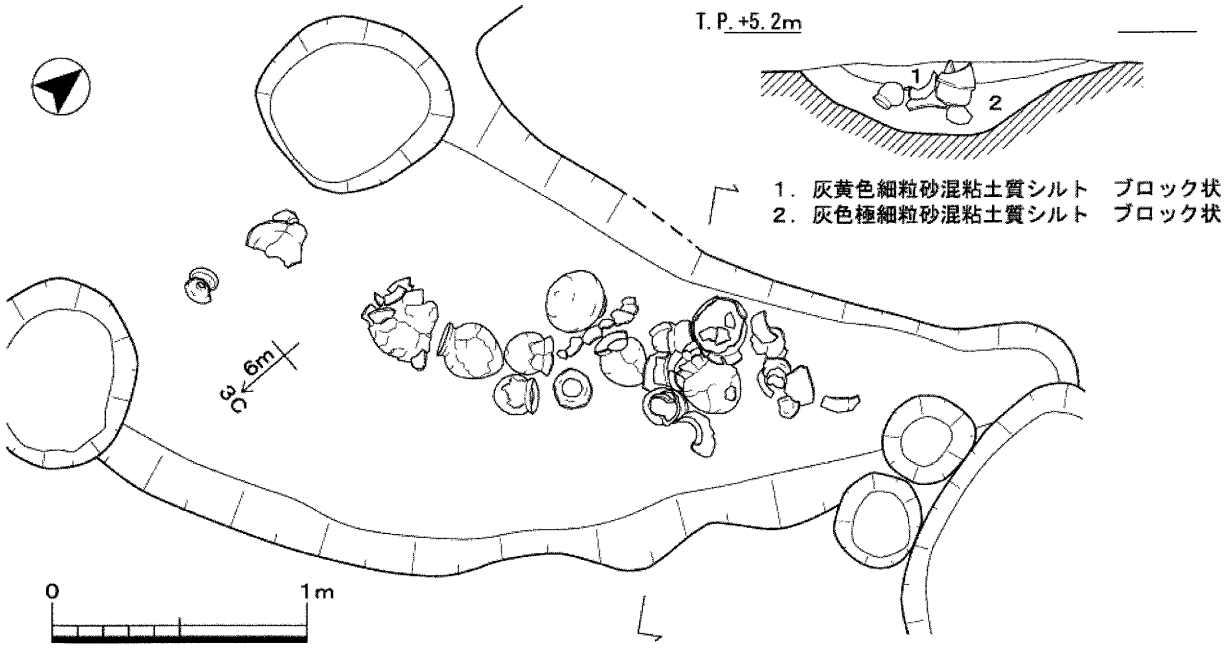
２Ｂ区で検出した土坑で、平面形は長辺2.3m・短辺1.7mを測る楕円形を呈する。断面皿状を成し、深さ19cmで、埋土は暗灰黄色粘土質シルトである。遺物は庄内式期新相に比定される土器が出土しており、162を図化した。162は有稜高杯で、口径22.0cmを測る。調整はハケ後ヘラミガキで、杯底部には脚柱部に貫通する直径約５mmの円孔を有する。口縁部に黒斑を有する。

ＳＫ311

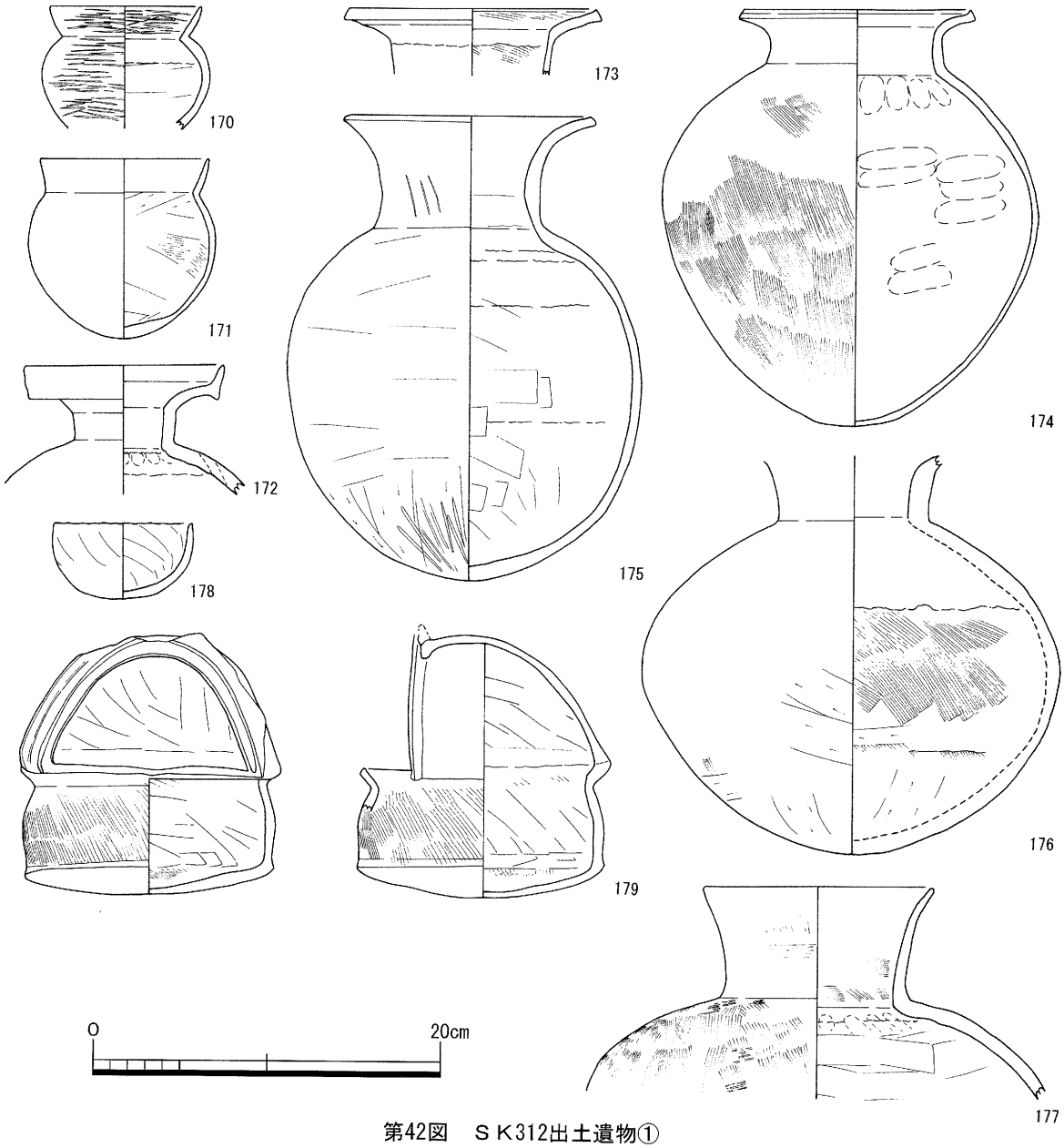
２Ｂ区に位置し、平面形は直径約1.6mの円形を呈する。断面ほぼ逆台形を成し、深さ約50cmを測る。埋土は上から暗褐色細粒砂混粘土質シルト・灰褐色細粒砂混粘土質シルト・暗灰黄色細粒砂混粘土質シルト・灰色粘土質シルトの４層で、１～３層はブロック状を呈する。なお検出時点で上部を削平してしまっており、本来第２面遺構であった可能性がある。遺物は庄内式期頃に比定される土器が出土しており、163を図化した。163は長胴の直口壺で、口径15.0cm・器高24.3cmを測る。調整はハケを多用し、底面には葉脈痕が認められる。形態的に見て製塩土器の可能性があり、底部外面が淡赤色を呈していることも示唆的である。

ＳＫ312

２Ｂ～Ｃ区に位置し、平面形は北東－南西方向に長い溝状を成す。規模は長さ3.9m・幅0.9～2.0m・深さ約30cmを測る。断面逆台形に近く、埋土はブロック状を呈する砂混粘土質シルトの２層から成る。遺物は庄内式期新相に比定される土器が多く出土しており、出土状況は遺構に沿って中心ラインに並ぶような状況であった。170～189を図化した。170・171は小形丸底壺である。

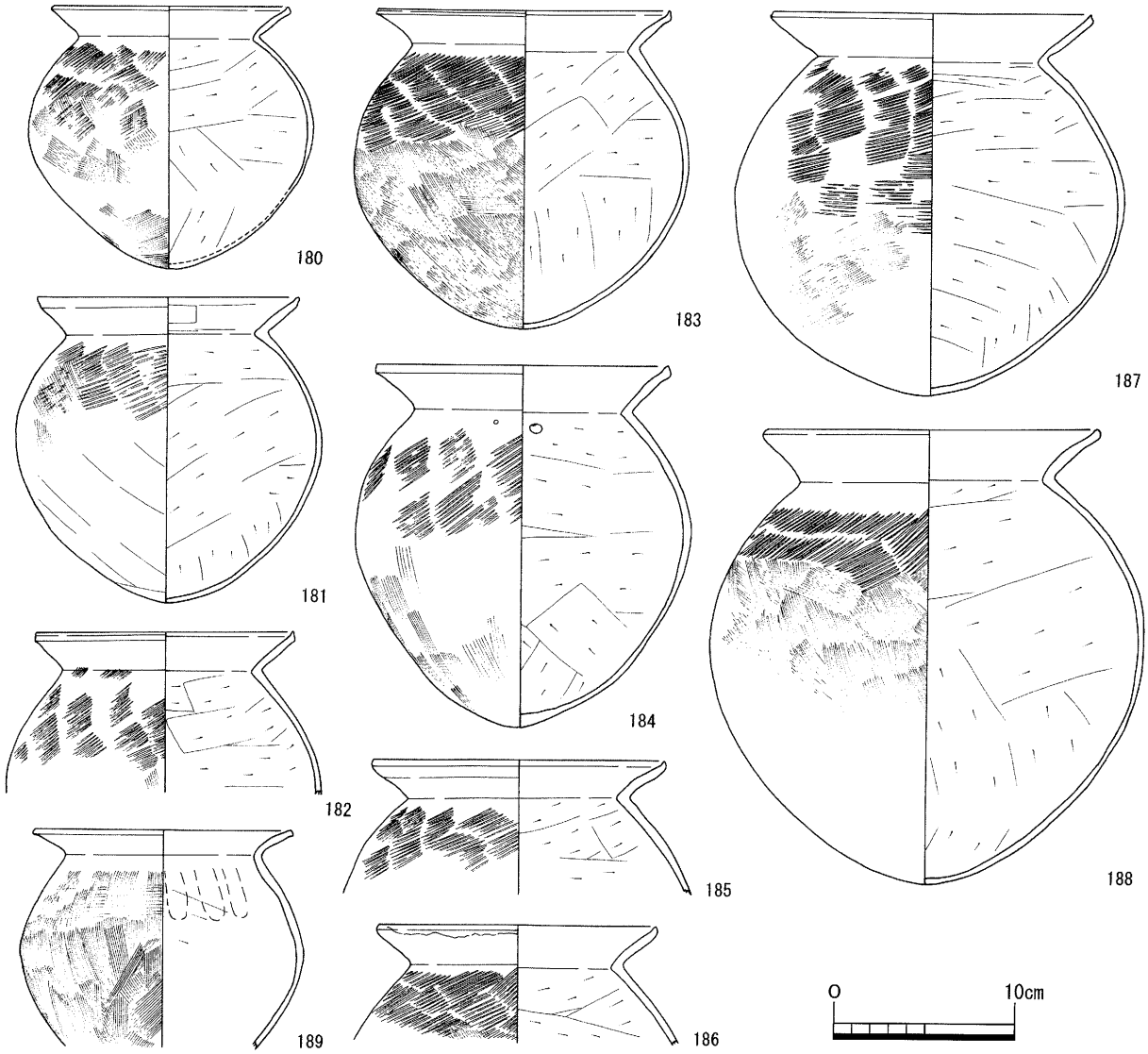


第41図　ＳＫ312平断面図



第42図　ＳＫ312出土遺物①

170は精製でヘラミガキを多用する。171は完形で、口径10.2cm・器高10.8cm・体部最大径11.2cmを測る。磨耗のため調整は不明瞭であるが、体部内面には上部のヘラケズリ、下部のハケが確認できる。胎土中には極めて多量の砂粒を含む。172は複合口縁壺で、口径12.0cmを測る。胎土中には５mm大までの砂粒を多く含む。173～175は広口壺である。口縁部形態は、173・174は口縁部が中位で外上方に屈曲し、175は緩やかに外彎する。口縁端部はいずれも上方に断面三角形に小さく肥厚する。調整は173・174がハケを多用し、175は底部外面ヘラケズリで、不明瞭であるが体部にはヘラミガキを施しているようである。175は底部に黒斑を有する。174は口径14.1cm・器高25.1cm、175は15.2cm・28.1cmを測る。これらは形態的に四国地方からの搬入品と考えられる。176は口縁端部を欠損する壺である。調整は外面の底体部下半ヘラケズリ、内面体部ハケ、底部ヘラケズリが確認できる。非常に器壁が厚く、胎土中に砂粒を多く含む。177は直口壺で、口径13.8cmを測る。調整はハケを多用し、肩部には先行するタタキがわずかに認められる。肩部に黒斑を有す



第43図　ＳＫ312出土遺物②

る。178は小形鉢で、口径8.4cm・器高4.6cmを測る。精良な胎土で、成形は手捏ねにより、調整はナデで、底部外面にクラックが顕著に見られる。179は手焙形土器で、覆部の一部を欠損する。口径15.1cm・器高15.7cm・底径15.0cmを測る。覆部は口縁部の上面に張り付けられ、覆部前端部は幅約２cmの帯状に肥厚し、前端面には２条の沈線を施す。調整は外面及び底部内面ハケ、内面及び底部外面ナデである。180～188は庄内式甕である。法量からは口径約14cmの小形(180～182)、約16cmの中形(183～186)、約18cmの大形(187・188)に分類できる。口縁端部は181が上外方にわずかに屈曲するもので、他は上方につまみ上げる形状である。189は口径14.5cmを測る。外面ハケ調整で、頸部は緩やかに屈曲し、口縁端部は外傾する面を成す。調整・形態からみて四国地方からの搬入品と考えられる。

ＳＫ313

２Ｃ区で検出した土坑で、ＳＫ312の東部を切っている。平面形は隅丸方形に近く、規模は東西約1.4m・南北約1.3mを測る。断面逆台形を成し、深さ約40cmで、埋土は上層が暗黄褐色細粒砂混粘土質シルト、下層が暗灰黄色細粒砂混粘土質シルトである。遺物は出土していない。

ＳＫ314

２Ｃ区に位置し、平面形は北東－南西方向に長い溝状を成す。規模は長さ2.6m・幅約0.6m・深さ約10cmを測る。断面逆台形で、埋土はブロック状を呈する暗褐色粘土質シルト(炭含む)の単層である。遺物は弥生時代後期末に比定される土器が出土しており、164～169を図化した。164は扁球状の体部を有する長頸壺で、口径7.6cm・頸部高7.0cm・体部最大径15.2cmを測る。調整は外面縦位ヘラミガキで、頸部最下位に刺突文を巡らせる。内面は口縁部及び底部ハケ、体部ヘラケズリである。165は壺で、口径7.0cm・器高12.6cm・底径4.1cmを測る。調整は板ナデを基調とし、底部外面には連続する細かい指頭圧痕が明瞭である。166は広口壺で、調整は口縁部外面板ナデ、内面ヘラミガキである。167は甕で、口径13.0cmを測る。口縁部に歪む部分があり、片口を有する可能性がある。168・169は鉢で、168は口径12.6cm・器高6.4cm、169は16.4・8.4cmを測る。調整は外面が168はタタキ、169はナデ、内面は共にハケである。これらの内166・169は生駒西麓産の胎土である。

ＳＫ315

２Ｃ区、ＳＫ313の南東部で検出した土坑である。平面不定形を成し、規模は東西約1.3m・南北約0.9mを測る。断面逆台形を成し、深さ約34cmで、埋土は上から暗灰黄色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト、暗褐色細粒砂混粘土、暗灰青色極細粒砂混粘土の３層から成る。遺物は庄内式期頃に比定される土器が少量出土している。

ＳＫ316

２Ｃ区に位置し、平面形は北東－南西方向に長い溝状を成すもので、ＳＫ314の南側で平行する状況である。またＳＫ315・ＳＤ321に切られている。規模は長さ約2.0m・幅約0.6mを測る。断面皿状を呈し、深さ約10cmで、埋土はＳＫ314と同様の暗褐色粘土質シルト(炭多く含む)である。遺物は出土していない。

ＳＫ317

２Ｃ区で長さ約3.2m西側の肩を検出したもので、北東に向かって緩やかに落ち込んで行き、調査区外に至る。深さ約10cmを測り、埋土は暗褐灰色細粒砂混粘土質シルトである。遺物は庄内式期古相に比定される土器が少量出土している。

ＳＫ318

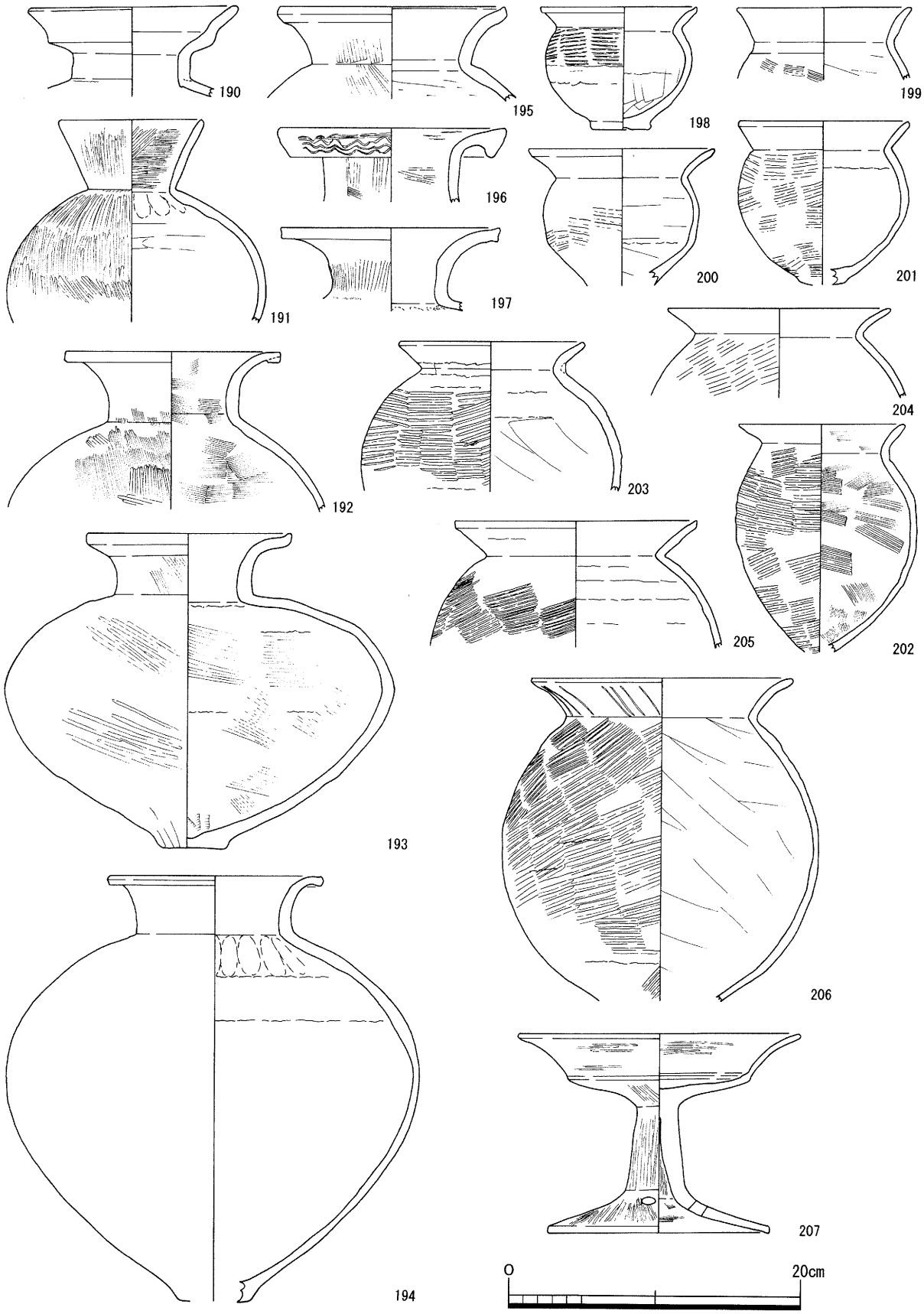
２Ｃ区で北側の肩を検出したもので、西はＳＩ301、南はＳＩ302に切られており、東は調査区外に至る。検出部分の規模は東西1.2m・南北1.9m・深さ約20cmを測り、埋土は暗褐灰色極細粒砂混シルト質粘土である。遺物は出土していない。

ＳＫ319

３Ｃ区で長さ3.2mに亘って北東－南西方向の肩を検出したもので、北西に落ち込んでいる。深さ約20cmを測り、埋土は暗褐灰色細粒砂混粘土質シルトである。遺物は出土していない。

ＳＤ301

１～２Ｂ区で検出した北西－南東方向の溝で、やや弧状を成し、南端では西に屈曲する状況である。中部では北肩からＳＤ302が、南肩からはＳＤ303が派生している。規模は検出長約12.5m・幅1.3～2.8m・深さ35～45cmを測り、底部には起伏がある。埋土は上から灰黄褐色細粒砂混粘土質シルト・暗黄灰色細粒砂混粘土質シルト～シルト質粘土・灰黄色細粒砂混シルト質粘土の３層



第44図　ＳＤ301出土遺物

から成り、南部では砂粒の含有が少ない。遺物は弥生時代後期末に比定される土器が、北部～中部で多く出土しており、２箇所で集積する部分がみられた。190～207を図化した。190は複合口縁壺で、口頸部のみ完存する。口径14.6cmを測り、調整は頸部外面のタテハケ以外は不明瞭である。191は直口壺で、口径10.2cmを測り、調整はヘラミガキを多用する。192～197は広口壺である。192は口径15.0cmを測り、調整はハケ後体部外面にヘラミガキを加える。口縁端部は粘土帯の貼付けにより下方に肥厚させている。193は口径14.3cm・器高22.4cm・体部最大径27.2cmを測る。扁平な体部を成し、口縁端部は短く上方に屈曲する。体部調整は外面ヘラミガキ、内面ハケである。194は口径15.0cm・器高29.9cm・体部最大径24.0cmを測る。磨耗のため調整は不明。体部に黒斑を有する。193・194は生駒西麓産の胎土で、５mm大までの砂粒を多く含んでいる。195は口径16.0cmを測り、調整は口縁部外面ハケ、体部外面ヘラミガキ、内面板ナデである。196は直立した頸部から口縁部が外反し、端部は粘土帯貼付けにより下方に大きく肥厚する。調整はヘラミガキで、口縁部外端面には櫛描直線文の後、櫛描波状文を重ねて施す。197は口径15.4cmを測り、調整はヨコナデで、頸部外面に縦位の板ナデを施す。口縁部上面に黒斑を有する。198～206は甕である。法量的に見て198～201が小形、202～204が中形、205・206が大形に分類される。202・203は口径では小形となるが、器高や体部最大径が大きく、容量では中形となろう。小形は口径10.9cm(198)～13.0cm(200)、器高9.6cm(198)～11.5cm(201)を測る。体部外面のタタキはいずれもほぼ水平に施される。中形は口径11.8cm(202)～15.6cm(204)で、器高は202が16.5cm程度を測る。203は補強のため頸部外面に粘土帯を付加している。大形は口径16.8cm(205)・18.2cm(206)を測る。205は他のものに比してタタキが細い。206は口縁部外面に平行斜線のヘラ記号を有する。207は有稜高杯で、口径19.8cm・器高13.9cm・脚底径15.4cm・稜径12.6cmを測る。調整はヘラミガキを多用し、裾部内面は板ナデである。裾部上位に４方孔を施し、裾端部に黒斑を有する。

ＳＤ302・303

ＳＤ301の両肩から派生し、平行して北西に延びる溝である。ＳＤ302は検出長約5.7mで、幅は東部で約0.5m、西部では広くなり1.2m以上を測る。ＳＤ303は検出長約5.3m・幅0.3～0.9mを測る。共に断面皿状を成し、深さ10～20cmで、埋土はＳＤ301の中層と同じである。遺物は出土していない。

ＳＤ304～320

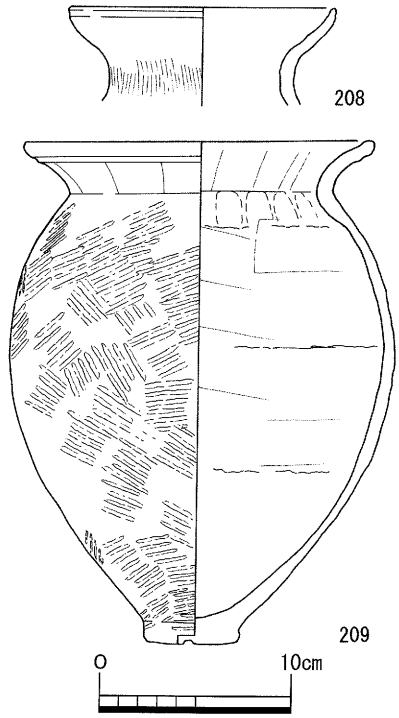
調査区中央付近で検出した溝群である。方向は北西－南東方向を基調とするが、合流するもの(ＳＤ305・307、ＳＤ312・313)、屈曲するもの(ＳＤ315)、交差するもの(ＳＤ317・318)がある他、直交する溝により連結するもの(ＳＤ308～310)も見られる。幅は30～50cm程度を測るものが多く、ＳＤ305・307・316が1.0m前後を測り広い。断面皿状～逆台形で、深さは10cm程度、埋土は暗灰黄色粘土質シルトである。遺物はほとんど出土しておらず、ＳＤ316から庄内式期に比定される土器が少量出土しているのみである。

ＳＤ321

２Ｃ区で検出したほぼ直角に屈曲すると思われる溝である。ＳＩ301～304から成る竪穴住居群に近接していることから、当溝についても竪穴住居の壁溝である可能性が高い。規模は南北長約3.2m・東西長約1.6m・幅約30cmを測る。断面椀形を呈し、深さ５～10cmで、埋土は灰黄色粘土質シルトである。屈曲部をＳＩ301に切られている。遺物は出土していない。

ＳＤ322

３Ａ区で検出した南北方向の溝で、検出長約5.2m・幅0.4～0.9mを測る。断面椀形を成し、深さ10～20cmで、埋土は褐灰色細粒砂混粘土質シルトである。遺物は弥生時代後期末に比定される土器が出土しており、208・209を図化した。208は広口壺で、調整は頸部外面に縦位、内面に横位のハケを施す。209は甕で、口径16.8cm・器高24.3cmを測る。体部外面は三分割成形に応じてタタキの方向が異なり、最大径部分は乱方向のタタキを施している。外底面に米粒大の窪みを有する。



第45図　ＳＤ322出土遺物

ピット

ＳＰ310～315はＳＢ301を構成するピットで、近接するＳＰ316も関連が考えられる。ＳＰ333～338はＳＢ302を構成するピットで、ＳＰ332・339～342が近接し関連が考えられる。ＳＰ356～373はＳＩ301～304に付随するピットである。ＳＰ343～349は竪穴住居の壁溝である可能性があるＳＤ321に隣接しており、同様に住居関連のピットと考えられる。これら以外に、調査区北西部にＳＰ301～309、南部にＳＰ317～326、北中部にＳＰ327～331、南東部にＳＰ350～355が散在しているが、企画性は認められず性格は不明である。遺物はＳＰ302・319・321・324・325・331・353・355から弥生時代後期末～古墳時代前期に比定される土器片が出土している。

第３章　まとめ

今回の調査では弥生時代後期～飛鳥・奈良時代の遺構・遺物が検出された。出土遺物はコンテナに35箱を数える。特に中心となる時期は古墳時代初頭～前期であった。

弥生～古墳時代では、第３面(弥生時代後期末～古墳時代前期前半)・第２面(古墳時代前期前半)の２面を確認し、竪穴住居・掘立柱建物・井戸等の多数の集落遺構を検出した。南東側の府センターによる「久宝寺南(その２)Ｈ地区」においても同時期の集落遺構が検出されており、その広がりが確認された。また北東部に当たる「同Ｆ地区」や、北部の「府教委1991年度調査地」、北西部の「大阪市文協84－１調査地(加美遺跡)」では、方形周溝墓を主とする当該期の墓域が確認されているが、当調査地では墳墓に関連する遺構は検出されず、当地までこの墓域は広がらないことが確認された。

第１面で検出した掘立柱建物(ＳＢ101)や溝(ＳＤ101)は、「久宝寺南(その２)」調査地で確認されている飛鳥～奈良時代の建物等と同一の方向を示しており、当時の集落の広がりが窺える。

註

註１　滝 斎　1993「2.久宝寺遺跡(91-479)の調査」『八尾市内遺跡平成４年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市教育委員会

参考文献

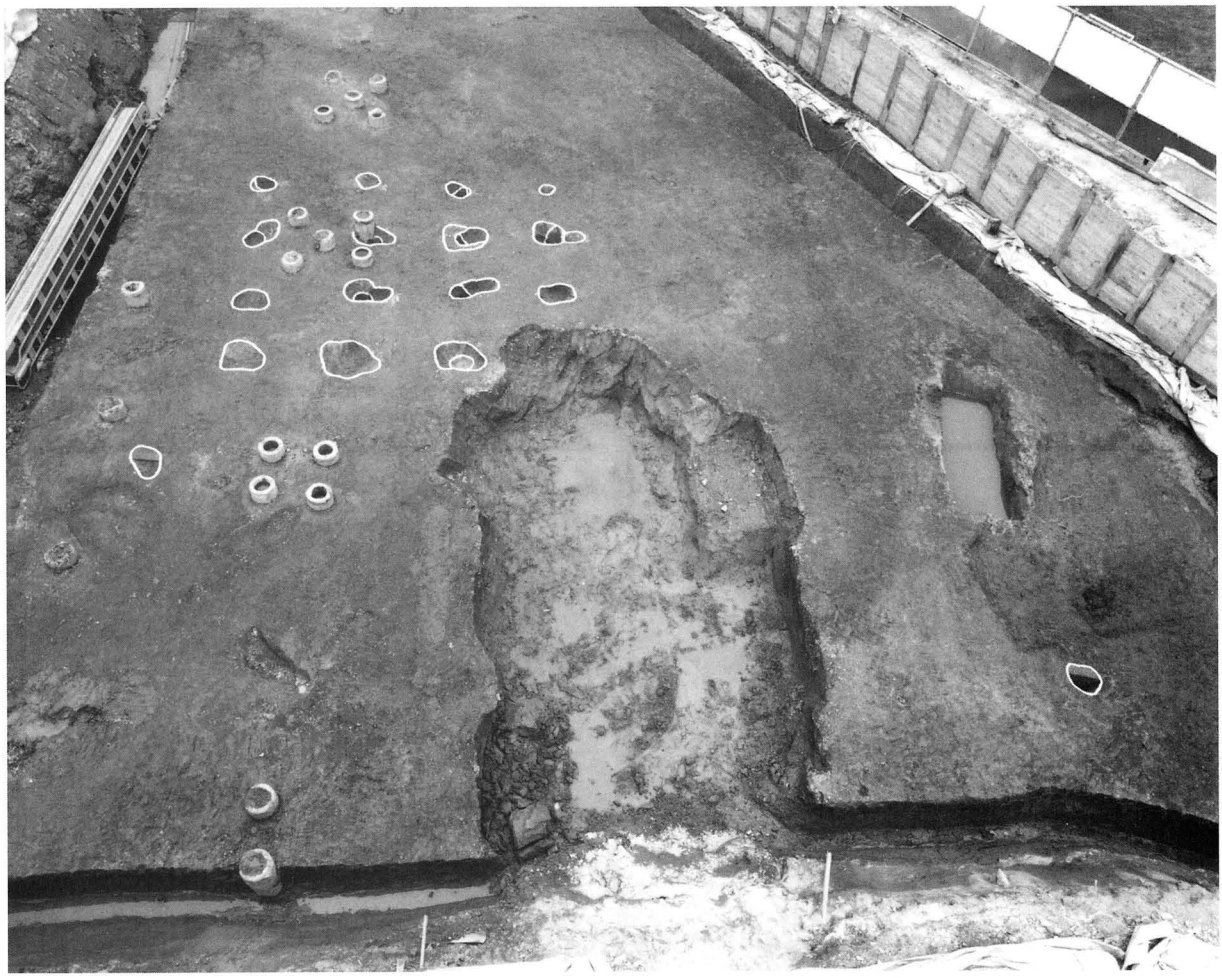
・(財)大阪府文化財センター2003『古墳出現期の土師器と実年代　シンポジウム資料集』
・原田昌則1993「Ⅱ久宝寺遺跡(第１次調査)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告　(財)八尾市文化財調査研究会報告37』財団法人八尾市文化財調査研究会
・上原真人編1993『木器集成図録　近畿原始篇　奈良国立文化財研究所史料第36冊』奈良国立文化財研究所
・一瀬和夫他1987『久宝寺南(その２)－久宝寺・加美遺跡の調査－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』財団法人大阪文化財センター

図　版

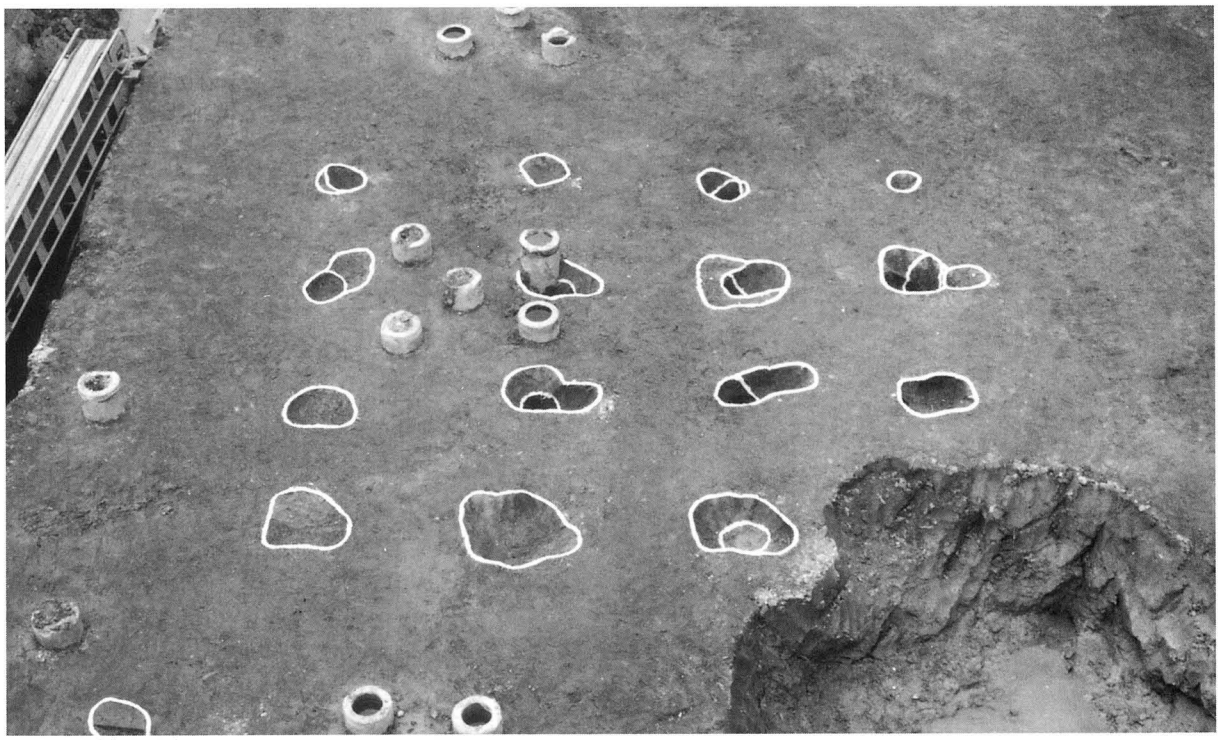
図版1

調査地周辺空中写真（平成８年３月６日撮影）

図版2

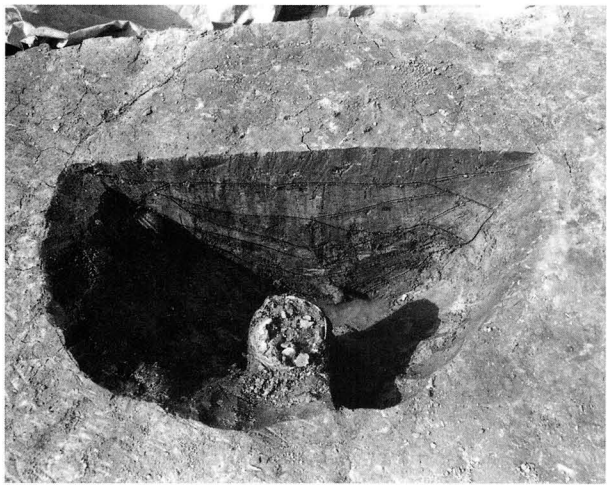


東区第１面（南から）



ＳＢ101（南から）

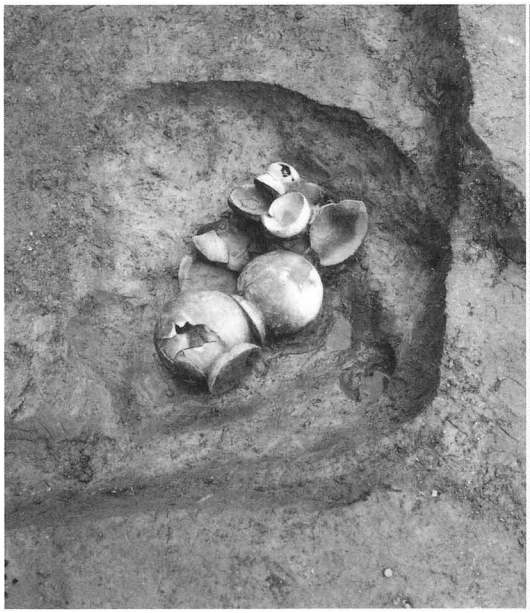
西区第２面（北から）



ＳＥ201（南から）

ＳＥ202（南西から）

ＳＩ201（南から）

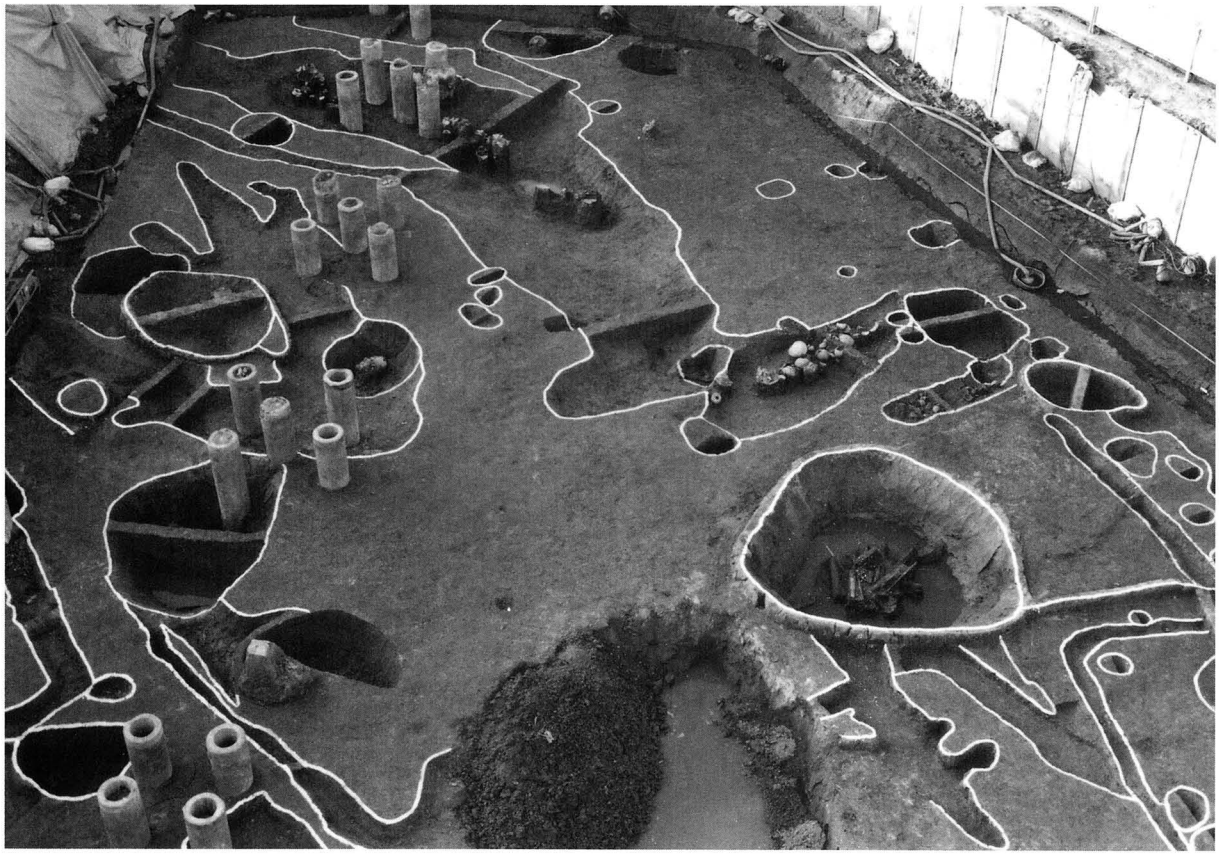


同K1（南から）

同遺物出土状況（北西から）

図版5

西区第３面（北から）

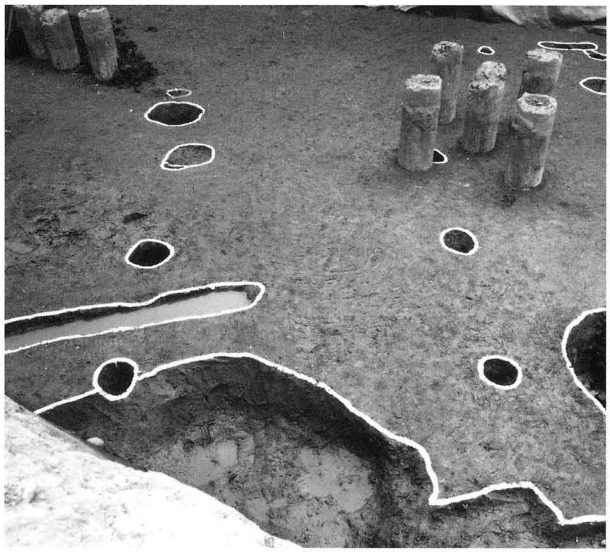


東区第３面（南から）

図版6

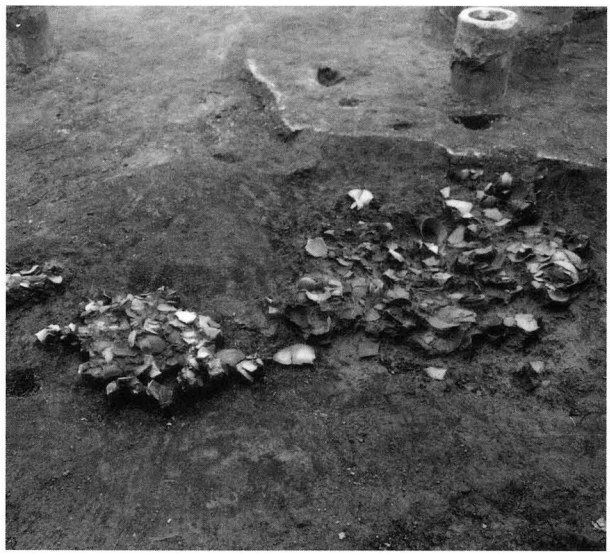
ＳＩ301～304（西から）

同上（南から）

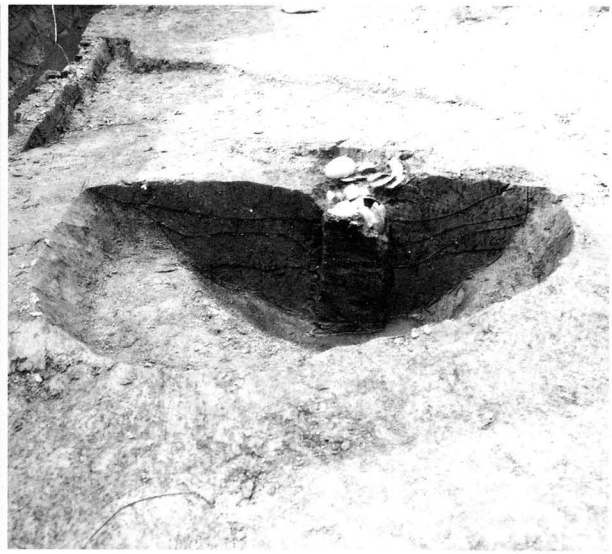


ＳＢ301（北東から）

ＳＥ301遺物出土状況（南東から）



ＳＥ303上層遺物出土状況（北から）



ＳＥ303（南から）

ＳＥ303完掘（西から）

ＳＥ305（北西から）